



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	二つの論争 : ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニンとの論争に寄せて (II)
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 17, 71-158
Issue Date	1973
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5029
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112963.pdf



二つの論争

——ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニン
との論争に寄せて——（Ⅱ）

外 川 継 男

〔目 次〕	（以下本号）
はじめに	V 「土地と自由」
I プロローグ	VI ゲルツェン、バクーニンと「ポーランド問題」
II 『再び古い主題による変奏曲』	VII ゲルツェン、バクーニンと「第一インターナショナル」
III ロンドンの『鐘』	VIII 『昔の同志への手紙』
IV 『終りと始め』 （以上第15号）	

V 「土地と自由」

さきに述べたように、¹⁾バクーニンがシベリアを脱出してロンドンのゲルツェンのもとにその姿をあらわしたのは、1861年も終わろうとする12月27日のことであった。

この1861年という年は、2月末から4月はじめにかけてポーランド各地に騒乱が発生する一方、ロシア国内においても3月5日の農奴解放令の公布以来、いたるところに農民の騒擾が相つぎ、6月には「檄文の時代」のさきがけをなす『大ロシア人』第1号があらわれた。これは解放令発布後の政府の無能な施策を非難し、国内の「教養ある階級」に対し、現状を黙視することなく、敢然と政府攻撃の声をあげるよう呼びかけたものであるが、ロンドンの『鐘』もさっそくこれを支援する論文をかかげた。即ち9月15日付の第107号にはこの『大ロシア人』第1号とともに、ニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチの執筆になると思われる『大ロシア人への回答』を、つづく10月1日付の第108号にはオガリョーフの『大ロシア人への回答に対する回答』をのせ、現状の変革をのぞんでいる「少数の人びと」が孤立分散した状態から脱却し、組織を作って、農民、兵士、分離派教徒、コサックといった幅広い人民大衆と同盟を結ぶよう訴えたのであった。²⁾

すでにこれより前『鐘』の7月1日付の第102号の巻頭に、オガリョーフは『人民には何が必要か？』と題する一文を発表していたが、その冒頭に彼は、「きわめて簡単である。人民には土地と自由が必要なのだ。」と記した。³⁾ この論文はのちに秘密結社「土地と自由」の最初の綱領ともいうべきものになるのであるが、この中でオガリョーフは実際に人民が土地と自由と教育とを受けられることができるようになるためには、以下の七つの条件が満たされなければならないとして、その主張を簡条書に述べている。

1) 拙稿「二つの論争（1）」、『スラヴ研究』No. 15, 1971, p. 62.

2) 拙稿「檄文の時代」、『スラヴ研究』, No. 16, 1972, pp. 164-172.

3) *Колокол*, IV, 853.

(1) 第一には、すべての人民に十分な土地が与えられなければならない。しかしその土地は個人ではなく、共同体が所有すべきである。

(2) 人民はその土地の利用に対し、国に税を支払うが、これは共同体の連帯責任であり、またその支払い額は現在国有地農民が払っている額を越えてはならない。

(3) 地主の三百年に及ぶ土地所有は本来不法なものとはいえ、人民は彼らへの報復をのぞんでいるわけではない。したがってもとの地主に対しては国税の中からしかべき額（たとえば年六千万ルーブリ）を報償金または補助金の形で支払うことがみとめられよう。

(4) ロシアの人民は平和を欲しており、現在の如き多額な軍事支出は半分におさえられるべきである。これだけでも年六千万ルーブリが浮くことになり、地主への支払いもこれによって可能になるろう。

(5) 現在のツァーリ政府の無駄な支出も削減すべきであって、もっと道路や学校など人民に役立つ施設にあてるべきである。

(6) 人民に対しては、共同体においても郷においても自治を認めよ。また各共同体農民の連帯保証を軽減させるために、共同出資によるミール資金の創設をはかり、その運用を人民に委ねよ。

(7) 土地と自由を獲得するために、ツァーリが恣意的に課税できないよう、人民自身をして税の割当を決めさせよ。これは村にはじまり、郷、郡、県をへて国にまで及ぶべきである。⁴⁾

ここに主張された農民への土地分与、農村共同体の重視、軍事支出の削減、国庫支出と課税の公正化といった考えは、いずれもこの年の春に書かれてロンドンの自由ロシア出版所で印刷されたあと、9月はじめにロシア各地にばらまかれたシェルグノーフの檄文『若き世代へ』の中にも見出されるところである。⁵⁾ 事実研究者の中にはシェルグノーフとともにこの檄文の作製に加わったミハイロフのオガリョーフへの影響を指摘する者もいるが、⁶⁾ どちらかといえば、『若き世代へ』の方がよりラジカルである。⁷⁾ いずれにしてもこのオガリョーフの論文『人民には何が必要か?』には、ひとりオガリョーフのみならず、当時のロシアの反体制的インテリゲンツィアの志向が反映されているとあってよく、事実この文書の作製には、のちに秘密結社「土地と自由」の指導的メンバーとなるニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチや、ニコライ・オーブルチェフ、アレクサンドル・スレプツォーフらが参加していたといわれている。⁸⁾ そしてこの論文に対するロシア国内からの需要も多かったために別刷の形でも印刷され、⁹⁾ かなりの部数¹⁰⁾ がロシアに持ちこまれて

4) *Колокол*, IV, 854-855.

5) 『檄文の時代』, pp. 178-183.

6) Е. Л. Рудницкая, *указ. соч.*, стр. 249.

7) 『檄文の時代』, p. 183.

8) Н. П. Огарев, *Избранные социально-политические и философские произведения*, т. 1, М. 1952, стр. 843.

9) Там же, т. II, стр. 452 (1861年7月21日付オガリョーフのシェルグノーフあて手紙)。

10) レムケは数万部といっているが、これは疑わしい。(レムケ版、『ゲルツェン全集』, 第11巻, 136頁)。

二 論争

配布された。

のちにオガリョーフが秘密結社の名称についてゲルツェンに相談したとき、ゲルツェンは「君自身すでに数ヶ月前に言っているだろう。勿論『土地と自由』だ。」と答え、これがそのまま結社の名前になった。¹¹⁾

さらにこの年9月からは、ペテルブルグ大学を皮切りに、ロシア各地の大学・高専に学生運動が起った。この中でニコライ・ウーチンをはじめとてかなりの数の学生が放校になったが、¹²⁾ 中には長期に及ぶ大学の閉鎖に見切りをつけて、みずからすすんで退学し、外国、とくにドイツの大学に留学する学生も少なくなかった。このようなロシア人学生のうち、とくにハイデルベルグ大学に留学したウラジーミル・バクストラによってコロニーが形成され、彼らもまた秘密結社「土地と自由」に関係するようになる。

ロンドンにあらわれたバクサーニンは「身を落着けるやすぐにそこにいたすべてのポーランド人、ロシア人と知己になり、仕事にとりかかった。」¹³⁾ 彼がまず最初に『鐘』に発表した論文は、1862年2月15日付第122-123合併号の巻末に附録の形で掲載されたかなり長文の『ロシア、ポーランド、すべてのスラヴの友らへ』と題する一文であった。そしてこの論文を紹介するにあたって『鐘』の編集部はつぎのような一文を添えている。

「われわれは附録にバクサーニンの**第一の論文**を印刷する。かくも長く……独房においても雪の荒野においてもその強さと力とを失うことのなかった彼の言葉は、当然『鐘』に属するものである。」¹⁴⁾

これにつづくバクサーニンの文章は以下の言葉で始まっている。

「さまざまな要塞監獄における八年間の拘禁、四年間のシベリヤ流刑のあとで私は首尾よく自由の身となった。私は年老い、健康を失い、あの幸福な若者たちに向うに敵なき力を与えるところの四肢の若々しい弾力を喪失した。しかしその代り、今でもあらゆるものに打ち勝つ思想の剛毅さは持っている。心と意志と情熱によって、友への、偉大な共通の事業への、自分自身への信念は保持している。今や私はわれわれと同じ体験を持った古き友、若き、われわれと同じ思想、同じ意志に生きる友人たる諸君の前にあらわれた。そして私は諸君に懇願する。ふたたび私を諸君の仲間に加えてくれるようにと。諸君の中において、諸君とともに、私の残された人生を**ロシアの自由のための、ポーランドの自由のための、そしてすべてのスラヴ人の独立のための戦い**に捧げることが許してくれるようにと。」¹⁵⁾

このような書出しではじまった『ロシア、ポーランド、すべてのスラヴの友らへ』はそ

11) Герцен, XVII, 372. Рудницкая, указ. соч., стр. 248 (この有名な挿話は、アレクサンドル・スレブツォーフの『回想』に出てくるが、結社の名前がつけられたのは1862年8月中旬のことであった。)

12) 『檄文の時代』, p. 189, 193.

13) Герцен, XI, 359.

14) Колокол, V, 1020. (強調-原文)。

15) Колокол, V, 1021. (強調-原文)。

の中で以下の如き主張を展開している。

今やロシア、オーストリア、トルコの崩壊は不可避である。この廢墟の中からイタリア人、ギリシャ人、ルーマニア人、マジヤール人、そして偉大なスラヴの同胞が自由を獲得し、新しい文明を生むことであろう。

今日のロシアは重大な変革の前夜にある。クリミア戦争と30年にわたるニコライの統治の冬のあと、春が訪れたかに見え、人びとは期待に胸をふくらませたが、それも長くは続かなかった。一度に何千もの問題が生まれ、何を要求すべきか、どこに行くべきかをめぐって人びとの意見が二つに分れた。それは**改革派**と**根本的変革派**である。前者は国家の根本には触れることなしに、国力の回復を考えている。しかし彼らはクリミア戦争の敗北とともに、ニコライの死とともに、ピョートルの作った国家の最後の一片が死滅したという一事を忘れている。このロシア帝国の崩壊と時を同じくして、オーストリア、トルコ両国もまた崩れ去らんとしているが、このことは必ずしも同じことを意味しない。即ち、たとえロシア帝国が崩壊し、ポーランド、白ロシア、リトワニア、小ロシア、グルジア、フィンランド等が独立したとしても、そのあとには四千万の大人口を有する**大ロシア**が残るからである。この大ロシア人こそ知的で、才能に富み、歴史的にも若く、未来ある人種なのだ。そして昔から純スラヴ的な社会・経済制度を維持しつづけてきたのである。いまやロシアの人民は自分たちがこの国の政治生活に、歴史に参加していることを自覚している。もしこの人民に対して、**完全な土地所有とともに完全な自由**が与えられなければ、ツァーリにとっても貴族にとっても悲惨な結果が生ずるのである。

貴族の中にもわずかながら良心的なものがある。(デカブリストの一引用者) ペステリがそうであった。彼はたしかにすぐれた天才で、社会的、経済的革命的不可避性と自由なスラヴ連邦とを最初に予見し得たが、それでも失敗に終わった。それは彼が人民とともに行動し、人民とともに生きなかったからである。今日ではこのような良心的な貴族の数は何千にも達している。しかし彼らは未だに貴族の特権だけでなく、貴族そのものを廃する必要性を理解してはいない。彼らはみずからの特権の維持をツァーリに求め、それとひきかえにツァーリを支持する約束をしている。ここしばらくは、彼らが憲法でみずからを慰め、議会遊びをするのをほっておけばよいだろう。われわれが待つのもそう長いことではあるまい。

しかしロシアにはもう一つの力がある。それは一つの階級ではなく、むしろ階級そのものを否定するものである。それは貴族から農民にいたるあらゆる階級から出て、人民のために仕事し、人民との合体を強くのぞんでいる人びとである。彼らは**生きた言葉**を武器にして、人民を目覚めさせようとしている。いま私が呼びかけているのは、まさにこのような人びとに対してである。そして私はこれらの人びとに質問したい。「われら何をなすべきか？」と。

第一になすべきことは、自覚的な合目的な**人民の党**を組織することである。このためにはロシアに沢山の人の送りこみ、できるだけ多くのパンフレットを配布し、全ロシアに無数の活動家のサークルを作り、それらを一つの組織に**結合**することが必要である。

第二には、声を大にして結社の目的を述べることである。目的とは何か？ **人民の王国**

二つの論争

の到来以外にありえようか？ われわれは人民のみを愛し、人民のみを信じ、人民の欲するところのみを欲する。しからば、人民には何が必要か。『鐘』とともにくりかえしている。**土地と自由**だと。しかし人民に必要なのは一部の土地ではない。**全ロシアの土地**である。そして個人の土地所有権は廃止され、他の人びととの共有の形で土地を所有するようになるべきである。すべての土地の権利が人民にのみ属し、すべての土地が共同体によって所有されることこそ根本的な全スラヴ的原理であり、その完全な実現こそスラヴ民族の歴史的使命なのである。

人民には真の**自由**が、信仰、言論、営業、集会の自由が必要である。そしてこの自由が現実のものとなるためには、人民の**自治**が必要になってくる。だがロシアの自治とはヨーロッパのそれの如く上から下へではなく、下から上への自治であり、共同体から始まり、人民の自発的な賛意にもとづいて、州、国家、そして全スラヴ連邦の統治にまでつながるものでなければならない。このことは『鐘』の紙上でもくりかえし述べられたところであるが、その際に忘れてはならないのは、われわれは人民の教師ではなく、単なる先駆けにすぎないということである。われわれの仕事は人民の進むべき道を掃き清めることであり、これは本質的に理論よりも**実践**に属することがらである。われわれは**教条主義者**であってはならず、憲法を作ったり、前もって人民に法律を与えたりするようなことがあってはならない。

第三にわれわれはすべての**スラヴ人**に手をさしのべるべきである。しかし何よりもまずもって凌辱されたわれわれの同胞たる**ポーランド人**にこそ手をさしのべなければならない。彼らの運命はわれわれの運命と分ちがたく結びついている。彼らの事業はわれわれの事業であり、彼らの隷属はわれわれの隷属であり、しかして彼らの独立と自由はわれわれの自由なのだ。ポーランドを領有している限り、われわれは心ならずもオーストリアやプロイセンとの同盟にとどまっていなければならない、またそのための**軍事力**はロシア国内においても抑圧の武力となっている。われわれがポーランドを抑圧しているかぎり、スラヴ世界への道はない。

しからば**いかにしてポーランドを解放するか**？この点でポーランド人はあまりにも多く要求している。彼らは昔の国境にそった全ポーランド王国の再建をのぞんでいるが、これは大きな誤りである。しかしこの誤りは理解できるところであり、許しうるものでもある。というのもみずからの国民性を奪われ、かくも抑圧されている彼らは、自分たちの過去をつらい気持で見つめているからだ。しかし過去の栄光に目を奪われて現在の問題を見失ってはなるまい。過去のポーランド王国は騎士の、貴族の国家であって、そこでは人民は奴隷であった。さらにまたリトワニア、白ロシア、ウクライナ、リヴォニア、クールランドといった地方の農民が欲しないとしたり、どうして彼らの住んでいる土地をポーランドに合併できるであろうか？彼らもまたロシアの農民と同じように**土地と自由**を必要としているのだ。今日ポーランド人はわれわれに不信感を持っている。ロシアの軍隊がポーランド人を殺し、婦女子すら蹂躪している以上、これは無理からぬところである。されば忍耐と愛と正義と自由の行為をもってこの不信感を克服しなければならぬ。われわれは兄弟となろう。これはわれわれに共通のスラヴの事業にとって不可欠なことである。真の友情に

は率直さが必要だから私は腹藏なく、くりかえして言う。ポーランド人がウクライナ人の意志を聞かずに合併を欲しているのは間違いであると。私はウクライナは小ロシアやガリツィアとともに、**ポーランドにもロシアにも属さず**、独立すべきだと思う。全ウクライナは、白ロシア、フィンランド、ラトビア、クールランド、リヴォニア、リトワニア、ポーランドと同じように、またオーストリアとトルコ治下の全スラヴ人とも同じように、ロシアとともに全スラヴ同盟の独立した一員となるべきである。彼らがポーランド連邦に、あるいはロシア連邦に、あるいは全スラヴ連邦に加入するか否かは彼らの意志で決めればよいことだ。かくして国境問題はフォブ（ホローブ）のポーランドと農民のロシアのいずれが先に実現するか、ということに帰着する。

ロシアの人民はまもなく自らの土地と自由を獲得するであろう。そうなれば他人の土地は必要ではなくなる。われわれが隣接諸民族の自由と独立を認めるなら、彼らとの結びつきは現在よりもはるかに強化されよう。その上でわれわれは西プロイセン、ポズナン、シロンスク（シュレージエン）、ブコヴィナ、ガリツィア、大チェコ、全オーストリア、全トルコのスラヴ人の土地を守るために、共通のスラヴの戦いに力をあわせるであろう。

ロシアの解放は全スラヴ民族、とりわけ、ポーランドの解放と結びついている。ロシア人の手によってポーランド人の血が流されていることに対しては、われわれ全ロシア人に責任がある。この責任をつぐなうためには、言葉だけでは足りない。実際の行動が必要である。問題は**ポーランドがこの事業のためにわれわれに手をさしのべてくれるか否かにある**。共通の敵と戦うためには共同行動が必要である。一致して行動するためには**合意がなければならない**。¹⁶⁾

以上かなり詳細にバクーニンがロンドン到着後最初に発表した論文を見てきたが、論旨はきわめて明確である。しかし一般にこの論文については彼のシベリア脱出直後ということもあって、多くの研究者（たとえばスチュクロフも、また彼に負うところ大きい E. H. Carr も、また最近のソビエトのバクーニン研究家ピルーモヴァも）はこの中に 1848-49 年当時とまったく変ることのない主張、同じ調子を見ている。¹⁷⁾そしてその原因はいずれもゲルツェンの回想¹⁸⁾に由来していると推測されるのであるが、これを先に述べた当時のさまざまな論文や檄文とあわせて考えると、ここには新しい情勢に対するバクーニンの見解がかなり明瞭に打ち出されているといわざるをえない。即ちまず第一にバクーニンはロシア国内に反体制的サークルを作り、それらを一つの組織に結集すべきだと述べているが、これはオガリョーフの『回答への回答』にも見られる主張であり、次にバクーニンがロシア国内の改革勢力を二分して考察しているところは、これもまたオガリョーフの同じ論文に見出されるところである。第三として指摘されるのは、農民の土地と自由に対する要求を全面的に支持しつつも、土地が個人ではなく、共同体に属すべきだとの考えである。これもいままでに見たようにオガリョーフの『人民には何が必要か?』など、『鐘』

16) *Колокол*, V, 1021-1028. (強調-原文)。

17) Ю. Стеклов, *М. А. Бакунин, Его жизнь и деятельность*, т. 2, М. 1927, стр. 32. E. H. Carr, *op. cit.*, p. 255-256. Н. Пирумова, *Бакунин*, М. 1970, стр. 175, 187.

18) Герцен, XI, 353-374. とくに 359-360.

二つの論争

の中でくりかえし述べられた主張であることは、文中でバクーニン自身も述べている通りである。最後にポーランドの独立と自由がロシアの自由と不可分の関係にあり、将来の国境問題の解決の基礎には民族自決権がその基礎に置かれるべきだとの見解もまた、すでに1859年の初頭に書かれたゲルツェンの論文『ロシアとポーランド』¹⁹⁾や、オガリョーフの『回答に対する回答』、『大ロシア人』第3号、『青年ロシア』にも述べられているところである。²⁰⁾ このように考えるならば、ロンドンに到着してから一ヶ月の間に、バクーニンがゲルツェンやオガリョーフから当時の情勢についていろいろ聞いたばかりか、『鐘』やいくつかの檄文をも読んでロシア国内の反体制運動について、学ぶところが少なくなかったと推測されるのである。しかし、この『ロシア、ポーランド、すべてのスラヴの友らへ』には、ゲルツェンやオガリョーフの上述の論文にはない、やはりバクーニン独自の主張が存在した点も見落すことはできない。即ち、第一に指摘すべきはゲルツェンやオガリョーフにあったポーランド側からの一方的な時機尚早の蜂起に対する警戒心がまったく見られないということ、第二には、はやくもここに色濃く見えている彼の無政府主義的国家観の存在である。この論文の中で彼は国家の主要な欠陥が国家そのものの原理に由来するものであることを明瞭に述べている。そして最後にロシア国内の改革派に対するバクーニンのきびしい批判的態度も、ゲルツェンやオガリョーフとの対比において指摘されねばなるまい。バクーニンはここで当時のロシアに存在したいわゆる自由主義的貴族の要求した憲法や国会創設の動きに対しては、はっきりと否定的態度をとっている。²¹⁾ そして彼のこのような否定的態度が、文章全体のきびしい調子と相まって、当時のバクーニンとゲルツェンの見解との間に微妙な相違が存在していたことをわれわれに示している。そしてこのような両者の溝が、その後数ヶ月の間に次第に幅を広げてゆくのを以下においてわれわれは見るであろう。いずれにしてもバクーニンのこの論文は、文末に「次号に続く」と予告されながら、ついに『鐘』に連載されることなしに終わった。はたしてその理由がゲルツェンの拒否にあったのか、それともバクーニン自身執筆しなかったことによるのかは断定しがたい。²²⁾ しかしロンドンに到着後次第に拡大していった両者の間の溝については、ゲルツェン自身『過去と思索』の中でつぎのように回想している。

「バクーニンは『鐘』を革命化しはじめた。そして1847年にベリンスキーについて言ったのとほとんど同じことを1862年にわれわれに反対して言った。宣伝だけでは足りない。どうしても付け加えなければならない。センターや委員会を作る必要がある。近い人、遠い人だけでは足りない。『献身的な、半献身的な兄弟たち』が必要なのだ。地方に

19) 後述。

20) 『檄文の時代』, p. 169, 174, 202.

21) バクーニンはこの論文のあと、同じロンドンの自由ロシア出版所から『人民の事業。ロマンノフ、ブガチョーフ、あるいはベステリ?』を出版し、その中で全人民の「全国議会(ゼムスキー・ソボール)」の設置を要求しているが、これと当時の自由主義的貴族の国会設立の要求とを同一視することは出来ない。それのみか、このあとバクーニンは、この要求自体を引っ込めて、人民蜂起の戦術を打ち出すようになる。

22) スチュクローフはゲルツェンがこの続きを『鐘』にではなく、当時自由ロシア出版所から発行していた『ロシアからの声』にのせるよう提案したのをバクーニンが拒絶したためとしている。ゲルツェンの提案理由は、『ロシアからの声』には編集部に送られた意見がそのままの形で掲載されるので、自分個人としては、その内容に責任をとる必要がなかったからであった。См. Стеклов, Указ. соч., т. II, стр. 105.

組織を、——スラヴの組織を、ポーランドの組織を作らなければならない。バクーニンにはわれわれがなまぬるいように思われたのだ。当時の情勢を利用することができず、好ましい決定的な手段を十分利用することができないように思われたのである。しかし彼はくよくよしなかった。そしてすぐにでもわれわれを正しい道に立たすことができると信じていた。」²³⁾

バクーニンにしてみれば、目的がはっきりしている以上、躊躇する理由はまったくなかった。内外の情勢からしてもただちに行動を開始すべきだと信じていたのである。しかしゲルツェンの方は当時の体制側、反体制側の力関係を比較考量し、さまざまなファクターをも十分考慮に入れていただけに、ただちに行動を開始することにははなはだ懐疑的であった。この点でたとえ目的が同じでも、とりうべき手段という点では両者の間に大きな見解の相違があったのである。そしてバクーニン自身もこの相違を1862年3月に書いたと推測される以下のゲルツェンとオガリョーフあての手紙の中で認めている。

「たとえばくの自尊心を犠牲にしても、また第二義的な重要性しか持たぬとはいえ、ぼくの確信を犠牲にしてさえも、完全な合意に達するためにあらゆる手段を講ずることなしに君たちに反対行動をとることは、いや君たちと別々に行動することすら、ぼくには犯罪だと思われる。とりわけ、われわれは目的では一致しており、多分方法と手段においてだけ違っているのだから、犯罪的なばかりか、愚かなことですらあるように思われる。君たちは一つの力を作った。このような力をもう一つ作り出すことは容易なことではない。才能という言葉だけを単に文学上のことに限らずもっと一般的な意味でいっても、ぼくにはゲルツェンの才能はない。しかしたとえ君たちが認めなくとも、ぼくには有用で高潔な力がある。ぼくはこのことを知っている。それを無為に帰することは欲しないし、またその権利もぼくにはない。この力が君たちとの結合の中に現われ、作用することがないとの確信に到達したときには、勿論ぼくは君たちから離れて、手段においてもやり方においても自分自身の行動をとるだろう。そしてぼくは、これによってまず君たちにはいかなる損失もかけないかわりに、ぼく自身の方は大きな支柱を失い、またわれわれの読者の面前で多くのものを失うことも十分自覚している。

ぼくはロンドンにやってきた時抱いていた確信を一片たりとも失ってははいない。そしてどんなことがあっても、どれほど困難であろうと、君たちの友となり、君たちの同盟の第三番目の人間になろうという固い気持を持ち続けている。もしわれわれの結びつきが可能なら、この形が唯一の条件だが、それが駄目ならわれわれは同盟者、そう、友人となろう。しかし完全に独立した、互いに責任のない形においてだ。

返事は急がないでくれ、ナルバーンドフ²⁴⁾が来た。それで置手紙をしなければならぬ。しかし書きを書こう。しかしそれまでにぼくの論文を返すよう指示してほしい。勿論、最初の印刷に要した費用はゲルツェンのところにある金でうめてもらいたい。そして印刷されたのをぼくに送ってくれ。

23) Герцен, XI, 359-360. (強調-原文)。

24) 後述。

二つの論争

頓首 M. バクーニン²⁵⁾

この手紙の中にもバクーニン一流のひとりよがりとともに率直さがにじみ出ている。しかし自分とゲルツェンとの関係がもはや当初の希望したようなわけにはゆかないだろうとの自覚もはっきり見てとれる。全体の調子は双方の一体化をのぞむより、むしろこれからは自分は自分の道を歩くから、という感じである。

このあと二ヶ月ほどしてゲルツェンはオガリョーヴァ-ツチコーヴァにあて「バクーニンは相かわらずうまくいっていない。始終話し合っているが、それでもやはり退屈だ。」²⁶⁾と書いたが、これからも両者の関係がますます気まずいものになっていったことがわかる。この手紙よりも五日前にミシュレーにあてた手紙の中でゲルツェンは「バクーニンは……われわれと一緒に仕事をしています。われわれは常に前進しています。」²⁷⁾と書いているが、この方は第三者に対するよそゆきの言葉であって、気心の知れた相手への先の手紙の言葉が彼の本意であったに違いない。そしてこのツチコーヴァ-オガリョーヴァへの手紙の直前に、ゲルツェンはバクーニンへあて手紙を書いて、今後自分たちの関係を「親しき、同盟的な近さ」と考えたいと告げたいらしい、というのはこのゲルツェンの手紙は失われたからだが、これに対する5月20日付の以下のようなバクーニンの短い手紙は残っている。

「友よ、君たちは正しい。『親しき、同盟的な近さ』、これこそぼくが君たちに対してあるべき関係だ。しかしこの関係を有効なものにするためには、はっきりと定義する必要がある。われわれの間で個人的な説明は、もうこれ以上必要ではあるまい。ぼくの心は満足している。君たちがぼくの手紙を真剣に受けとって、そこに苛立った表現をさがし出そうとしなかったことに感謝している。ぼく個人としてはこれ以上何ものぞむところはない。しかし多くの事柄について君たちと会って話したり、手紙で話合う必要を感じている。それ故ぼくの考えが固まるにつれ、君らに手紙を書くことは許してもらいたい。もう一度礼を言う。そしてさよならを。

頓首 M. バクーニン²⁸⁾

「親しき、同盟的な近さ」とははなはだ微妙な表現である。ロシア語としてもやや奇妙な表現といえよう。バクーニンも認めた文学上の「ゲルツェンの才能」が生みだしたものでどうかはともかくとして、この言葉の言外に含まれる気まずい関係が双方の間に今後ながくあとを引くことになるのである。

*
* *

ところでロンドンに来たバクーニンは革命の事業のほか、イルクーツクに残してきた

25) *Письма Бакунина к ……* стр. 194–195.

26) Герцен, XXVII, 226. (1862年5月20日付)。

27) Там же, 223. (5月15日付)。

28) *Письма Бакунина к ……* стр. 195.

妻のアントーニア（アントニーナ）をなんとかしてロンドンに呼びたいと奔走していた。しかしそのためには少なからぬ旅費もいるし、またロシア政府に妻の旅券を出させる手段も講ずる必要があった。しかしゲルツェンはこのバクーニンの妻を招く計画には賛成ではなかった。²⁹⁾ そこでバクーニンはパリにいるツルゲーネフ（彼は近くロシアに帰国する予定だった）と、当時イタリアを経てパリに来ていたアルメニア出身のナルバンジャン（前のバクーニンの手紙に出てきたナルバンドーフのこと）が、ロシアに帰国するのを機会に、この件について助力を依頼したのである。しかしただちに妻をロンドンに呼ぶことはいろいろ困難が伴うので、バクーニンは妻をひとまずイルクーツクから自分の弟妹の住むトゥヴェーリ県のプレムーヒノ村の領地へ移すことを考えた。³⁰⁾ そこで彼は自分の弟たちの名義でツルゲーネフから2,000ルーブリの金を借りることにして、これをナルバンジャンが受け取って、できるだけ早く妻のもとに送金してもらうように頼んだ。このナルバンジャンあての手紙³¹⁾の末尾にバクーニンは「訓令」として、いかにして自分の弟妹に首尾よく会って手紙を渡すべきかを詳細に書き記しているが、さらに今後の自分との通信のために、20余人の人名と地名その他の暗号とを書き送った。しかしこれは暗号というにはあまりにも単純なもので、それによればバクーニン自身はババルイキン、ゲルツェンはトゥーゼンハウゼン男爵、ツルゲーネフはラリオン・アンドレーヴィチ、そしてロシア政府はドゥルノーフ³²⁾といった変名になっていたにすぎず、第三部ならずとも多少でもバクーニンの事情に通じている者なら誰でも容易に察しがつくものであった。しかしバクーニンはこれでも足りないと思ったのか5月10日付の手紙で、自分の名前をブルイカーロフに変更するとともに、さらに「辞書への増補」として8項目を付け加えたが、彼にいわせれば、「これで君はペテルブルグから確実に全然危険のないやり方で、私と通信ができる」³³⁾ということであった。

しかしロシアに戻ったナルバンジャンは、七月に逮捕されて、その後三年間というものをかつてバクーニンも収容されていたペテロパヴロフスク要塞監獄にすごす破目になった。³⁴⁾ というのは、7月6日にロンドンをたって、ロシアに帰国するパーヴェル・ベトウーシニコフなる人物が、ゲルツェン、オガリョーフ、バクーニンらの手紙を持参するということがスパイの情報からロシア政府の知るところとなり、7月17日に彼が国境で逮捕されたときに、バクーニンの前記ナルバンジャンあての手紙も発見されたからである。³⁵⁾ そしてこれと時を同じくして、政府はかねてから目をつけていたチェルヌィシエフスキーやニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチを7月19日（露暦7月7日）に逮捕し、これによって形成途上にあった「土地と自由」に大きな打撃を与えた。³⁶⁾ この逮捕をきっかけと

29) Герцен, XVII, 218 (1862年4月21日付ツルゲーネフあて手紙)。

30) Лемке, *Очерки* стр. 75 (1862年4月24日付バクーニンのナルバンジャンあて手紙)。

31) Там же, стр. 76 (1862年5月6日付)。

32) これは дурной (悪い, 不快なの意) から来ているのであろう。

33) Там же, стр. 81.

34) М. Налбандьян, *Избранные философские и общественно-политические произведения*, М. 1954, стр. 15.

35) Лемке, *Очерки* стр. 19-20, 27, 74.

36) Лемке, *Политические процессы* стр. 182.

二つの論争

して「ロンドンのプロパガンダストとの関係において起訴された人物の事件」（「32人裁判」）が開始され、ツルゲーネフもこれにまきこまれることになる。前述のようにこの時押収されたバクレーニンのナルバンジャンあての手紙に、シベリアの妻を呼ぶがための協力者としてツルゲーネフの名前が再三登場していたからである。そこでこの事件を担当することになった特別審問委員会の議長ゴリーツィンは、1862年12月19日（露暦7日）アレクサンドル二世に対し、審問のため国外からアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチ（ニコライの弟）やワシーリィ・ケリシーエフらとともにツルゲーネフの喚問を申請し、これが裁可された。³⁷⁾ そこで翌1863年2月3日に審問のため帰国を命じられた³⁸⁾ ツルゲーネフは、ただちにつきのような手紙を皇帝に書いた。

「皇帝陛下！

至仁なる国父陛下！

すでに私は二度までも陛下に書面をもってお願い致しましたが、二度とも私の願いは嘉納されました。願わくは陛下、このたびもまた貴き御注目を私に向けられんことを。

本日私は当地の大使館よりただちにロシアに帰国すべしとの命令を受けました。率直に申しまして、私にはかかる疑惑の兆候に当る何をなしたのか自分自身に説明することができないのであります。私は自分の考え方を一度たりと隠したことはありませんし、私の行動はすべての者の知るところであります。自分自身について非難すべき行為のあることが私にはわかりません。私は作家であります。陛下——しかして私はそれ以外の何ものでもありません。私の全生活は私の著作の中にあられております。——私を裁くなら著作によって裁くべきであります。私は自分の著作に注意を向けんとする者は誰でも、完全に自主的でしかも良心的な私の確信の穩健性を正しく判断しうると敢えて考えております。陛下が正しき裁判と人類愛の偉大なる事業³⁹⁾ によって御名を不朽のものたらしめたまさにこの時に、何故にささやかではあっても全力を尽して陛下の御高志をお助けしようと努めている作家である私が嫌疑を受けるようになったか、理解に苦しんでおります。私の健康状態並びに遅滞の許されぬ仕事が、現在私がロシアに帰ることを許容しないのであります。従いまして陛下、なにとぞ私にあて審問条項を送るようお命じ下さい。その一つ一つについてまったく率直にただちにお答えすることを必ずお約束いたします。陛下、どうか私の言葉の嘘いつわりなきことをお信じ下さい。私は自分の忠良なる臣民としての気持から陛下御自身にどうしてもお手紙をさしあげなければと思いました。そしてこの気持に個人的感謝を付け加えるものであります。』⁴⁰⁾

すでに見たように ツルゲーネフは1852年にゴゴリの死を悼む文章を発表したかどで当局からにらまれた折に、当時まだ皇太子であったアレクサンドル二世に格別な庇護を願

37) Тургенев, *Письма*, V, 537.

38) Там же, стр. 691.

39) 農奴解放をさす。

40) Там же, стр. 382-383.

う手紙を書いたが、⁴¹⁾ いま見るこの手紙はそれから11年たっているにもかかわらず、いちじるしくこの時の嘆願文に似ている。それから7年たって1859年にも彼は、今度は皇帝となったアレクサンドル二世に改革の大事業を遂行するよう期待をかける手紙を書き、⁴²⁾ このたびの手紙は文頭にも見られる通り三度目のものであった。そしてツルゲーネフの願いは今回もかなえられるところとなった。彼はこの手紙を書いてから約半月後の2月19日付で、書面をもって審問条項に回答することが許されることになり、⁴³⁾ その審問条項はパリのロシア大使館を経て彼に渡された。ところでこの第三項はゲルツェン、バクーニン、及びオガリョーフらとの関係を問い質すものであって、これに対するツルゲーネフの回答から、この時の彼がかつての旧友たちをどのように見ていたかを知ることができるのである。⁴⁴⁾ 勿論これは政府の審問に対する公式回答であり、たしかにそこには個人の手紙とはまた違った改まった態度が見られるのであるが、それでもなお先に見た1862年10～11月当時のツルゲーネフのゲルツェンにあてた手紙⁴⁵⁾ に述べられた信条を裏づけるものがここに見られる。⁴⁶⁾ 以下少し長くなるが全文を引用することとしよう。

「私はゲルツェン、オガリョーフ並びにバクーニンをよく知っております。ケリシーエフ氏は全然知りませんし、一度も会ったことがありません。ゲルツェンとオガリョーフには1842年頃モスクワで知り合いになりました。バクーニンはもう少し早く、即ち1840年にベルリンで知り合いました。当時私たちは哲学の研究に従事しており、約一年間を同じ家で、それもほとんど同じ部屋ですごしました。しかし政治的問題は、無縁な、二義的なものだと考えていましたので、それについて議論したことはありませんでした。その後私は彼を見かけなくなりました。以後時たま外国で彼に会うことはありましたが、彼がいくらかの役割を演じた1848年のパリの二月革命の時には、一度も彼を訪問しませんでした。ある日路上で一度彼を見ただけであります。それ以後の彼の運命に関しては周知の通りです。私が再び彼に会いましたのは、昨年五月ロンドンに三日ほど行った時のことです。私はかつて一度たりとも彼と同じ考え方をしたことはなく、直接にも間接にも彼のいかなる企てにも加わったことはありません。

オガリョーフとはかつて親しかったこともなく、彼とはあまり話をしませんでした。ゲルツェンはよく知っておりますし、友人関係にありました。彼が反政府的行動をとっていることは知っていましたが、ながいこと彼との関係は絶ちませんでした。しかし私は陰謀等に類することには、本質的に反対でしたので、一度たりとも彼のかかる行動に加わったことがないことは、付け加えるまでもありません。しかし私は自分の彼との関係をはっき

41) 『二つの論争(1)』, p. 25.

42) 同上, pp. 43-44.

43) Тургенев, *Письма*, V, 691.

44) これは全部で九項目から成り、それぞれの回答の末尾にツルゲーネフは「十等官、貴族、イワン・セルゲーエフ・ツルゲーネフ」と署名している。Там же, стр. 391-401.

45) 『二つの論争(1)』, pp. 73-74, 78-79, 81-82.

46) これはバクーニンの有名な『告白』や、彼の1857年2月14日(露曆)付のアレクサンドル二世あての手紙についても言えるところで、たとえ相手が皇帝であっても自己の信条を率直に披瀝するという点では、ロシアのインテリゲンツィアは特異な存在であった。ここにも彼らの精神的風土を見ることができよう。

二つの論争

り説明する必要を自覚しております。——最初から申しましょう。

前述の如く、私は40年代にゲルツェンと知り合いました。ここで過去20年間の歴史を詳細に語ることは時宜に適しませんし厄介なことでもありましょう。しかし当時の時流の中で、どれほど巨大な内的変革がわれわれに起きたかは、すべてのロシア人の知るところです。ゲルツェンにも私にも、またその他多くの今日では生きている者もあれば死んでいる者もあるあの頃の若い世代には共通の関心事がありました。そして皆が同じ目的に向かって努力していたのです。その目的のいくつかをあげるなら、たとえば、農奴解放です。これはすでに達成されました。急ぎつけ加えるならば、政府自身の指導と指令によって達成されたのであります。しかし相ついで起きた諸条件、王位の交替、世論や市民的信条の著しい発達等の影響下に、時がたつとともに、只今申したところの若い世代のすべての者が、徐々に成長してグループに分かれるようになりました。あるものは疲れてひとり残され、他の性急なものは前進し、あまりにも前進したのためにロシアそのものをも見失ってしまいました。中には自らすすんで亡命者となったものもあります。周知のようにゲルツェンもこのような中に入ります。1846年末⁴⁷⁾に祖国を捨てた彼は当時すでにすべての穏健な、王朝＝自由主義派とは反目する関係にありました。この派の人物の中に私はたとえば亡くなったグラノーフスキーの名をあげることができるかと思えます。ロシアにおいては、1846年の末まで、私はゲルツェンとはきわめて稀にしか会っておりません。当時私は文学の舞台に出たばかりで、純政治的問題にはあまりたずさわっておりませんでした。私は1848年のまさに酣なる時にパリで彼に会いました。当時ヨーロッパに展開していた光景は私をはげしく揺り動かしましたが、そこにおいても私は襲いかかってきた嵐の単なる見物人とどまりました。その時はゲルツェンもまた、あたかも無為の中にありました。ロシアの公衆に対するプロパガンダや影響については話題にもものぼりませんでした。歴史がどこへ行こうとしているのか、何を欲しているのかをまずもって理解する必要があったからです。どれほど彼がそれに成功したか、いや、より正しく言うならば、いかに成功するところ少なかったかは、彼の著作の中に見ることができます。しかし私は1850年の春にロシアに帰りましたので、彼をなにか理論家と懷疑家の中間の政治作家として考えておりました。決してプロパガンダストとか、わが国に社会主義や蜂起を宣伝する者とは全然思ってもみませんでした。ロシアですごした六年が私の運命を最終的に決定しました。私は作家になりました。作家であってそれ以上のなにもありません。私は自分が力の及ぶかぎり、言葉と形象によって公然と行動すべき使命を負っていることを理解しました。そしてたえずこの舞台で努力してまいりました。多分これは無益ではなかったと思えます。1856年に私が再び外国に行きました時には、すでにロンドンで『鐘』が発行されてから二年目になっていました。⁴⁸⁾しかしそれでも未だゲルツェンは、すべての旧友と完全に絶縁して現在のような孤立へと最終的に導くところの取り返しのつかない道へは踏み出していませんでした。当時彼はまだ単に否定し、摘発するだけでした。彼の否定は断固たるもので、時には無分別なところもあり、摘発もしばしば偏固なものでありましたが、心の

47) これはツルゲーネフの記憶ちがいで、ゲルツェンがロシアを去ったのは1847年1月である。

48) これは『北極星』の誤りであろう。『鐘』が発行されたのは1857年7月1日からである。

中ではなおロシアの正しい安らかな未来の可能性を信じており、彼が政府の誤ちと考えるところを憂え、自分自身の成功を喜んでいました。私はロンドンで彼に会いました——そしてすでにどれほど深い溝が彼と私との間を隔てているか**その時感じましたが**——彼との関係を絶つことが不可欠でもあり、よいことですらあるとは認めませんでした。もっともこの関係というのはしばしば論争の中にだけ現われたものではありませんけれど。しかしそれでもゲルツェンはある力を代表しておりましたし、ロシアの生活、ロシアの民心のある傾向を代表していました。しかし時は過ぎ、あらゆるものが変わり始めました。彼は自らよく知ることのなかったロシアの実際の要求や必要をしだいに理解しなくなり、古い偏見や新しい情熱にますます魅せられるようになり、かつて健全な分別によって見向きもしなかった教説についに屈して、農奴解放という聖なる事業についても政府に敵対し、説教をするようになったかつての懐疑家が通常そうするように、今度は否定をやめて誇張した騒々しい宣伝を始めたのであります。過去七年の間に彼と会うこともますます稀になり（1860年の秋から今日まで私が彼の所ですごしたのは昨年五月のせいぜい三日間ほどです）、彼と会うたびにますます私は無縁になってゆきました。そして私だけでなく、かつての彼のすべての同志がつぎつぎと彼との関係を断ったのであります。彼らは心から信じてきた昔の信念を変えませんでした。共和主義者、社会主義者となったゲルツェンはオガリョーフの影響を受け、ツァーリと人民を区別することなき、理性的な自由に対する高潔な愛と君主制の原理の不可欠たることの確信とを区別することなき、ひとしく健全に思考するロシア人とは、確実になにひとつ共通のものを持たなくなったのであります。最後に私は昨年五月にゲルツェンに会いました。（彼はその時すでに『父と子』を読んでいました）。そして私たちの個人的関係は終わったのです。かつての友人の共通した非難——彼はそれを裏切りと呼んでいましたが——や、自分自身の孤独感や意義の低下に苛立ったゲルツェンは、彼の疑いない素晴らしい才能のひらめきそのものを、力のほとんどすべてを失ってしまったのでした。彼は私のことを冷淡なエピキュリアン、時代遅れの古臭い人間と見ていましたが、このような私についての彼の意見は『終りと始め』と題する書簡の中に現われています。私は彼に容赦ない真剣な答をしました。……しかし今やすべてこれらは二度と帰らぬ過去のことです。

私はまったく率直に説明いたしました。——私に対する質問にいまなおいかなる答が残っておりますか？ いかなる種類のものであれ、政治犯や亡命者との交際が、それだけで政府から見て犯罪的だと考えられるならば、私は有罪であり、罰せられるべきであります。しかし私の裁判官が判決に当り、私が政府自身も同情せざるをえない全世代の上に起った諸事件の一つの見本であったという事情を考慮にいれられることを希望いたします。即ち、法的要求を満たすことから生ずる沈着にして覚めた判断を要求いたします。私の裁判官が、私の告発された関係というものが、近年においては論争、闘争の性格を帯びたものであるという事実を思い起されることを希望いたします。しかして政府に対する有害なる傾向との闘争の功績が独立した私個人の私心なきものであることによって滅ぶるものではないということも想起されんことを希望するものであります。』⁴⁹⁾

49) Тургенев, *Письма*, V, pp. 391-395 (強調-原文)。

二つの論争

以上に見られるように、この上院の審問委員会に対する回答の中でツルゲーネフは、自分とゲルツェンとの立場の相違をはっきり述べている。その第一は、自分が「作家であって、それ以上のなにものでもない」ということ。第二には、農奴解放前後からオガリョーフの影響下に（ツルゲーネフにはこのように思われた）⁵⁰⁾ゲルツェンがかつての信条を捨て、共和主義者、社会主義者となり、自分たち（ツルゲーネフの言葉をそのまま使うなら）穏健な「王朝＝自由主義」者から完全に離れ去ったということである。そのほかにもこの回答はいろいろなことを考えさせる。同じ四十年代に育ったインテリゲンツィアとして、いかにツルゲーネフとゲルツェンとが知的風土をひとしくしていたかということ、そして先にわれわれが見た二人の論争にいたる経験や現実認識の違いをツルゲーネフ自身がどのように自己認識していたかということ、さらには身の危険をさとした「文学者」ツルゲーネフが論争を「闘争」と呼びかえて、自己弁護をするやり方等々。そしてこの最後の点については欺瞞がまったくないとはいえない。彼自身はゲルツェンの公開書簡『終りと始め』に対して、自分の名前を出すことを避け、単に私信の中で反論を述べたにとどまり、公の場では公然と批判をしていなかったことをわれわれは知っている。それをしも「闘争の功績」と呼ぶことをツルゲーネフがまったくためらわなかったか否かはわからぬが、ゲルツェンがもしこれを知ったならば猛然と非難したであろうことは想像に難くない。

しかしゲルツェンはツルゲーネフが「32人裁判」に巻き込まれて、ロシアへ帰国を命ぜられ、それを何とか断るために皇帝へ直接手紙を書いたという事実は、ほかから聞いて知った。そこで彼は以下のような一文を『鐘』の1864年1月15日付第177号に発表した⁵¹⁾が、ここにはかつてないほどのツルゲーネフに対する痛烈な皮肉が見られる。

「新年のあとでロシアからと国外にいるロシア人からの幾通かの手紙を受け取った。一般的印象は汚らしいものである。……あらゆる種類の悔恨が流行しているが、明らかに最後の時が近づいているようだ。赤が後悔しているだけでなく、青も、まだらも、まったくの無色もすべての点で後悔している……」

われわれの通信員は一人の白髪のマグダレーナ（男性の）が皇帝に手紙を書いて、自分をとらえた悔恨を未だ皇帝が知らないでいることに悩み、眠ることもならず、食欲も安心も白髪も歯も失われてしまったと書いている。この悔恨から『彼女は青春時代の友人たちとすべての関係を断った』由である。⁵¹⁾

1862年5月の檄文『青年ロシア』の出現と、それと時を同じくして頻繁に起ったペテルブルグの火災、さらに1863年1月のポーランドの反乱（次章）によって、ロシアの世論は急激に右傾し、とくにカトコーフをはじめとする自由主義陣営の「愛国主義的」体制化は目を見張らしめるものがあった。⁵²⁾ このような中でゲルツェンはツルゲーネフの皇帝へ

50) ツルゲーネフのこのような見方は、先に引用した1862年10月8日、11月4日付のゲルツェンあての書簡（『二つの論争(1)』, pp. 73-74, 78-76）のほかにも、とくに12月3日付の手紙にあらわれている。

51) *Колокол*, VII, 1460（強調-原文）。

52) Cf. M. B. Petrovich, "Russian Pan-slavists and the Polish Uprising of 1863," *Harvard Slavic Studies*, vol. I, 1953, pp. 232-236

の直訴を耳にし、上のような「白髪のマグダレーナ」という思いきった表現を用いたのである。そして当時の『鐘』の読者にはそれが誰をさしているのかは一目瞭然であった。さらに同じ頃オガリョーフもこの件につき以下のような諷刺詩を書いており、ツルゲーネフの直訴はひろく世間に知れわたるようになった。

しかして赦免を心配しつつ
彼はみずからツァーリに書いた。
自分がかくも忠実なるが故に
友情の絆を断ち切ったことを。⁵³⁾

この記事を読んだツルゲーネフは、4月2日付のパリからの手紙でゲルツェンにつきのように書き送った。

「ロシアから戻ってから、『鐘』にのった『悔恨のために齒も髪も抜けた男性の白髪のマグダレーナ』等の記事について、君に手紙を書こうかどうしようかとながいこと迷っていた。この記事は明らかにぼくに関するものであり、ぼくを悲しませたことを告白しよう。バクーニンはぼくから金を借りておきながら、女のようなおしゃべりと軽率さでぼくをこの上なく不愉快な状況に陥れた（彼はほかの人たちは完全に破滅させた）。そうだ、バクーニンはぼくについてじつに下品で汚らわしい中傷をひろめたのだ。これは事のなりゆきというものだ。そしてぼくはずっと前から彼を知っているから、それ以外のことを彼からは期待していなかった。しかし君が二十才の青二才のように、君と信念が違っているからというだけで、まさに同じように人の顔に泥をぬるようなことをするとは想像もしていなかった。それではまるでぼくが有罪かどうか審問もしないでぼくを裁いた故ニコライ・パーヴロヴィチとあまり違わないではないか。⁵⁴⁾ もしぼくに送られた審問に対する回答を君に見せることができたなら、多分ぼくが何一つ隠さず、しかも唯一人の友達も侮辱しなかったばかりか、決して見棄てようとも思わなかったことを君にも納得してもらえたことだろう。ぼく自身そのような行為は軽蔑すべきことだと思っている。この回答はその書かれた調子にもかかわらず、ぼくに対する裁判官たちに尊敬と信頼の念を起させたものであって、いささかの誇りの気持なしには回想せざるをえない。君があれほど忌むべきやり方で取り上げた陛下への手紙というのは以下のようなものだ。

そうだ、陛下はぼくのこととはまったく知らないが、問題が正直な人間に関するものであることを理解されたのだ。これによって陛下に対するぼくの感謝の念もさらに大きいものとなった。それなのにぼくのことをよく知っていると思われる古い友達たちが、ぼくに卑劣な行為をしているとも思わないで、文書でそれをひろめたのだった。もしぼくが以前のゲルツェンを相手にしているのだったら、ぼくの信頼を悪用しないでくれとは頼まないだ

53) Н. П. Огарев, *Стихотворения и поэмы*, Л. 1956, стр. 368–369.

54) 『二つの論争(1)』, pp. 25–26 参照。

二つの論争

ろう。そしてこの手紙をすぐに破棄してくれというところだ。しかし君自身ぼくの君についての理解を踏みつけにしたのだ。そこでもうこれ以上ぼくに新たな不愉快な思いをさせないでくれとお願いする。古いのだけでも沢山だ。しかしこの手紙そのものが、君に対するぼくの感情がまったく失われたわけではないことを示している。バクーニンにだったら一言半句も書かなかったことだろう。どうか元気で。

Ив. ツルゲーネフ]⁵⁵⁾

すでにここにはゲルツェンに対するツルゲーネフの見限りが出ている。『終りと始め』において最高潮に達した両者の「論争」が、いまや泥試合に堕してしまっただけで済んだことは否定すべくもない。そしてこの手紙に対するゲルツェンの返事⁵⁶⁾もまた同じようにあけすけなものであったが、同時にその行間に多くの感情を含んでいるものであった。

「ぼくも君の手紙に返事を書こうかどうかながいこと迷った。そして過去に対する敬虔さよりも現在親しくなろうとの気持から返事を書く。それに直接説明することによって多くの誤解を除くことができると思ったからだ。

君が最後に訪問したとき、ぼくにはわれわれが分かれてしまったことがわかった（もともと、格別われわれの間柄が親しかったというのは実際には一度もなかったが）。ぼくは、だがその原因が小説の不成功からくる苛立ちだと思って、前と同じ関係に留まっていた。君は文通をやめた。それを愛国心からだというが、ぼくは信じない。なぜなら君にはかつて一度たりともはげしい政治的情熱などなかったからだ……

その後ほどなくして君の名前が（ポーランドでの一引用者）負傷兵に対する（カンパの一引用者）申込みリストの中にあられた……いたみつけられたアクサーコフだったら単純に首まで血の泥濘につかってむりに入り込もうとしたのも理解できるが、——彼ならこれは一貫している——いったいどうして君も同じどぶ泥の中に飛び込んだのだ？

このようなことがあったあとで、君が書面で以前の交際を断ち切ったということをおぼくが信じたとしても、なんの驚くべきことがあろうか。それに君は事実そうしたのだから……

われわれは1863年以来人びとの引潮を経験している。ちょうど1856年から1862年までその満潮を経験したように。芸術でも科学でも政治の分野でもあたかも老人が春画をみるようにおいぼれたちは自瀆行為にふけている。ニコライ時代にはロシア出版所を誹謗していたのに、それが成功するやぼくの崇拜者となったポトキンの輩がそうだ。彼らは再び愛国主義からわれわれを嘲罵しているが、これはこっけいなだけだ。……とりわけぼくがパリでポーランドの代表者に会ったとき彼が目には涙を浮かべてどんなに喜んだか思い出さずならば、まったくの噴飯ものだ。

醜悪な（ポーランドの一引用者）鎮圧にもっばら抗議し、これからも抗議するであろう

55) Тургенев, *Письма*, V, 241-242.

56) これは3月10日の日付になっているが、あきらかに4月10日の誤りである。См. Герцен, XXVII, 835.

まじめで、偽りのないロシア人を『父』ではなく『子』が評価する時代が来るだろう。われわれの仕事は多分終わってしまった。しかしロシアがすべてカトコフの寄せ集りの群れに連なったわけではないという思い出は残るだろう。脳軟化したボトキンなら無理に理解させることも必要だろうが、君には君の良心がこのことを告げることだろう。われわれはロシアの名誉を救ったのだ。——そしてその代りに奴隷の如き多数の人たちから苦しみを受けた。

君がかつてあった如く、全然傾向的ではない、独立的な作家、単なる作家になることを心から望んでいる。

バクーニンに対する君の罵りが、どういう点においてなのか、ぼくにはわからない。彼の欠点は知っている。しかしわれわれの中に欠点のないものはいない。彼にどんな犯罪行為があるのか、ぼくは知らない。

君もまた元気で。

A. ゲルツェン⁵⁷⁾

すでに見たようにゲルツェンはかつて一度もツルゲーネフを「政治的人間」と考えたことはなかった。⁵⁸⁾ さらにまた同じ自由主義陣営にありながらも、カヴェーリン、カトコフ、ボトキンらとは違った「作家」としてのツルゲーネフの「独立性」をも感じていた。それがポーランドの反乱を契機としてロシア国内の世論が体制化してゆくにつれて、その独立性を失い、「傾向的」となってゆくを見て「ツルゲーネフ、汝もか！」の思いを禁じえなかったのであろう。すでにこの時期には、かつて2,500部もの発行部数を誇っていた『鐘』も、ロシアの世論が急激に「愛国主義」的風潮に染まるにつれ500部に激減してしまっていた。⁵⁹⁾

ゲルツェンにしてみればすでに自分たちの「仕事は終わった」ものと自認せざるをえなかったが、それにしてもこの一、二年間の自由主義者たちの恥知らずな変身ぶりが痛恨のかぎりに思われたことであろう。

このゲルツェンの手紙に出てくるポーランドの反乱に対する彼の態度は、次章でもあらためて問題にするが、この往復書簡を最後に、二人の間のやりとりは1867年5月まで、まる三年間というものが完全に絶たれてしまうのである。

VI ゲルツェン、バクーニンと「ポーランド問題」

バクーニンとゲルツェンとの間に「親しき、同盟的な近さ」という一種奇妙な関係が成立してから四ヶ月ほどたった九月末の一日、バクーニンが「特に心配げな、そして幾分もったいぶった」⁶⁰⁾ 様子でゲルツェンの許をおとずれた。彼はワルシャワの「中央委員会」を代表して、パドレフスキとギルレルの二人が『鐘』の編集部と話合うためにやって来たことを告げに来たのだった。そしてその晩ゲルツェンの家で両者の会合が持たれたが、この

57) Герцен, XXVII, 453-455.

58) 『二つの論争(1)』, p. 50.

59) Герцен, XI, 374.

60) Герцен, XI, 368.

二つの論争

二人のポーランドの代表にはさらにミローヴィチも加わって三人になっており、彼が「中央委員会」から『鐘』にあてたロシア語で書かれた手紙を読みあげた。⁶¹⁾ この手紙はさっそく『鐘』の10月1日付第146号の冒頭に掲載されたが、その大意は以下の如きものであった。

ポーランドの現在の運動については、すべてのロシア人が正しく理解しているとはいえません。これは情報が公式声明や、ドイツやフランスの新聞を通して入ってくるため、多くのロシア人は、ポーランドが未だにひたすら歴史的国境の回復をめざすシュラフタの蜂起のみを考えているのだとの古い見方にとどまっています。しかし必ずしもそうではないのです。

ポーランド人とロシア人がその共通の目的のために同盟することは明らかに双方にとって利益であると考えられるわれわれは、この新しいポーランドの運動の基礎を『鐘』を通じて説明することにしました。

現在ポーランドが立ちあがっている基本的思想は「農民に対して彼らの耕作している土地への権利と、すべての民族に対して自らの運命を決定する完全な自立権」とを全面的に認めるものであります。

農民問題については、すでにあらゆる政党によって、買戻しを基礎として農民にその分与地を与えるべきだとの意見の一致をみえています。したがって、われわれは蜂起の際まっ先に農民にその耕地を分与することを綱領でも述べています。しかして地主への賠償は「人民政府」が国庫から支払うことになりましょう。さらに綱領は新しい社会における身分的特権の廃止をかかげています。

以上の如く、ポーランドの運動の基本的考えは、純粹に人民のものであって、シュラフタ的保守主義はまったく存在しないのであります。

ロシアとポーランドの農民問題の相違は、両方のおかれた社会的原理、諸条件の違いに由来しています。ロシアの運動はゼームスコエであるのに対し、われわれの運動はナツィォナーリノエなのです。⁶²⁾ ロシアでは社会運動は政治的自由を発達させるものですが、わが国においては社会の再組織は解放と国土の復帰の結果、はじめて可能であります。

これこそわれわれが希望する提携の基礎であります。いまや第二の問題に移りましょう。われわれは強制的に政治的存在を奪われましたが、かつて一度たりともこの強制を認めたことはありませんでした。したがってわれわれはいかなる新しい国境も、われわれの自由の廢墟の上に基礎づけられたいかなる政府をも認めません。われわれにとってポーランドは一つであり、分割されたポーランドは存在しないのであります。ポーランドとリトワニアとウクライナ（руссинов）の合体した、しかしてこの三つの民族のうちいかなる

61) Там же, 369. この時「中央委員会」はバリのミエロスワフスキの所にも代表としてダニウオスキを送った。阪東宏、前掲書、83頁。なお「中央委員会」からロンドンに派遣されたのは、ギルレルであったが、彼はバリでパドレフスキ、ミローヴィチの二人に会い、三人でロンドンに来た。См. Стеклов, указ. соч., т. II, стр. 193.

62) ロシアの運動は各地の、土地を中心とする農民の運動であるのに対し、ポーランドの方はもっぱら民族的なもの意。

一民族のヘゲモニーもない唯一のポーランドがあるのみです。この観点からわれわれは以前の国境をもったポーランドの復興に努力しつつ、そこに住むリトワニア及びウクライナ人に対しては、ポーランドとの同盟にとどまるか、それとも自ら治めるかは彼ら自身の意志にまかせています。今日の行動準備の段階では、人民の蜂起が、わが抑圧された祖国のすべての土地を同時に包みこむことができるように、リトワニアとウクライナとがポーランドと共同行動をとるよう努力することがわれわれの神聖なる義務と考えています。もしわれわれがこれらの民族と同盟を結ぶことに反対したり、以前の国境の復活を認めないならば、それはわれわれに分割を認めよ、われわれの自由のために、三つの民族が同盟するための力を放棄せよ、ということになりましょう。

ロシアの自由思想の代表としてあなた方にわれわれの偉大な戦いの原則を述べた上は、わがポーランドの地におけるロシア人とポーランド人の同盟が必ずや双方に等しく新しき力を与えることを確信いたします。⁶³⁾

すでに述べたように、ゲルツェンは1861年4月10日のワルシャワにおけるロシア軍の発砲以来、ポーランド人に同情を寄せるとともに、ロシアの将校・兵士に対し、二度とポーランド人に銃を向けることのないよう『鐘』紙上で何度も訴えてきた。⁶⁴⁾ しかしそれと同時に自分たちロシア人と彼らポーランド人との間に、いかにしても越え難い溝のあることを認めないわけにはゆかなかった。即ちポーランドの弾圧に対して、ロシア人として「間接的な罪」を感じていたゲルツェンにしてみれば、彼らを助けて共同の行動を起こそうという申し出自体、ポーランド人にとって *mésalliance* と受け取られることを知っていたからである。⁶⁵⁾ たしかにロシアではクリミア戦争の終結と新帝の即位以来、気分が一新し、やっとこれで一息つけるという喜びがあったが、しかしこのロシア人の「喜びが彼らを侮辱」するものであり、「ロシアの新しい空気が彼らには希望ではなく喪失を思い出させた」こともゲルツェンは見抜いていた。1862年の6月にポーランド総督のコンスタンチン大公に対する暗殺未遂事件が起った時、ゲルツェンはこのようなテロによって、政府が従来の多少とも譲歩してきた政策を一切やめて、事態が一層悪化するのではないかとの懸念をホエツキーにもらしたことがあった。これに対してホエツキーが「それこそまさにわれわれの望むところです！ われわれにとって譲歩ほど悪い不幸はありません……われわれは決裂を望んでいます……公然たる戦いを」と述べたことを、ゲルツェンは後になさしい思いで回想している。⁶⁶⁾ このような感情の面の違和感だけでなく、戦術と綱領の面でも両者には大きな相違があった。即ち戦術面では時機尚早の蜂起が必ずやポーランド人にとって不幸をより大きなものにするだろうとの確信がゲルツェンの側にあり、綱領面ではリトワニアやウクライナを含めたポーランドの昔の国土回復の主張が、民族自決権という大原則から認めがたいものだとの考えがあったのである。一方バクーニンは、「諸々の諸条件の考量

63) *Колокол*, V, 1205–1206.

64) 『二つの論争(1)』, p. 56, 60. なおこのほか、3月15日付第94号にのった『*Vivat Polonia!*』と5月1日付第97号の『*Mater Dolorosa*』を付け加えなければなるまい。

65) Герцен, XI, 367.

66) Там же, стр. 368.

二つの論争

にはあまりながいこと立ちどまらず、遠い目的のみを見つめて、妊娠二ヶ月を九ヶ月ととっていたのであった。」⁶⁷⁾しかしポーランドの「中央委員会」を代表してミローヴィチが先の手紙を読みあげたとき、ゲルツェンはウクライナやリトワニアの民族自決権について、もっと明瞭に表現するよう要求し、この申し出は一応受け入れられた。だがこの問題に対する双方の感情が「同じものではなかった」ことも、すでにゲルツェンにはわかっていた。

いずれにしてもこの話合いの結果、つぎのような『鐘』の編集者の回答が、「中央委員会」の手紙の掲載されたつぎの号の『鐘』の冒頭にのった。

「ワルシャワのポーランド中央委員会へ

拝啓

『鐘』の前号に掲載されたあなた方の書簡は、独立のためのポーランドの戦いの偉大な歴史に新時代を画するものであります。あなた方がポーランドの人民に蜂起を呼びかけている原則は、きわめて広汎且つ現代的なものであり、じつに明瞭に述べられているために、政府の保護という、腐敗し、侮辱的な束縛から脱したいと思っているすべてのロシア人の中に、あなた方の言葉がふかい心からの共感を呼ぶであろうことは疑いえません。

われわれについて申すならば、われわれがあなた方と共に進むことは容易であります。あなた方は、農民に対し彼らが耕作している土地に対する権利を認めています。あなた方はすべての民族に対し、みずからの運命を決する権利を認めています。

これこそわれわれの基礎であり、われわれの主張であり、旗印であります。

われわれはあなた方の言葉を喜びをもってわが同胞につたえるとともに、あなた方がロシア人との接近の仲介者としてわれわれを選んだことに対し感謝いたします。これに答えるにはポーランド駐在のロシアの将校にあてた、われわれの手紙を同時に印刷する以外にありません。この手紙こそ回答であります。われわれは何ヶ月も手間取りました。しかし手間取ったことを喜んでみます。あなた方はわれわれに『人民の事業の基本的原則についての諸君の考えはわれわれにはわかっていると肯定的に述べる可能性』を与えてくれたのですから。

この基本原則の名において、不幸の中に経験を積み、戦いの中に鍛えられた、独立のポーランドは打建てられるべきであり、中世的甲冑をかなぐり捨てた階級のない、貴族主義的鎖帷子や楯のないポーランドが建設されるべきであります。それは一方の手を貧しいヨーロッパに、もう一方の手を同じ権利の隣人にさしのべた、スラヴの若返った巨人となるべきであります。

この基本原理の名において、力こそ衰えたものの信念において変ることなきわれわれの友好的な手を取られんことを。われわれはこの手をロシア人としてあなた方にさし出すものです。われわれはみずからの人民を愛し、人民を信じ、その未来を信じています。それだからこそあなた方に正義と自由の事業に向けて、手をさしのべるものであります。

『鐘』編集者⁶⁸⁾

67) Там же.

68) Колокол, V, 1213 (強調-原文)。

ここでゲルツェンがいつている「回答」というのは、この年6月1日付の『鐘』にのつたポーランド駐在ロシア将校からの手紙⁶⁹⁾と、同じく6月7日付でゲルツェンに送られたポーランド駐在ロシア第一軍のオルガナイザーであったアンドレイ・ポチュブニャーからの手紙⁷⁰⁾への返事のことである。この手紙の中でポチュブニャーは、かつてゲルツェンが「その時が来たら、われわれは諸君に何をなすべきか告げよう」といった言葉を引用して、いまや「その時が来た」ことを知らせるとともに、ポーランドに駐留しているロシア軍の将校が「近き蜂起の際に直接参加するであろう」ことを告げ、これについてのゲルツェンの意見を「多くのロシア人の将校の名において」求めたのであった。⁷¹⁾

「ポーランドの蜂起の際に、ポーランドにいるロシアの士官は何をなすべきか？」というこの問いに対する答は、まことに「困難」なものであったが、「現下の諸情勢からして、自分たちの意見を言わないのは、弱さでもあり、ほとんど背信である」⁷²⁾とも考えたゲルツェンは、以下のような返事を『鐘』に発表した。そこには彼のポーランド問題に対する苦悩と、すべての思想が如実に反映されている。

まずはじめにゲルツェンは、まったく正当にも自らの独立のために立ち上ったポーランド人に対し、銃を向けることなく、「裁判に付されて、囚人隊に送られ、銃殺に処せられる」べきだと、「一般的に答えることは容易」だけれども、これでは「完全な答」にはならない。ポーランド人に銃を向けるな、というのは、「否定的な」回答にこそなれ、「なにをなすべきか」という点についてはもっと考えてみる必要がある、といっている。このように考えるならば、ポーランド人とロシアの士官の共同行動がポーランドとロシアを引離す結果に終ることなく、それによってロシア社会の根本的な変革につながるようなものにならなければならないということがわかるであろう。そのためにはこのポーランドの蜂起が、農民＝土地問題と民族自決の問題に対して、どのような態度をとるものであるかが、まず明らかにされるべきであろう。じつはこの点が不明瞭であったために、返事が遅れたのであるが、「ワルシャワの委員会」から、それが農民の「土地に対する権利」と諸民族の「自立権」とをめざすものであることをはっきり聞いて、いまや胸のしこりもおおりた、とゲルツェンはまず最初に問題の所在を指摘している。

ロシア人の将校が、ポーランド人と提携するのは、まさにこの二大原則の上に立つのみ可能である。この原則に依拠するならば、ロシアの人民とロシア軍の兵士に対して、なぜ自分たちがポーランド人と共同行動をとるに至ったかを納得させることも出来よう。そして、ポーランドの人民がロシアの敵ではなく、皇帝の専制政治こそが敵なのだということを彼らに告げるべきである。さらにまたポーランドの人民が自分たちの独立のみか、以前ポーランドに加わっていた諸民族の独立をも認めているということも説明する必要があ

69) *Колокол*, V, 1117.

70) *Колокол*, VI, 1334. (1863年5月1日付『鐘』の第162号にオガリョーフが紹介した。) これは *РПРС*, т. I, стр. 405にも収められている。

71) 荒武鉄郎, 「1863年ポーランド反乱前夜の革命路線決定とロシア軍士官結社」, 『史林』, vol. 51-1, 1968, p. 93参照。

72) *Колокол*, V, 1213.

二つの論争

る。このように議論を進めた上でゲルツェンは以下のように具体的な行動の指針を示している。

ポーランドの蜂起は、ロシア人士官たる諸君が呼びかけたものではなく、それは諸君にとって偶然の出来事なのだ。諸君は彼らとの共同行動の中に**独立の組織**として参加し、この同盟によってわが国の農民＝土地問題の解決を前進させるべきである。このことを銘記した上で、ポーランドの運動とロシアの運動の共同のプランに立脚して提携するよう努力しなければいけない。そしてその際に絶対に忘れてならないのは、「**ポーランドにおける時機尚早の暴発は、ポーランドを解放せず、諸君を破滅させ、必ずやわれわれのロシアの事業を中止させるであろう**」ということである。その理由は沢山あるが、主な二つだけを指摘しよう。

まず第一にわれわれには何の準備もできていない。なるほど諸君の所には将校の組織があるが、⁷³⁾これを過大評価してはならない。これはまだほんの端緒である。ロシア国内の至るところにこのような組織を創設しなければならない。そして兵士だけでなく、人民と接近しなければならない。人民が士官を敵と見たり、士官が自分自身をツァーリの召使と想ったりすることが絶対なくなるようにすべきである。これらのことが十分になされているとはいえない。ロシアの地において、ただちに蜂起が起きる可能性はない。もしロシアの人民が蜂起に立ちあがるとすれば、それは何か空想的な理想からではなく、もっぱら自分の土地のためである。今世紀にロシアの人民は二度頭をあげた。一回目は**ロシアの土地**が危機に瀕した1812年であり、二回目は自分たちの土地のために戦っている現在である。政府は農民に半分の自由しか与えていないが、来年春の過渡期⁷⁴⁾が終わったときには、このようなごまかしはもう許されまい。その時はロシアもポーランドも、リトワニアも小ロシアも、土地に対する農民の権利の名において立ちあがるであろう。

しかしてロシアの革命は、西欧とは異なり農村の、共同体の、土地の性格を有するものである。人民は上からの呼びかけに応じて、畑から草地から森から立ちあがるであろう。⁷⁵⁾

ゲルツェンが三人のポーランドの「中央委員会」の代表の前でこの回答を読んだとき、何よりも問題となったのは、この中でくりかえし述べられている農民の土地への権利と、民族自決権の二点であった。この点について回答の内容を先に知っていたバクーニンは、これが「必ずしも彼らの気に入るかどうかわからないが、いずれにしても、彼らにとってこのことは大したことではないだろう」と重視していなかった。しかし、ミローヴィチはこの回答の問題点について、もっと表現を和らげるよう要求した上で、最後にはこれを承認した。この時のゲルツェンの態度はバクーニンの目からすれば、「あたかもポーランド側を信用しない、あまりにも冷い」もののように見えた。それはポーランド人の「苛立ちやすい国民感情を第一歩において侮辱する」ものであり、この点でゲルツェンは「まったく実際的な人間ではない」と彼は非難の気持をこめて見ていたのである。⁷⁶⁾しかし以

73) 荒武氏の前掲論文（とくに第三章）参照。

74) 地主と旧農奴との間の「約定証文」は1863年2月19日までに作製されることになっていた。解放令公布からこの時までの一年間をさす。

75) Колокол, V, 1213-1215. (強調-原文)。

76) Герцен, XI, 369-370.

上からもわかるように、ゲルツェンにしてみれば、この二つの原則こそ、ロシアとポーランドのこれからの共同行動の基盤となるべきものであって、決してゆるがせにはできないところであった。もしこの二点を明確にしないまま蜂起の支持を主張したとしても、ロシア国内の人民大衆の支持はもとより、ウクライナやリトワニアや白ロシアの諸民族の支持もえられぬまま、結局はロシア政府の弾圧の前に屈するほかなくなるのを彼は見てとったのである。

一方ポーランド側の代表も「純戦術的な考慮」⁷⁷⁾にもとずいて、一応妥協的に自分たちの手紙を書きかえたものの、この民族自決権を認める態度は、後にワルシャワに帰ってからミエロスワフスキら「戦闘的なナショナリスト」からはげしく非難されることとなった。⁷⁸⁾

さらに又、パリにあったポーランドの政治的亡命者たちの機関紙『ポーランド問題評論』は、このような『鐘』にのったゲルツェンの回答に対して、ただちに次のような記事をかかげて、「汎スラヴ主義的」であると非難し、ロシアの革命家をみずからの敵であるとまで宣言した。

「リベラルなロシアが、分割以前の国境においてポーランドが復活することを認めず、望まぬかぎり、われわれポーランド人はあらゆる問題について、ともに手をたずさえて進むことはできない。われわれにできることは、ただツァーリズムを弱体化し打倒するという事業において協力するだけである。」⁷⁹⁾

つまりここにおいて彼らが言わんとしていることは、ポーランドの革命勢力はツァーリズムの打倒という点でのみロシアの革命勢力を利用すべきであって、ゲルツェンの主張するところのウクライナやリトワニアや白ロシアの民族的独立は、結局はこの地に対するロシアの優位を認めることになるということであった。

ところでこの『ポーランド問題評論』という雑誌は、ゲルツェンとは浅からぬ因縁をもつものであって、これより4年前の1858年に『アレクサンドル・ゲルツェンと自由ロシア出版所』と題する論文をのせて、ゲルツェンの活動を紹介するとともに、彼のポーランド問題に対する見解を読者に知らせたことがあった。⁸⁰⁾そしてこの記事を読んだゲルツェンは、早速筆をとって『ロシアとポーランド』と題する二つの書簡形式の論文を『鐘』に掲載したが、さらにこれに対する『評論』側の批判が第三書簡から第五書簡に及ぶかなり長文の論文をゲルツェンに執筆させることとなった。⁸¹⁾このときの『評論』側の批判は、第二書簡で述べられたゲルツェンのスラヴ連邦の思想をめぐるものであったが、そのゲルツ

77) И. В. Белявская, “Польское национально-освободительное движение и Герцен (1860-гг.)”, *Литературное наследство*, т. 64, стр. 761.

78) Ее же, *А. И. Герцен и польское национально-освободительное движение 60-х годов XIX века*, М. 1954, стр. 125. なおこの時期の「中央委員会」については阪東氏の前掲書75頁以下参照。

79) Белявская, *указ. статья*, стр. 761.

80) Герцен, XIV, 468.

81) [第一書簡] - *Колокол*, 1859年1月1日第32-33合併号, II, 257-260.

[第二書簡] - *Колокол*, 同年1月15日第34号, II, 273-276.

[第三書簡] - *Колокол*, 同年3月1日第37号, II, 299-302.

[第四書簡] - *Колокол*, 1860年3月15日第65-66合併号, III, 539-544.

[第五書簡] - *Колокол*, 同年4月1日第67号, III, 555-558.

二つの競争

ェンの思想というのは、ポーランドがロシアから離れて独立する「完全な権利」を認めると同時に、ウクライナ⁸²⁾等もまた「自由な独立した国として認められるべき」だとし、これらの解放され、独立した国土が「土地をつけて農民を解放したロシア」とともに、スイスのような「連邦」をその自由意志で構成することを期待するものであった。

この『ロシアとポーランド』と題する五つの書簡形式の論文を通して、そこに述べられたゲルツェンの「スラヴ連邦」の基本的主張を見るならば、それは以下のようにまとめることができる。

(1) すでにヨーロッパ世界はその発展の絶頂に達し、年老いている。これに対しスラヴ世界は若々しい力を秘めている。この両者の関係はさながらギリシャ・ローマの古典世界とゲルマン世界との関係になぞらえることができよう。

(2) スラヴ世界の若さと力は、その共同体の中に秘められてきた。スラヴ世界はこの共同体を基盤とすることによって新しい社会主義の生活に入ることができる。

(3) この社会主義世界においては、もはや国境といった概念はなくなるであろう。

(4) 解放され、新しく生まれかわったスラヴ諸民族は、独自の言語・宗教・文化を維持しつつ、自発的に「スラヴ連邦」を構成するであろう。元来スラヴ民族は中央集権をきらひ、自由な連邦制を好むものだからである。

(5) この新しい「スラヴ連邦」の基礎は、平等にして自由な、新しく生まれかわった農村共同体である。

(6) この「スラヴ連邦」の結成にあたっては、ロシアをはじめ、いかなる一国のヘゲモニーも存在しない。各国のまったく平等な関係における「同胞的結合」である。

このようにまとめてみると、このゲルツェンの「スラヴ連邦」の思想は、彼のくりかえし主張してきた「ロシア的社会主義」の論理的帰結であり、それなりに首尾一貫したものであると認めざるをえない。しかし、このような整合的論理が、ナショナリズムという、ある点ではきわめて非論理的であるとともに、歴史的にもぬきさしならぬ要素をもった概念にはたしてそのまま通用しうるかといえば、それはまた別である。事実『ポーランド問題評論』は、このようなゲルツェンの考えに対して、『ロシアの進歩的思想とポーランド人の課題』と題する一文をのせて、かかる「スラヴ連邦」の思想は論理的には認められても実現の可能性はないと批判し、さらにそれは事実上ポーランドをヴィスワ流域に押しこめんとする汎スラヴ主義的思想であると非難したのであった。⁸³⁾

スラヴ民族の中でも、とりわけポーランドの民族運動は、はげしいものであったが、これはロシアとポーランドの長期にわたる歴史的関係を無視しては理解できない。しかも同時にそこにはロシアとポーランドがスラヴ世界の二つの異なる文化を代表するものであるというイデオロギーの面も考慮しなければならないであろう。この点でスラヴ主義者は、ポーランドはローマン・カトリシズムの採用という「運命的な選択」をしたことによって、

82) ウクライナの独立に対しては、ロシア国内の世論は保守主義者やナショナリストは勿論のこと、自由主義者や社会主義者の間でも共感を寄せるものは、ほとんどいなかった。この点についてポルタルは、ゲルツェンこそウクライナの独立を公然と支持した唯一の人間だったと述べている。Roger Portal, *Russes et Ukrainiens.*, Paris, 1970, p. 56.

83) Герцен, XIV, 468-470, 538.

正教ロシアから決定的に離反してしまったと考えていた。アクサーコフやサマーリンといったスラヴ主義者は、ポーランドに対するロシアの歴史的政策を批判的に見ており、ポーランド分割をロシアの恥ずべき所業とすら考えていたが、他方、国家としてのポーランドの独立は、他のスラヴ民族に大きな影響力を持つだけに、ロシアの安全をおびやかすものになろうと危惧してもいた。したがって1861年2月のワルシャワにおける暴動をロシアの軍隊が武力で鎮圧した時に同情を示した彼らも、同じ年の10月にホロドゥウォにおいて、1413年のポーランド・リトワニア連合を記念してデモが行われ、ポーランド人が連合時代の国境の復活を要求した時には、はげしい憎悪の感情すら示すに至ったといわれている。⁸⁴⁾

*
* *

パドレフスキ、ギルレル、ミローヴィチの三人がワルシャワに帰って『鐘』の編集部との会見のまようを報告し、先に述べた双方の文書を示したとき、「中央委員会」は国境問題についての基本的主張は譲歩できないが、独立後のポーランド内での少数民族の自主的な立場を尊重することは認めたといわれる。⁸⁵⁾しかし後に蜂起の独裁官となるミエロスワフスキは、このような「中央委員会」のロシアの革命家との妥協は「とんでもない誤り」であって、まずロシアとポーランドは運動の目的が異なるだけでなく（「ロシアの運動は農民的であり、われわれのは民族的なのである。」）、国境問題について「中央委員会」がリトワニア人や白ロシア人に将来自立権の保証を与えているのは「祖国への裏切り」であるとして、はげしく非難したとのことであった。⁸⁶⁾

ところでバクレーンは、このロンドン会談のすこし前の八月後半に、パリで個人的にミエロスワフスキと会っており、⁸⁷⁾この時も彼はウクライナやリトワニアに対する自主権の尊重という考えを主張したが、ミエロスワフスキの方からは、これはまさに「第四次分割」をたくらむ「汎スラヴ主義的陰謀」にほかならぬと受けとられたのであった。⁸⁸⁾

ギルレルら三人のワルシャワの「中央委員会」の代表は、ロンドンを訪問するに当たって、ロシア側の秘密結社「土地と自由」がかなり強力な組織で、ゲルツェンたち『鐘』の編集部がそのセンターとして全組織を把握し、それらに指令を出せばただちに行動が開始されるものと考えていた。そして自分たちポーランドの運動のためには、是非ともロシア側の協力が必要であり、この点で文章上の表現や、理論上の些細な相違は「行動」のためには、大した問題ではないとも思っていたのである。しかし実際には組織はいまだ「最初の網の目」が出来ただけで、「広幅の織物」となるためには、まだまだ多くの時間を要したのであった。ゲルツェンはこのことを彼らに告げ、且つポーランド側の時機尚早の蜂起が双方にとって事態を一層悪化させるものであり、慎重を期するように忠告した。さらにゲルツェンは革命の成功のためには、どうしても「世論」を味方につける必要があり、そ

84) Petrovich, *op. cit.*, p. 228-234.

85) 阪東氏前掲書84頁。なお同氏によれば、このような譲歩は「このことだけでも、ポーランドの蜂起の歴史上画期的な進歩である。」とされる。

86) 同書84頁。См. Стеклов, *указ. соч.*, т. II, стр. 177.

87) Стеклов. Там же, стр. 176.

88) Там же, стр. 177.

二つの論争

れだからこそ農民への土地分与と、諸民族の自立権の承認が不可欠なのだと、くりかえし説明したのであった。⁸⁹⁾

この最後の点については、バクーニンも同意見であったが、せつかくポーランドの「中央委員会」が手をさしのべてきたこの時期に、直接彼らに回答することなしに、時機尚早だからといって、ポーランドに駐在するロシア軍士官への手紙をもって回答にかえるやり方には反対であった。そこで彼は、1862年10月3日付の手紙でゲルツェンにつぎのように書いた。

「ゲルツェン、ワルシャワの委員会の書簡に対する回答として、士官への手紙で答えるという君の意見にぼくは断固として反対する。文書に対しては文書で、即ち委員会に対してわれわれのロシア、小ロシア、ポーランドに対する原則と希望とを簡潔に述べた上で、われわれ三人の署名した書面で答える必要があるとぼくは固く信じている。正しさからいっても、われわれの自尊心からしても、その必要があるように思われるのだ。われわれにはポーランドとの同盟について**実際上の責任**があるのであって、この責任から身を引くことはできない。そうでないと、控え目な振舞も臆病や評判を気にしての体面の保持と受け取られることになるだろう。このポーランド人への手紙は短かくて然るべきだと思う。数言の中にわれわれの**政治綱領**を述べるべきだ。これと同じ号の中に士官への手紙を添えれば、それが前者への注釈となるだろう。

ミエロスワフスキの新聞が『鐘』はまったく抽象的、破壊的傾向を有し、将来に対するいかなる計画も、いかなる実際上の目的も持っていないと述べているのに対し、君がこの新聞に好意的に賛成しているのを昨日知って、ぼくはまったくたまげてしまった。第一にこの意見は正しくない。『鐘』はずっと前から共同体的土地原理や選挙にもとづく共同体や州の自治やロシア諸州の連邦を宣伝している。したがって、原理と目的ははっきり明確に定められており、実際的でもあって、この上なくきびしい実際上の要求にも完全に応えられるものだ。どうかポーランド人にもわれわれと同じぐらい実際的な綱領を作って、われわれに示してもらいたいものだ。まったくミエロスワフスキにどんな正しさがあるというのか？ すべてこういっただけは許し難いほど間違っているといっただけだろう。もう一度くりかえしていうが、もしいま君がより率直な実際行動に踏み切らないならば、控え目な態度も臆病と呼ばれるようになるであろう。ともかく君に対して自己過信の僭称者だという非難が残るだろう——君を嫉んでいる者や敵がきっとそうするにちがいない——そして大胆率直な行動という点での名譽は与えられまい。君は一つの力を、巨大な力を作りあげた。そしてこの名譽は誰も君から奪い去ることはできない。今や問題はすべて君がこの力を使って何をなすかということにある。ロシアは現在実際的目的のための実際的指導を要求している。『鐘』がそれにこたえることができるかどうか？ もしできなければ、一年後か、多分半年後には『鐘』は意義も影響力も失ってしまうことだろう。そして君の作ったすべての力は、君のように考えることもできないのに、君よりも思いきって行動することができる大胆で自尊心の強い青二才の前に崩れ去ることだろう。行動の旗印をあげる

89) Герцен, XI, 371.

のだ、ゲルツェン。君独特の慎重さと可能な限りの分別をもって、旗印をかかげるのだ。しかし思い切って大胆にあげたまえ。そうすればわれわれは君について進み、君と一緒に協力して仕事をするだろう。

いつ会えるだろうか？ 返事をくれたまえ。

M. バクーニン⁹⁰⁾

はたしてゲルツェンがこの手紙に返事を書いたかどうかはわからない。⁹¹⁾ しかしたとえ書いたとしてもバクーニンの要求にこたえるには程遠いものであったに違いない。⁹²⁾ 一方バクーニンの方は、これから一ヶ月余たった11月10日付のゲルツェンとオガリョーフにあてたかなり長文の手紙の中で、またしても「一瞬たりとも失うことなく、ただちに仕事にとりかかる」よう訴えている。⁹³⁾

このようなゲルツェンとバクーニンの見解の相違は、ポーランド側でもいち早く気づいており、⁹⁴⁾ ウワディスワフ・チャルトリスキら「オテル・ランペール」派はポーランドの青年に対しても「権威のある」ゲルツェンの慎重な態度を「若者たちをなだめて蜂起に反対させる」のに利用せんとしたといわれている。⁹⁵⁾

一方バクーニンの方は、ロシアとポーランドの亡命家を接近させ、さらにロンドンとワルシャワの二つの組織の提携にますます熱中していった。⁹⁶⁾

*
* *

1862年10月6日ポーランド王国政府民政部長官ヴィェロポルスキは『日刊広報』紙上に徴兵に関する臨時措置法を予告した。これによれば1859年3月に出された徴兵令で定めたくじ引きに代って「町村長の決定する者および所業悪しき者の大部分」を軍役に服させることとなったが、政府の真の狙いとするところは前もって準備していたリストにもとづき2万5千人の革命的傾向の若者を一網打尽に徴兵することにあつた。これに対し「中央委員会」は10月10日「布告」を発し、政府が徴兵を強行すれば直ちに蜂起を開始すると宣言した。⁹⁷⁾ そして中央委員の一人たるツヴェルツィャケヴィッチはいち早くこのこと

90) *Письма Бакунина к стр. 199-200* (強調-原文)。

91) ゲルツェンがバクーニンに出した手紙は、かなりの部分が失われてつたわからない。

92) この当時オガリョーフがバクーニンにあてた手紙(10月31日付と推定される)は残っているが、その中で彼はバクーニンが、かつて一度たりとも国家の問題や社会組織の問題を真剣に考えたことがあつたかと、率直に疑問を呈している。Там же, стр. 202-204.

93) Там же, стр. 204-208.

94) この点についてポーランドの歴史家リマノフスキはこう書いている。「この論文(「中央委員会」への手紙のこと一引用者)の中でゲルツェンは白日の下にその姿を現わした。これは思想の人であつて、行動の人ではない。省察と懐疑が、彼が現時点の要求に一身を打ち込んで没入することを許さなかつたのである。これに対しバクーニンは、見解の首尾一貫さという点ではゲルツェンほどではなかつたが、真に行動の人であつて、実際の状況を素早く評価し、ただちに闘争のあらゆる可能性をとらえた。」В. Limanowski, *Historia powstania narodu polskiego 1863 i 1864*, Lwow, 1909
Стеклов, 前掲書第2巻203頁より引用。

95) Р. Сливовский, “Герцен глазами Поляков,” *Проблемы изучения Герцена*, М. 1963, стр. 378.

96) Стеклов, указ. соч., т. II, стр. 205 и след.

97) 阪東氏前掲書85頁。

二つの論争

をゲルツェンに手紙で知らせた。これに対する10月22日付のゲルツェンの返事は苦悩を秘めながらも断固たる調子があった。

「私は君たちに2万5千の人びとをわれわれの企ての犠牲にせよというべきだろうか？」事態がこうなったからには、とるべき手段は一つしかない。徴兵をやらせるがよい。それに対して反対しても成功の見込みはまったくないし、蜂起の失敗はロシアの運動を半世紀も遅らせ、ポーランドにとっても取りかえしのつかない破滅をもたらす事になるだろう。ロシアはすでにワルシャワに近衛の三ヶ連隊を派遣したが、ロシアだけでなく、プロイセンも介入するだろう。前にもいったように、われわれには文章上の力はあるが、「今日に至るまでいかなる実際的な力も持ってはいないのだ。」われわれの組織は準備にはほど遠い。われわれがワルシャワのロシア人の委員会に『ワルシャワにおけるポーランド人の叛徒と同時に立ち上れ』といっても、はたして立上るかどうかはわからない。その上君たち自身農民のポーランドについて語ったが、ロシアの百姓たる兵士が、どうして都会の人間の利益のために立ち上るだろうか。さらに反乱の時が来たら、叛徒たちは他の軍隊とも戦わねばならないが、はたして君たちのワルシャワの委員会に軍事的指揮官となりうる者がいるだろうか？ロシア側にはいない。2万5千の徴兵たちも各都市に散在していよう。どうして彼らを人民に結びつけることが出来るというのか？「もし君たちがロシアの自由にいささかでも共感を持ち、ポーランドの自由に対する君たちの愛が君たちの苦悩を克服できるものなら、そしてもし君たちが無駄な犠牲を出すことを恐れるならば、ぼくはいかなる動きも起すなと君たちに懇願する。なぜなら成功の見込みはまったくないからだ…⁹⁸⁾」反動が何故つねに勝利するか君たちは知っているだろうか。それは彼らがあらゆる状況においてまったく確実にふるまっているのに対し、われわれはチャンスをもて遊んでいるからだ。

ゲルツェンはこのように率直に自分の気持を打ちあけて、蜂起に反対したが、オガリョーフもまた『ポーランドに駐在するロシア士官の委員会あてメッセージ』の中で、時期尚早の蜂起を回避し、できる限りその時期を延期するよう訴えている。⁹⁹⁾しかしこのオガリョーフのメッセージのあとバクレーニンは、つぎのようなこれどはややニュアンスの異なる一文を付け加えた。

「……現在のロシア及び全ヨーロッパの状況からみて、このような蜂起の成功の望みが少ないことは認めざるをえない。そしてポーランドにおける運動の敗北は、必ずやロシアにおけるツァーリの専制の一時的勝利を招来するであろうことも認めないわけにはゆかぬ。しかし他方ポーランド人の状態はあまりにも耐え難いものであり、これ以上ながく忍耐したままではとて出来ないところであろう。政府自身がその組織的にして兇暴な圧迫の忌むべき手段で彼らに蜂起をうながしているかに見える。たしかに蜂起を延期することがロシアにとって不可欠であるのと同じくポーランドにとって必要なかもしれない。蜂起を先へ延ばすことはたしかに彼らにとってもわれわれにとっても有益なことか

98) Герцен, XXVII, 257-258.

99) Герцен, XI, 375-376.

もしれない。このために諸君は全力を傾けて努力すべきである。しかし同時に彼らの聖なる権利と民族的誇りとを傷つけてはならないのだ。事情が許す限り、できるだけ彼らを説得したまえ。しかし同時に時を無駄にしてはならない。決定的な瞬間にそなえて宣伝し、組織化するのだ。そしてわれらの不幸なポーランドの同胞が最終の手段を尽して堪忍袋の緒を切って立ち上がった時には、諸君も彼らに抗してではなく、彼らのために立ち上がるべきだ。ロシアの名誉の名において、スラヴの義務の名において、『土地と自由』のスローガンとともにロシアの人民の事業の名において立ち上がるべきだ。たとえ諸君が滅びる運命にあるとしても、君たちの死そのものは共通の事業にとって有益なものとなるであろう。神のみぞ知るだ！ あらゆる冷静な分別の計算とは正反対に、諸君の英雄的偉業が思いがけず花の冠で飾られるようになるかも知れない。

ぼく自身についていえば、君たちに成功が待っていようと死が待ちうけていようと、君たちと運命を共にすることを望んでいる。——さらばだ。しかしきっとすぐにまた会えるだろう。

M. バクーニン¹⁰⁰⁾

ここでバクーニンは明らかにゲルツェンとの見解の相違を示している。ゲルツェンは準備不足の蜂起が成功するとはまったく考えなかった。そして革命運動の敗北が今後ながきにわたってロシアとポーランドの解放事業にとりかえしのつかぬ損失をもたらすであろうと考えていた。さらにまた成功の見込みがまったくない以上、2万5千のポーランドの若者や、ポーランドに駐留するロシア軍の将兵を犠牲にすることがあっては絶対にならないと信じてもいた。一方バクーニンは、蜂起の可能性が少ないことは認めながらも、虐げられてきたポーランド人の心情を察するとき、たとえ滅びるとわかっている、ひとたび蜂起が開始されたら全身をあげてロシアの将兵もポーランド人に協力すべきであり、いたずらに事態を静観して時を無駄にすることは許されないと考えていたのである。彼はこのメッセージを書いてから8年もたった1870年に再び『ロシア軍の士官へ』と題する一文を書いているが、その中でも蜂起に加わって斃れたポチェブニャーのことを回想しつつ、あらかじめ滅びる運命にあることを知りながら、ポーランド人の反乱を他人事として坐して見ることのできなかつた彼の心情にふかい同情を示している。¹⁰¹⁾

*
* *

新しい徴兵令の予告とともに、蜂起への準備をすすめてきたワルシャワの「中央委員会」は、さきのロンドンでのゲルツェンたちとの会見のあと、11月末にパドレフスキをペテルブルグに派遣し、この地の「土地と自由」との提携をはかった。彼は士官コソフスキーを通じて「土地と自由」の中央委員会の代表であるアレクサンドル・スレプツォーフとニコライ・ウーチンとに会い、その結果さきに『鐘』紙上に掲載されたワルシャワ「中央委員会」の書簡の中で述べられた諸原則にもとずいて双方の同盟が締結された。¹⁰²⁾ しかしこの

100) Там же, стр. 376-377.

101) *Archives Bakounine*, т. IV, pp. 14 ff.

102) Стеклов, *указ. соч.*, т. II, стр. 199.

二つの論争

時期は先述の如く政府当局によって「土地の自由」の指導的メンバーが逮捕されたあとでもあり、またロシア国内の世論も急激に体制側に傾いていた時だけに、¹⁰³⁾ ポーランド側が期待したほどの実質的協力はえられなかった、というのが実情であった。即ち「土地と自由」の二人の代表もまた、さきにゲルツェンがロンドンで告げたと同じように、ロシアの秘密結社の組織はまだ出来たばかりで影響力も弱く、1863年5月以前のロシアにおける蜂起は考えられないとパドレフスキに語ったのである。¹⁰⁴⁾

その後ペテルブルグの「土地と自由」は、アレクサンドル・スレプツォーフを「全権」としてロンドンへ派遣し、『鐘』をもって「土地と自由」の機関紙とし、且つゲルツェンら『鐘』の編集部が結社の代理人(агент)となることを提案した。¹⁰⁵⁾ しかしゲルツェンはバクーニンのみかオガリョーフも賛成していたこの提案を拒否した。このときゲルツェンはスレプツォーフに結社のメンバーの人数を質問し、「ペテルブルグに数百人、地方には3千」との答を聞いたが、とても信ずる気にはなれなかった。「君は信ずるか?」とゲルツェンはバクーニンに訊いた。「勿論だ」とバクーニンはいったが、さらに「現在それほど多くなくとも後にはそうなるだろうさ。」と付け加えた。¹⁰⁶⁾ このエピソードの中にも、二人の考え方の相違が如実に反映している。

*
* *

1863年1月14日から15日の夜にかけて徴兵が実施に移され、22日には「中央委員会」の蜂起の宣言が出されてポーランドはついに立ちあがった。

『鐘』の2月1日付第155号は冒頭に『Resurrexit!』と題するゲルツェンの一文を掲載した。この中で彼は立ち上ったポーランドの人民をたたえるとともに、蜂起がツァーリ政府によってやむなく惹起されたものであり、ロシア政府の武力はかつてベズドナの反乱やペテルブルグ大学の紛争の鎮圧に用いられたのと同じものであり、明日にはロシアの農民を弾圧するために使用されるであろうと予言した。そして「ポーランドの蜂起が早く到来したのは大きな不幸である」が、「今日起りつつある事態を前にしては謙虚にならざるをえない。批判はできぬ。問題を解決するのは言論の力ではなく別の力なのだ。」¹⁰⁷⁾ と書いた。ここには今までの自分の考え方を含めて現実に起った事態を客観的に見ようとするゲルツェンの態度が見てとれる。つづく『鐘』の第156号(2月15日付)は、『ポーランドにおける犯罪』と題する論文を冒頭にかかげて、またしても徴兵によってポーランド人に蜂起を起こさざるをえなくせしめたツァーリ政府を攻撃した。(尚『終りと初め』の最後の書簡である第八書簡はこの号にのった。)『鐘』の次の号(3月1日付第157号)は、はじめてロシア各地に「土地と自由」の結社が生まれたことを伝えたが、これはロシアにはポーランドで弾圧をたくましくする政府のほか、これに反対する勢力が存在することを内

103) この頃のロシア国内の世論の変化は、前にも見た如くこの年5月にあらわれた檄文『青年ロシア』における極端にラジカルな主張や、ペテルブルグの連続火災事件とも関係していた。

104) Герцен, XI, 371.

105) Там же, 372.

106) Там же, 372-373.

107) Колокол, VI, 1285.

外に知らせる目的で書かれたものであった。¹⁰⁸⁾ しかしゲルツェン自身は2月15日のオガリョーフへの手紙の中で述べるように、いまだこの結社の力と将来については懐疑的な態度を捨てきれなかった。¹⁰⁹⁾ その後彼は4月1日付の第160号の冒頭にも『土地と自由』の宣言と題する以下の如き一文を発表したが、その目的とするところも、先の論文と同じく、急激に体制化するロシアの世論の変化を批判するとともに、ロシア国内にはそれとはまた別のポーランドの蜂起に共感を抱く勢力が存在することをひろく宣伝することにあつた。

「ついにロシアにポーランド問題に共感を寄せた生きた言葉が発せられた……『土地と自由』によって発せられたのである。2月19日（3月3日）にモスクワとペテルブルグにおいて散布された檄文は（その原文をわれわれは受取っていないが）ポーランドに関するものであった。この檄文を書いた者は、若きロシアの名においてポーランドに手をさしのべるとともに、兵と士官に対して犯罪的な服従をやめるよう呼びかけている。

この声は不可欠なものであった。ロシアの名誉回復はこれとともに始まるのである。それ故にこれを可能ならしめた人びとに深く感謝する。

言論の奴隷、文学的親衛隊員、警察への通報者たちは……われわれをロシアの裏切り者と呼び、われわれがロシアのもっとも悪しき敵の戦列に立っているなどといっている。

しかしわれわれは彼らには答えない。……彼らと話すことは何もないからだ。

しかしわれわれの友人たちの中にも、伝統的偏見から完全に免がれることなく、**祖国と国家**とを意識の中で明確に区別することもできずに、みずからの人民に対する生まれながらの愛や、人民のために苦しみ、人民のために仕事し、人民のために命を捧げる覚悟と、政府のいうことは何んでも文句なく服従することとを混同している人びとがいるかも知れない。こういった人びとにこそわれわれは数言を費やしたいと思うのである。

われわれはポーランドと共にある。なぜならばわれわれはロシアの味方だからだ。われわれはポーランドの側に立っている。なぜならわれわれはロシア人だからだ。われわれはポーランドの独立を要求する。なぜならわれわれはロシアの自由を求めるからだ。われわれはポーランド人と共にある。なぜなら一つの鎖がわれわれ双方を繋いでいるからだ。わそわれは彼らと共にある。なぜならスウェーデンから太平洋まで、白海から中国にまで進出している帝国の愚行は、ペテルブルグが結合させている諸民族にはいかなる幸せももたらすものでないことを確信しているからだ。ジンギス汗やチムールの類の世界君主国は発達のもっとも初期の、もっとも粗野な時代に属するものである。即ち、広さや力が国のすべての栄光をなした時代のものである。こういった国は、下には出口とてなき奴隷制と、上には無制限の暴政があつてはじめて可能なものである。われわれの帝国の形態がはたして必要なものであつたか否かは、現在では問題ではなく、これは事実なのである。しかし

108) このほかにも彼は1863年2月15日付“La Cloche”第14号と、英国の新聞“The Morning Star”に「土地と自由」の設立をつたえる一文を書いた。前者の中で彼は「土地と自由」とは「土地に対する各人の権利と、選挙による連邦政府」の確立をめざすものであると定義している。Герцен, XVII, 53-54.

109) Герцен, XXVII, 290-291. なおこの手紙の注釈によれば、このオガリョーフあての手紙はゲルツェンの「土地と自由」に対する積極的協力の証拠であるとされるが、これはおかしい。

二つの論争

この帝国が今や命運尽き、片足を墓場に入れたということも事実である。われわれは全力を尽くしてもう一方の足を入れる手助けをしよう。

「そうだ、われわれは帝国には反対である。なぜならわれわれは人民の味方なのだから。」¹¹⁰⁾

ここで言っている「檄文」というのは、ポーランドにおける蜂起を目撃した「土地と自由」の中央委員アレクサンドル・スレプツォーフによって書かれた『ポーランドの血が流れる。ロシアの血が流れる……』という表現で始まる一文¹¹¹⁾のことである。この中でスレプツォーフは、ゲルツェン同様、蜂起がポーランド側によってではなく「ロシア政府そのものによって引き起された」ものであり、しかもその理由が、「ポーランドの自由の中に、ロシアの自由を、即ちみずからの破滅を」政府が見てとったからであると述べている。そして初めて「土地と自由」の名においてポーランドに駐在する士官と兵士に対し「帝国主義的政府」への協力を拒否し、ポーランド人に「和解と新しい自由な同盟の手」をさしのべるよう訴えたのであった。

しかしポーランドにおける蜂起は、突如開始され、しかもそれは以前から蜂起への協力の意志を披瀝していたポーランド駐在ロシア軍の士官の委員会にも知らされることがなかった。¹¹²⁾ 期待されたロシア軍の「叛徒」側への寝返りもわずかな例外を除いてはまったく起らず、¹¹³⁾ むしろこの事件を契機としてロシア国内の世論は急激に「愛国主義」的色彩をおびるようになった。このことはたとえばカトコフのショーヴィニスト的『モスクワ通報』や、スラヴ主義者の『ヂェーニ』のみか、一年前までは「あらゆる傾向性から解放され、偏向のない客観性」を標榜していた『祖国の記録』までもが、「ロシアにおいては反政府的な近視眼的人間のみが、ポーランド王国の政治的独立を望むことができる。」¹¹⁴⁾ として政府と世論の一体化を主張するに至ったことにも示されていた。¹¹⁵⁾

したがってゲルツェンにしてみれば、次第に孤立化してゆく『鐘』や「土地と自由」の立場をロシア国内の反体制的分子にいま一度訴えることがどうしても必要に思われたのであった。しかし彼が国家と祖国とを識別し、政府と人民との区別をさかんに語るとき、さらに帝国主義的侵略戦争に手をかすなと訴えるとき、それがはたして蜂起直後にポーランド側によってみずからの軍隊の一部を殺されてショーヴィニスト的になっていたロシアの世論にどれほどの影響を与え得たかは大いに疑問である。この点で蜂起以前には2,000から2,500部の当時としてはかなりの発行部数を誇っていた『鐘』が、1863年の末には500

110) *Колокол*, VI, 1318 (強調-原文)。

111) *РПРС*, т. II, стр. 77-81.

112) *Стеклов, указ. соч.*, т. II, стр. 209-210.

113) この事に関してゲルツェンは1863年2月5日付のオガリョーフあての手紙の中でこう書いている。「ミローヴィチから手紙が来た。今日までのところロシアの兵の中で寝返った者は一人もなく、また士官の中でポーランド人に対抗せよとの命令を拒否した者も、一人もないということである。ぼくはにわかに恐怖に身をつつまれた。これは銃殺よりもまだ悪い……バクーニンは企んでいる。しかしこの企みを静かに実行することはあるまい。だが彼はいつもより悲しげだ。」*Герцен*, XXVII, 288.

114) 同誌1863年, No. 5-6, стр. 7.

115) *Белявская, указ. соч.*, стр. 157-162.

部に減少してしまった事¹¹⁶⁾をあわせて考えてみる必要がある。少なくとも表面的に見る限り『鐘』の孤立化は否定できない事実であった。

*
* *

バクーニンはポーランドの蜂起の報に対し、更に事態の急激な展開を耳にするや、2月21日にロンドンからワルシャワの「中央委員会」に手紙を書き送った。この中で彼はまず初めに「中央委員会」が「決定的瞬間に」ポーランドに駐在するロシア軍と提携するという以前の見解を「完全に変更し」、武器を獲得するために突如ロシアの将兵を襲撃した点を批判し、これをもって「ワルシャワの中央委員会は計算違いをしたとしか思えない」と告げた。そして、今後の成功のためには、ロシアの革命勢力のみならず、リトワニアやウクライナの民衆の支援が不可欠であり、自分たちロシアの反体制派からすれば、第一にロシア国内において政府に対する「牽制攻撃」をかけ勢力を分散させるために、軍隊及び地方農民のプロパガンダを行うことと、第二にポーランド国内に「土地と自由」の旗印をかかげる「ロシア軍団」を組織する事によって、「全ロシア軍に巨大な精神的インパクトを与える」ことができるだろうといった。¹¹⁷⁾

しかしこれに対して「中央委員会」は、バクーニンの期待したような返事は何ひとつ送ることなく、ようやく来た手紙もロンドンにとどまるようすすめたものであった。¹¹⁸⁾そこでしびれをきらしたバクーニンはこの手紙を書いた当日にロンドンを発って、ストックホルムに向った。¹¹⁹⁾しかしこの時バクーニンは時を同じくしてワピンスキーの指揮する「遠征隊」がウォード・ジャクソン号に乗り込んでリトワニアに上陸する計画があるとは夢にも知らなかった。ゲルツェンの方はこのことについて最初から知っていたが、「バクーニンの陰謀を信用していなかったためか、多分あるいはポーランド人の頼みで」この事を知らせなかったのである。¹²⁰⁾そこでこの計画をああとで知ったバクーニンは、3月31日付のヘルシングボルグからの手紙¹²¹⁾でこの点につきゲルツェンが自分を「子供扱いした」となじったが、¹²²⁾つづく4月9日付の追書で以下のようにゲルツェンとオガリョーフに書いている。

「友よ、悪かった……前の手紙で君たちを誹謗した表現はよくなかった。ぼくは君たちが全生涯を捧げた事業に一身を犠牲にすることをためらっているなどとは一度も思ったことがないし、そのような事は考えることもできない。君たちがぼくに対して抱いているところから、ぼくの君たちに対する確信を推し量らないでくれたまえ。君たちの中には今な

116) Герцен, XI, 374.

117) РПРС, т. II, стр. 22-25. 彼はこれより前2月初めにも「中央委員会」に手紙を書き、その「計算違い」を批判している。См. Стеклов, указ. соч., т. II, стр. 210.

118) E. H. Carr. *op. cit.*, p. 293. 邦訳, 382頁. なおこの時期の「中央委員会」については阪東前掲書第三章参照。

119) Стеклов. указ. соч., т. II, стр. 222.

120) Там же, стр. 233.

121) これは正しくは3月31日と4月9日の二回にわけて書かれた長文の手紙の第一の部分であるが、ドラゴマーノフは誤ってこれを二通に分けた。См. Литературное наследство, т. 62, стр. 771.

122) РПРС, т. II, стр. 41.

二つの論争

お動揺があるが、ぼくにはない。どれほどぼくが君たちと論争し、君たちに反対しようとも、君たち二人はぼくの究極的良心であり、砦なのだ。そして君たちがぼくに満足するならばぼくは自分自身に満足なのだし、この世で何一つ不安なものはない。ただ言わせてもらえれば、君たちはぼくが一身を捧げている仕事にただ善意のみを与えたのだ。ぼくは君たちが関係している広汎なロシアの事業ではなく、もっと特殊ポーランド的な事業のことを考えていたのだ。友よこのことを信じてくれ。なぜならこれは真実なのだから……ただどうして君たちは妻が着いたことをぼくに知らせてはくれなかったのだ。しかし有難い。彼女はここに今ぼくと一緒にいる。そしてぼくはまったく幸福だ……話を戻そう。乗船してみてぼくは全遠征軍の中で君たちのすばらしい真実の友であるデモントヴィチ¹²³⁾以外ただの一人の盟友もいないことを確信するようになった。しかしデモントヴィチは不幸なことに病気で、心痛と疾患のためすっかり参っている。ワピンスキは勇敢で抜目なく、頭の回転の早い男だが、無恥かあるいは、少なくともあまり良心を気につけない^{ユンド}傭兵隊長であり、且つ又ロシア人にどうも我慢のならない和解し難い憎悪を抱いているという意味での愛国主義者だ。又軍人としての職業からあらゆるものに対して、自分自身の人民に対してすら嫌悪と軽蔑の気持を持っている。このような性格を身近かに眺め、デモントヴィチの助けで彼をより理解するにつけても、ポーランド人の仲間に入ってわれわれがロシアの企てを成功させるという点については、考え込んでしまったと自認せざるをえない……」¹²⁴⁾

ここでバクーニンは、ゲルツェンとオガリョーフに対し、少し婉曲な言い方だが二人の動揺を責め、善意だけでは事は成就しないことを指摘している。しかし後半ではポーランド側と自分たちロシア側との間に大きな溝があることを自分でも認めている。後年になって彼は、この1863年のポーランド革命の際の双方の食い違いについて、ポーランド側が戦術面でロシアの革命勢力をもっぱら自分たちの目的達成のためにのみ利用せんとしたほかに、原則面でもシュラフタ的・中央集権的・国家主義的ポーランドと人民的・連邦的・共同体的ロシアとの相違を指摘しているが、¹²⁵⁾ とりわけ遠征隊長ワピンスキに見られるようなロシア人への憎悪と、シュラフタ的人民蔑視の態度が双方の協力にとって最初から大きな障害となっていたことがこの手紙からもわかる。バクーニンはこの手紙以外にもくりかえしこの遠征計画についてゲルツェンが前もって知らせてくれなかったことをうらんでいるが、有名な「ウォード・ジャクソン号の遊弋」がみじめな失敗に終わったことは周知の通りである。¹²⁶⁾ しかし当時彼は遠征隊の一員としてポーランドに入り革命に参加する目的で次のようなアピールを書き残している。

123) ポーランドの「中央委員会」のメンバーで、このワピンスキの遠征隊には「中央委員会」の代表として加わった。

124) *ПІПС*, т. II, стр. 41-42.

125) *Archives Bakounine*, т. IV, стр. 13 и след.

126) このエピソードについては『過去と思索』第7部第5章及び E. H. カー『浪漫的亡命者たち』第11章、『バクーニン』第21-22章に詳しい。

「ポーランドの兄弟たちよ！

君たちは自分たちの自由のために、自分たちの聖なる祖国のために、世界中でもっとも悪しき政府たるペテルブルグ政府によって惹起された不平等の戦いに立ちあがったのだ。以前からポーランドの独立とポーランドの自由がロシアの解放の事業と分ち難いものであることを確信しているわれわれロシア人は、ロシアとポーランドとを破滅させプロイセンその他のドイツ人の手に委ねてきたペテルブルグのドイツ人の帝位を諸君に劣らず憎悪してきた。われわれはこれらドイツ人の命令でその指揮下に不幸にもまどわされ酔わされた兵士たちのなした恐るべき行為に対しいきどおっており、諸君と共に共通の自由の聖なる事業をなすために、あるいは諸君と共に滅びるために、諸君と運命を共にすべく、諸君の許へ身を現わしたのである。必要とあらばわれわれは喜んで死ぬであろう。なぜならわれわれは、自由は死ぬことなく、また解放されたポーランドがやがてロシアの解放に兄弟としての手をさしのべるであろうことを知っているからだ。」¹²⁷⁾

一方ゲルツェンは先のバクーニンの手紙から一ヶ月足らず後にオガリョーフあてに以下の如き手紙を書き送っているがそこにはすでに蜂起の前途の見通しに対する彼の憂いがにじみ出ている。

『『土地と自由』の神話は続けさせるべきだ。なぜなら彼らは自分たちのことを信じているからだ。しかし現在なお『土地と自由』が存在していないということは明白だ……ぼくは以前に君とバクーニンに予言していた。— da ist kein Stoff (実体がない) と。君はぼくのスケプティシズムの真価を認めてはいなかったのだ。……バクーニンはぼくにとって、ぼくが革命性というものを責める Inbegriff всего (すべての総体) だ。彼に対してぼくが必ずしもオープンでないことは遺憾だ。ポチュブニャーの死はロシアの名を清めるにはよいが、彼の死によっても、バクーニンを通してでも接近 (ポーランドとロシアの一引用者) は存在しない。」¹²⁸⁾

一方スウェーデンに着いたバクーニンは「土地と自由」の代表としてこの地で名声を博し、国王カール 15 世に拝謁までしたが、¹²⁹⁾ さらにこの結社を宣伝するためにゲルツェン自身の来訪をうながした。しかし上の手紙にも見られるように懐疑的であったゲルツェンは、自分の息子アレクサンドルを送っただけで、心の中では「土地と自由」の神話についても、バクーニンの「革命性」についても信用せず、ロンドンにとどまっていた。

しかしバクーニンの方もポーランドの革命政府から予期した招待が得られず、それのみか自分の「汎スラヴ主義」を批判されたと聞いて、ストックホルムから以下のような手紙をゲルツェンとオガリョーフに書き送った。

「ポーランドの出来事は依然として長引いている。帰国したデモントヴィチから、国民政府の中の白党が、われわれの友人たるスメリンスキを長とする運動の支持者によって

127) *Письма Бакунина к ……* стр. 231-232.

128) Герцен, XXVII, 319-320.

129) Стеклов, *указ. соч.*, т. II, стр. 224.

二つの論争

完全に打ち負かされたと手紙で言ってきた。国民政府(多分まだ白党時代)の君に対するはげしい非難の中からぼくの名前を削除したと知って、君に劣らず驚いたのみか、ふかく悲しんでもいる。ぼくはポーランド人の前でもロシア人の前でも、君たちとの固い結びつきを拒否するつもりはさらさない。ぼくはこのことを誰にも言った事はないし、これからも君たちの許可がない限り言わないつもりだ。しかし彼らがわれわれに与えた「汎スラヴ主義者」という名称には、できる限り強く抗議すべきだ。君はかつて一度たりとも汎スラヴ主義者であったことはないし、スラヴの運動をいつでも軽蔑の目で見えてきたからだ。ぼくもスラヴ主義者であったことは決してない。しかしスラヴの運動にはもっとも熱心に取り組んできた。そして今日でもなおスラヴ連邦こそがわれわれの唯一の可能な未来だと思っている。なぜならそれだけが帝国主義のいつわれる道の上で駄目になってしまった、また必ずや駄目になるであろう、わが国の人民の生き生きとした偉大さの感情に、まったく自由な形で新たな満足を与えることができるものだからだ。しかしこれはまだずっと先のことだ。現在スラヴ民族について考えることは愚かなことかも知れない。もしわれわれが彼らについて、今なお心配するとすれば、それは現在の帝国主義的ロシアとの破滅的同盟を阻止せんがためにほかならない。ぼくはスラヴ民族について考えることすら忘れてしまっている。現在ではあらゆる問題がロシアとポーランドの間を緊迫させている。そうだ、ポーランド人と一緒にやることはわれわれには困難なことだ。われわれが仲良くやってゆけるような人間はあまりにも少ない。デモントヴィチがぼくについて何と言ったか知っているかい？ 彼はロシアの革命を望まないばかりか、ひどい厄災として恐れているというのだ。ロシアの革命によってポーランドが救われるか、それとも帝国主義が新たに勝利するか、どちらかを選ばなければならないとしたら、彼はむしろ一時的な帝国主義の勝利を欲するというのだ。なぜなら遅かれ早かれ帝国主義からは解放されようが、ロシアの社会革命は外からポーランドの文化の破壊を惹起し、ポーランド文明を決定的に沈めてしまうことになるからだという。かくて友よ、君たちはこの点で正しかったのであり、ぼくは間違っていたわけだ。われわれがロシア人である限り、最良のポーランド人といえどもわれわれの敵なのだ。しかしそれでもなお、われわれはポーランドの運動を傍観視することはできないし、われわれの取った方向を後悔するわけにもゆかない。このような破局に際して黙って何もしないでいることは、倫理的にも政治的にも自殺を意味することになるだろう。忌むべき死刑執行人と立派な犠牲のどちらかを選ばねばならないとしたら、立派なものかどうか問うことなく犠牲の方を取らねばなるまい。その上、ポーランドの隷属はわれわれの不幸でもある。ポーランドにおけるロシア軍の手柄は、われわれの恥だ。ポーランドにおいてペテルブルグが勝利することはロシアにとって破滅となろう。それだからこそわれわれはペテルブルグやモスクワの、またワルシャワのわめき声などに一顧だに与えることなしに、聖なる義務として仕事をしてきたのだし、これからも続けてゆくのだ。ぼくはわれわれの主たる敵は、フランス人、イギリス人よりも、いやドイツ人よりも、ペテルブルグだと固く信じている。まったくこいつこそ変装したドイツなのだ。それだからこいつに対してぼくが永久に戦いを続けることは何ものといえども阻止できないわけだ。そうだ、ぼくは声を大にしてロシアの国家主義的=帝国主義的愛国心を否定する。そしてどこ

から来るものであれ、帝国の崩壊を歓迎しよう。勿論ぼくはフランス人やイギリス人やスウェーデン人や彼らの友人たるポーランド人のあとについてロシアに行くようなことはしない。しかしもし外国人の戦いの最中に、農民を蜂起させるためにロシア国内に潜入することが可能になったら、聖なる義務を果し、偉大なるロシアの事業に奉仕するという完全な自覚をもって、ロシアに入り込むだろう。これが諸君へのぼくの信仰告白だ……¹³⁰⁾」

ここにもポーランドの革命運動におけるロシア人の参加がいかに困難なものであったかが、如実に示されている。デモントヴィチに代表されるような考えは、ポーランド側にも少なくなかったからである。後年になってバクーニンは「ロシア側の綱領とポーランド側の綱領との間には共通なものはほとんど何一つとして存在しなかった」、「このような深い溝が存在するのに、ロシアとポーランドの二つの組織の真摯でより完全な結合が可能でありえたのだろうか。ポチュブニャーの友人をも含めて、ポーランド人は当然のこととしてポーランド王国内のロシアの軍事組織を排他的に、自分たちの目的達成の手段としてのみ考え、ロシアの革命の目的に対しては無関心であるばかりか、敵対的な態度さえとっていたのである。」¹³¹⁾ と述べ、さらに「ポーランドの革命家の志向とロシアの革命家の志向との間には、まさに貴族と農民の世界を峻別している深淵が存在していたし、今でも存在しているのである。」¹³²⁾ とも言っている。ポーランド側にすれば、バクーニンはまさに招かれざる客であり、ゲルツェンがいみじくも指摘したような *mésalliance* にも似た関係が両者の間に最初から最後まで拭いきれなかったのである。しかし、だからといって腕をこまねいていることはバクーニンにはできなかった。彼はつづく8月10日付の長文の手紙の中でロシア国内に秘密出版物を配布すべき手筈を語り、ゲルツェンに資金の出資とペテルブルグの「土地と自由」のメンバーの紹介を頼んだが、ゲルツェンはこれに色よい返事を与えなかった。さらにバクーニンはこの手紙の中で、ゲルツェンの長男のアレクサンドル（サーシャ）との気まずい関係を述べたが、これはそれまで自分がスウェーデンにおける「土地と自由」の代表だと信じてきたにもかかわらず、サーシャがストックホルムに来るに及んで、いずれが真の代表なのかをめぐって内輪もめがあったためであった。¹³³⁾

しかしてこの手紙に対する9月1日付のゲルツェンの返事は、いつもよりも齒に衣をさせぬきびしい調子のものであった。

「君たちのどっちが『土地と自由』の *chargé d'affaires* (代理大使) なのかという論争は、最高に喜劇的なものだ。……君の本¹³⁴⁾ のとくに前半はぼくを非難によってふるえあがらせはしなかったが、むしろおしゃべり、接近、離反、釈明の空しさ、不必要さ、幻想性によってちぢみあがらせた。……

若い時にドイツの観念論の中に飛び込み——もっとも時間がたてば *dem Scheine nach*

130) *Письма Бакунина к ……* стр. 233–235. (1863年8月1日付手紙)。

131) *Archives Bakounine*, т. IV, p. 15.

132) *ibid.*, p. 4.

133) *Письма Бакунина к ……* стр. 236–241. この点についてはE. H. Carr の前掲二書にくわしい。

134) 先にバクーニンが8月1日付で送った手紙をさす。

二つの論争

(外見上は) 観念論から現実主義的な見解も生まれて来ようが——牢獄に入るまでも、またシベリアへ流されたあとでも、ロシアを知らず、立派な仕事に対するあくなき渴望に満たされてきた君は、五十年間というものを幻影の世界に、書生流の開けっぴろげの、偉大な志とつまらぬ欠点の世界に生きてきたのだ。……十年間の幽閉のあとでも、君は前と同じだった。du vague (漠然とした) あいまいな理論家で饒舌家である点も変らなかった。(サージャが君にこう言ったのはまたしても彼の悪いところだ。しかしこのことを知らない、また恐れぬ者は一人としていない。) 君は金銭については気にせず、のんきで、生まれつき変ることなきエピュキュリアンで、革命がないのに革命活動の疥癬にかぶれている点でも同じだった。君がその饒舌で破滅させたのはナルバードフ一人ではない。たとえばヴォーロノフもそうだ。君が必要もないのにナルバードフへの手紙の中で彼の名前を出したために、彼は最初カフカースから要塞監獄に入れられ、ついでにシベリアへと流されたのだ。ツヴェルツァケヴィチが発したあと、ぼくの所に暗号で書かれた一通の手紙が来た。おしなべて陰謀をもてあそぶことに反対のぼくは、それを放っておいた。しかしトホルジェーフスキーが来て、どこか自分のところに君の『解説書』がある筈だといって持って来た。ところがどうだ。ぼくとオガリョーフは呆然となった。一冊のノートにロシアの信頼できるすべての人の住所が詳細な注釈までつけられて記されていたではないか。そしてこのノートが人びとの手から手へ廻され、ツヴェルツァケヴィチにもトホルジェーフスキーの所にも渡ったというのだ。ジホーニのところにも廻らなかったならばよいが。スウェーデン人がこのことを知ってふるえあがったとしても、何の驚くことがあるであろうか。君はからだでかく、人を罵り、わめき立てる。だから誰一人として君に面と向っては、『肩もすくめず、頭もふらずに』秘密をもらさないでいることができないものは陰謀家として失格だなどとは言わないのだ。そうだ！ ぼくも失格だ。しかし親愛なるバクーニンよ。ただぼくはこの肩書を強いてもらいたいとは思っていない。

君もミロラドヴィチと同じようにエネルギーはあるが、直観力が足りない。その一番よい証拠はポーランドとの同盟だ。これは不可能な事だったのだ。彼らはわれわれに対し率直に行動しなかった。その結果君はすんでのところこの同盟の中で溺死するところだったし、われわれは浅瀬に乗り上げてしまったのだ。……ぼくは『鐘』に士官たちの挨拶を印刷することには反対だった。ポチェブニャーを生贄に捧げる儀式にも、君の旅行にも反対だった。しかし君がブラニツキーの金で旅立ち、メッセージがいたるところでコピーされたとき、ぼくは君と士官たちが事実によって自らの言葉を裏付けなければならなかったのだと思ったものだ。そして君がスウェーデン人の中に居坐ったとき、ぼくは**君のために心配して**オガリョーフと一緒に電報で知らせた。そして君が乗船したことを認めた。それなのに一体なんだって君はぼくとオガリョーフが君を説得したり電報を打ったことを何度も咎めるのだ。かつてポーランドにいたことのない君には、**解決の手段はなかったのに。**

ポーランドの事業がわれわれの側からみてうまくいっていないのは、それがたとえある程度正しいとしても、**われわれの事業**ではないからだ。このことは前にも君に言ったが、君がすっかり事を台なしにしてしまったことにも示されている。どうかお願いだから、も

し今後君が何かを印刷する時には蛇の如く聡くあってもらいたいものだ。われわれの原則は社会的なものだというのが、いったいどっちの側が社会的原理なのだ？ デモントヴィチの側か、それとも農民に地主の土地を分与したペテルブルグの太守の側か？

『そうだ、われわれはムラヴィヨーフと共に進むことは出来ないだろう』と君はいう。たしかに出来ない。しかし時には日や月に食があるようにそっと姿を消して、静かに仕事することもできるはずだ。そこに *calamité publique* (大衆の悲惨) はない。仕事をするか、それともあるいは静かに何もしないでいるべきだ。時機尚早の大騒ぎが時として事を駄目にするフィンランド人は言っているが、これはまったく正しい。……

ぼく自身どこか行き場所をさがしているのに、なんだって君が此処に来る必要があるろうか。またイタリアで君は何をしようというのか。ポーランド問題が片づくまでは、いぜんとしてスウェーデンで暮している方がためになるとぼくは思う。

さらばだ。しかしぼくの率直さに腹を立てないでくれ。半世紀も生きたのだから、今や自らの力を知る時だ。

A. ゲルツェン¹³⁵⁾

かなり辛辣な書き方である。ゲルツェンはこの中で二十年間つきあってきたバクーニンの人柄から個人的な性癖にいたるまで批判しているが、とくにポーランド問題についていうならば、「すでに事終れり」という気持が彼には強かったのがはっきり見てとれる。ナルバードフといい、ポチュブニャーといい、それぞれある意味では不必要な「生贄の犠牲」であったかも知れず、さらにこの点でバクーニンの饒舌と無神経とに責任の一端があるとすれば、もはや舞台の上から身を引いて、事のなりゆきを静観していた方がはるかによいように思われたのである。『過去と思索』の中の『エム・バクーニンとポーランド問題』においても、ここで述べたのと同じような冷たい批判的な見方が述べられているが、つづく『汽船《ウォード・ジャクソン》号』の叙述の仕方は、もっとカリカチュア化した、つき離れたものであった。

ゲルツェンとバクーニンの関係は、とくにこの1863年秋のポーランドの蜂起の失敗以後さらに悪化していった。一方ロシア国内にあってはカトコーフが『モスクワ報知』の10月17日付第225号に、ポーランド側のパンフレットを引用して、ポーランドの蜂起は「ロンドンの三人組」の煽動によるものであるとまで非難した。¹³⁶⁾ これに対しゲルツェンは10月30—31日付オガリョーフ及びツチコーヴァあての手紙の中で、自分とオガリョーフに関していうならば、これは「嘘」だが、バクーニンについては、「どうして嘘だといえようか？ それに同じことを彼はストックホルムの演説で語ったではないか？ 彼のもたらした利益はぼくにはまだわからないが、害は目の前にはっきり存在している。くりかえしていうが、ぼくは彼に会いたくない。」¹³⁷⁾ とそっけない調子で書いた。更に彼は『鐘』の12月15日付第157号に『未来の出発点としての1863年にあたりて』と題する一文を発表したが、この中でも『モスクワ報知』の「ゲルツェン氏とその一味」という表現を非難

135) Герцен, XXVII, 370—372 (強調-原文)。

136) Герцен, XVII, 292—293, 468, XXVII, 798.

137) Там же, XXVII, 378.

二つの論争

し、『鐘』の編集者はほかには誰もいない。自分とオガリョーフの二人だけだと言明した。

この『未来の出発点としての1863年にあたりて』という論文はゲルツェンのポーランド蜂起に対する弔詞ともいべきものであってその中で彼はつぎのような見解を披瀝している。

ポーランドはカトリックの古き世界において、若さと勇気とを代表するものである。ポーランドの中にこそ古き世界の輝かしい終末が、偉大で尊敬すべき最後がある。このポーランドを西欧列強は見殺しにしてしまったのだ。ロシアにとってもポーランドの蜂起は不幸なできごとであった。それはようやく始ったばかりの事業を混乱させ、ロシアの政府の力を強める結果になり、さらには国民の中に血に飢えた動物的な感情を呼び起すことともなった。実に歴史というものは即興的な歩みをするものであって、自らの無知と血の道を思うままに進む。時には前もって予見し、回避することもできるが、一方何ひとつ予見することも予防することもできない時がある。ポーランドの蜂起を阻止する事は困難であった。ロシア政府は、つぎからつぎへと誤りを重ね、ポーランドの人びとは自ら斃れるとわかっていながら死におもむいたのであった。

われわれは「農民に土地を、各州に自由を」というスローガンをかかげたが、これがポーランド人にとって**どれほど困難な**ことかはわかっていた。西欧的な観点からすれば、農民に土地を配分することはおよそ愚かしいことであり、歴史的見地からすればウクライナやリトワニアに自由を与えることは、裏切りとも思われたことであろう。しかしわれわれロシア人には西欧的観点は無縁なものであり、歴史的旗印は存在しない。われわれはロシアの人民とロシアの国とを愛するが、客観的真理を人種的色彩で粉飾したり、愛国主義的な色目で祖国を見たりすることはない。われわれにとってロシアの人民は**祖国以上のもの**であり、その中にわれわれは新しい国家形態が発達すべき基盤を見ているのである。この基盤の中にこそ解決の糸口が、発達の全条件があると信じているからであって、その未来はわれわれにとって論理的結論なのである。しかしこれは聖なる使命などというものではない。妊婦を見て、彼女の使命が母親になるなどとはわれわれは言わない。ただもし彼女を邪魔するものがなければ彼女は子を生むだろう、と言うだけのことである。

しかるに現在のロシアは、このようなわれわれの期待を裏切るものである。しからばわれら何をなすべきか、といえ、これははっきりしている。来るべき年に急ぎ臨終の祈禱をなし、新たに生まれんとするロシアの未来について再び計画を立てることである。そしてそのほかの問題はすべて放っておいて、若者の運動を見守ってゆこう。

ポーランド問題については、われわれはできるだけのことはやった。これからもわれわれは同じことをくりかえさなければなるまい。この問題のためにわれわれの人氣が落ち力の一部が失われたことを、われわれは誇りに思っている。ロシアの愛国主義者や第三部の手先がわれわれに悪口雑言を浴びせたことを誇りにすら感じている。また豚や羊の輩が、ついに本性を現わしてわれわれの許から政府の側へと走り去ったことを苦笑しながら眺めている。しかしロシアの問題の範囲外のことについては、自分たちの無力を感じている。したがってこれからは、もっぱらロシアのことについてだけ語ろう。ポーランドを引裂い

たロシアではなく、黙々と畑を耕やしつつロシアを愛している人びとに対し、われわれは若き世代と一緒に『鐘』を鳴らして呼びかけるであろう。

五年間というもの、われわれはたゆみなく生ける者を呼び集めてきた。今や死者は去り、誰一人死せる者は残っていないのだから、朝の勤行の鐘を鳴らし、自覚的な仕事へと呼びかけよう。¹³⁸⁾

ゲルツェンはこの論文を1863年11月10日にフィレンツェで書いた。いまやポーランドの蜂起は峠を越え、その帰趨はあきらかであった。バクーニンとの決裂も決定的となり、ゲルツェンはふたたび自らの仕事の意味について、歴史の歩みと、その目的と手段についてまたしても考え込むようになっていった。

VII ゲルツェン、バクーニンと「第一インターナショナル」

ポーランドの蜂起は西欧諸国にひろい同情を呼び起し、イギリス、フランス、スイス、スウェーデンなどのヨーロッパのほとんどの国に蜂起を支持する救援委員会が生まれた。しかしその中でも、イギリスにおいてその活動は目ざましく、National League for the Independence of Poland, the Central Polish Committee, the Literary Association of the Friends of Poland などといった組織が出来て、ロシアの武力鎮圧に対抗してポーランドを援助すべきことが叫ばれた。このような雰囲気の中に1863年7月22日にはロンドンのセント・ジェイムズ・ホールにおいて、フランスの労働者代表を迎えてアンリ・トランを議長とするポーランド支援の会が持たれ、さらに翌年1864年の9月28日には、セント・マーチンズ・ホールにイギリス、フランスの代表者を中心にポーランド問題を主題とする集会が開かれて、これが「第1インターナショナル」の発足の場となった。勿論「第1インターナショナル」の創設は、それまでの労働運動の努力の結実したものであるが、「1863年のポーランドの蜂起がその直接の動機になった」ことは否定しえない。¹³⁹⁾

しかし「第1インターナショナル」のロシア支部がジュネーブに生まれたのは、これより6年後の1870年春のことであり、¹⁴⁰⁾ しかもゲルツェンはこの年の1月に死んでいる。のみならずゲルツェンと「第1インターナショナル」の関係について、ゲルツェンの最初の全集を編集したレムケは、彼が「インターナショナルとその諸大会について知っている」にもかかわらず、「この運動には興味を示さず、従って当時の農業国ロシアの基礎は、発生過程にあった国際労働者協会の綱領の外にあると考えていた。」¹⁴¹⁾ とかつて言っている。もっともこのレムケの言葉は、その後コジミンの研究などによって、必ずしも上のように断定できるものでないことが明らかにされており、¹⁴²⁾ また以下の記述においてもゲル

138) *Колокол*, VI, 1437-1439 (強調-原文)。

139) J. Borejsza, "La Première Internationale et la Pologne," *La Première Internationale, Actes du Colloque*, Paris, 1968, pp. 363-364.

140) B. Itenberg, "La Première Internationale et le mouvement révolutionnaire en Russie," *Actes du Colloque*, p. 448.

141) А. И. Герцен, *Полн. Собр. Соч. и Писем, под ред. М. К. Лемке*, т. XX, М. -Л. 1920, стр. 102.

142) Б. П. Козьмин, "К вопросу об отношении А. И. Герцена к I Интернационалу," *Исторические Записки*, т. 54, 1955, стр. 430-435, Б. В. Оксюзов, "Поворот А. И. Герцена к I Интернационалу," *Вопросы Философии*, 1962 №, 4, стр. 47-55.

二つの論争

ツェンと「第1インターナショナル」の関係がたどられるであろうが、いずれにしてもその関係は、間接的なものを出ないと言ってよい。従って本章においては、主として後にインターで活躍するバクーニン及びインターのロシア支部を創設したニコライ・ウーチンら「若き亡命者たち」とゲルツェンとの関係が中心になって考察されるであろう。

*
* *

1861年秋のペテルブルグ大学に始まる一連の学生運動の結果、大学を追放されたり、あるいは閉鎖された大学に見切りをつけてすすんで国外に留学する学生が増加した。

このような中で、とくに生活費の安いこと、すぐれた教授陣のいるハイデルベルグに多くのロシア人留学生が集まり、1862年の春にはバクスト兄弟やルギーニンを中心とする約60人ほどのロシア人学生によって読書室が設けられた。ここでは合法的な出版物の外に当時ロシア国内では非合法的とされていたゲルツェンの作品や『鐘』を読むことができ、またこれと並んで、ロシアでは入手がむずかしかつたビュヒナーやモレシヨットといったドイツの唯物論者の作品も置かれていた。

ゲルツェンは当時まだ彼らの間に大きな権威を持っており、息子のアレクサンドルがハイデルベルグを訪れた時には、父親の名誉をたたえる祝宴が開催されたが、一方、ペテルブルグ大学の閉鎖を命じた前文相プチャーチン伯が来訪した時には、学生たちは宿泊せるホテルの前で大騒ぎを演じて、彼をこの町から追い出したと言われている。¹⁴³⁾

彼らはまた1862年に『号外』と題する78頁ほどの小冊子を発行したが、これには『大ロシア人』『大ロシア人の回答』『大ロシア人の回答に対する回答』『若き世代へ』といった当時ロシア国内でばら撒かれた四つの檄文が収録されてあった。はたしてこの作者が誰かはいまだに判明しないが、バクスト兄弟が参加していたことは指摘されている。¹⁴⁴⁾

ハイデルベルグにはまたポーランド人の留学生も少なくなかったが、1863年の一月蜂起の前になると、これらの学生の中には、オスカル・アヴェイデのように、急遽故国に帰って蜂起の際に指導者的役割を果すようになる者も出てきた。¹⁴⁵⁾ またロシア人学生の中にも、ポーランドの革命に共鳴する者もいて、医学部のヤコービのようにポーランドに行き、軍医として革命軍に加わった者もいた。さらにハイデルベルグに残った学生の間で、負傷したポーランドの蜂起者のための義捐金が集められたともいわれている。

しかしすべてのロシア人留学生がこのようにポーランドの革命に同情的だったわけではなかった。当初のロシア人留学生は大別して二つの派に分かれており、一方はペテルブルグ派（又はゲルツェン派）、他方はモスクワ派（又はカトコフ派）と呼ばれていた。後者はショーヴィニスト的傾向を持ち、ロシア軍が勝利するたびに盛大な祝宴をあげたといわれる。また前者のすべてがゲルツェンの支持者であったわけでもなく、中には彼の活動をあきたらなく思ったり、金持であることを批判的に取沙汰する者もいた。そして早くもゲルツェンと「若き亡命者たち」との不協和音がここで奏でられるようになる。¹⁴⁶⁾

143) Б. П. Козьмин, "Герцен, Огарев и «Молодая Эмиграция»,» *Из истории революционной мысли в России*, М., 1961, стр. 490-491.

144) Там же, стр. 493.

145) Там же, стр. 495.

146) Там же, стр. 497-498.

ペテルブルグ大学の再開とともに、ロシア人留学生の中には帰国する者が相ついであらわれたが、他方バクストなどロシアに帰ることを断念した学生の中にもスイスへ移住する者が出てきて、ハイデルベルグのロシア人留学生の数はいちじるしく減少するようになった。しかしロシア国内からは大学を追放になったり、「土地と自由」に関係したりして、すすんで亡命する者が相つぎ、1862年から63年にかけては、単に留学生としてではなく「若き亡命者」として国外に出た者の数は少なくなかった。このような若者は多くスイスを居住地に選んだが、パリやイタリア各地がこれについて人気があった。かつて亡命者たちの巣であったロンドンやハイデルベルグにはこの頃になるともはや魅力が感じられなくなってきたのである。¹⁴⁷⁾

このようにして増えてきた「若き亡命者たち」を救うためと、あわせて革命的プロパガンダを行うために、『鐘』の編集部は「共同資金」の設置を呼びかけ、¹⁴⁸⁾ 独身者で年に銀2,000ルーブリに及ぶ収入のあるものはその5%、それ以上のものは10%、家族持ちはその半分の拠金を提唱した。¹⁴⁹⁾ このようにして1862年から64年までの期間『鐘』には「編集者から」として、しばしば寄金の報告が掲載されたが、それにしてもその額はきわめて僅少であり、早くも1863年9月1日付の第170号には「共同資金には一文も残っていないばかりか、ロシアに帰ることのできないロシア人を援助するために赤字が続出している。」¹⁵⁰⁾ との記事すらあらわれるようになった。

ところで1863年のポーランドの蜂起以後、それまで閉ざされていたロシアとプロイセン及びオーストリアの国境が事実上開かれ、『鐘』をはじめとする国外非合法出版物の国内持込みは従来よりも容易になった。さらにロシア国内からの需要も増加し、ロンドンの自由ロシア出版所だけではこれにこたえることができなくなったために、スイスに移ったバクストによってベルンに設けられていたロシア語の出版所を利用することが「若き亡命者たち」によって考え出された。そこで彼らはこの目的達成のために、ロンドンの自由ロシア出版所とこのベルンの出版所の統合を計画し、この企画をもってロンドンのゲルツェンのところに代表を派遣した。このとき選ばれたのはさきに「32人事件」で逮捕されたニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチの弟で、自らも「土地と自由」に加入していたアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチと、その友人でペテルブルグで出版と書店をやっていた同じ「土地と自由」のメンバーたりしアレクサンドル・チュルケーソフの二人であった。この時の会談の詳細は今日にいたるまでよくわかっておらず、ゲルツェンもほとんど何一つ語っていないが、この会談のあとペテルブルグの「土地と自由」はアレクサンドル・スレプツォーフをロンドンに送って、統合された印刷所を「土地と自由」の国外における機関紙の発行所とし、『鐘』の編集者をその代理人とする提案をしたが、これが結局ゲルツェンの拒否するところとなったのは先に見た通りである。¹⁵¹⁾ このあとゲルツェンはオガリョーフへの手紙で次のように書いているが、ここには「若き亡命者」に対する彼の不信が早くも見てとれる。

147) Там же, стр. 520.

148) *Колокол*, V, 1101 (1862年5月15日付第133号)。

149) *Колокол*, V, 1204 (1862年9月15日付第149号)。

150) *Колокол*, VI, 1404.

151) 101頁参照。

二つの論争

「君の判断にもぼくは賛成できない。第一に *volo videre quomodo aedificates* (どんなにやるか見てみたいと思う。) からだ。彼らが一つの力であることを、彼ら自身に示させるがよい。われわれと同じ道をゆく者は、彼らであろうと誰であろうとわれわれと一緒にということは、彼らも知っている。しかし、われわれが築いた基礎の上に立つならば——それも未だ堅固だとは思われないが——*fiasco* (大失敗) や愚行に巻込まれることはあるまい。ぼくも彼らに尽そう。しかし、連帯責任をとる前に彼らの新聞を、その *profession de foi* (信条告白) を見てみたいと思う。「土地と自由」がすべてではあるまい。『青年ロシア』も同じだ。¹⁵²⁾

いずれにしてもゲルツェンは、彼らの力や能力を未だ信じてはおらず、さらに自分の事業の独立性がこれによって失われることを考えて、頭からこの企てを問題にしなかったのである。¹⁵³⁾

その後このベルンのロシア出版所は、ゲルツェンの『終りと始め』をはじめ、二つのパンフレットといくつかの檄文とを出版したが、早くも1863年の夏には仲間割れと資金不足のために活動の停止を余儀なくされる。しかしこの時のゲルツェンの拒否が、若い世代の革命家に不快以上の思い出を残したことは想像に難くない。

*
* *

「若き亡命者たち」にはさまざまなタイプがあって、一人ひとりの亡命後の生き方にもいろいろ考えさせられるところが多いが、アレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチと並んでニコライ・ウーチンをその代表的存在の一人と見ることには異論があるまい。ウーチンもまた1861年のペテルブルグ大学における学生運動の積極的分子の一人であって、このため同大学を四年生の時に放校になった。¹⁵⁴⁾ その後彼は1862年の3月に「土地と自由」の中央委員であったアレクサンドル・スレプツォーフのすすめで、この秘密結社に加入した。¹⁵⁵⁾ ところで「土地と自由」は五人一組を単位とするものであったが、彼は早速パンテレーエフ、グレーヴィチ、ジューク、ロバーノフの四人の友人を加入させてその五人組を作った。さらに彼は5月にはモスクワに赴いて、ザイチネーフスキーのグループとの接触をはかったりしたが、丁度これは『青年ロシア』がモスクワやペテルブルグにばら撒かれた時であった。しかし、このウーチンによる両グループ接近の試みは、「青年ロシア」の方が、「土地と自由」よりもはるかにラジカルであって実現しなかつといわれている。この年6月から7月にかけては、前述の如く、ニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチとルイマレンコという二人の「土地と自由」のもっとも中心的メンバーが政府によって逮捕され、これによって「土地と自由」は潰滅的打撃をこうむった。しかしウーチンと彼の五人組は独自の活動を続け、この年の夏にはスタケーヴィチやオストロフスキーのサークルと共に、バクストの持っていた活字を引きついで秘密印刷所を創設した。彼はこれを利用して

152) Герцен, XXVII, 291. (1863年2月15日付の手紙)。

153) См. Козьмин, указ. соч., стр. 510-511.

154) 『檄文の時代』, p. 186-189.

155) *Литературное наследство*, т. 62, стр. 614.

9月には自分の書いた檄文『教養ある階級へ』などを印刷している。その後アレクサンドル・スレプツォーフがロシア各地をまわって「土地と自由」の地方組織の設立に努力してペテルブルグに帰ったあと、11月にウーチンはこの結社の中央委員となった。¹⁵⁶⁾したがって12月にポーランドの「中央委員会」を代表してパドレフスキがペテルブルグに来た時、ウーチンはスレプツォーフと共に「土地と自由」の中央委員として結社を代表して彼らに会ったわけであるが、その顛末は先に述べた通りである。¹⁵⁷⁾

しかしその後ペテルブルグ郊外から地方に移した秘密出版社が思いがけぬことから政府の発見されることとなり、二人の同志が逮捕されたことによって1863年の5月8日の夜にウーチンの家も搜索される破目になった。しかし彼はそれ以前にうまく身を匿し、黒海を經由して国外に脱出した。¹⁵⁸⁾その後彼は軍事裁判所によって欠席裁判で、「土地と自由」に加盟し非合法出版物を刊行したことと、「反乱を広める目的でポーランドの革命政府と関係」したかどにより、銃殺刑の宣告を受け、生涯ロシアに帰国する望みを断たれることとなった。¹⁵⁹⁾

ウーチンがロンドンのゲルツェンの許に姿を現わしたのは8月のはじめのことである。8月15日付の『鐘』の第169号に彼は「土地と自由」の中央委員会に対し、国外脱出の援助を「公けに感謝」する旨の手紙を発表している。¹⁶⁰⁾イギリスには翌年の初めまで滞在して、主として自由ロシア出版所の出版物をロシアに送り込む仕事に当たっていた。¹⁶¹⁾しかし当初の彼とゲルツェンとの好関係は、その後次第に悪化するようになった。その直接の原因は、彼の書いた論文をそのままの形でゲルツェンが『鐘』に掲載することを承知しなかったことにあったが、¹⁶²⁾このことはとくに自尊心の強い¹⁶³⁾ウーチンの心を傷つけたと推測される。しかしその背景にはゲルツェンの61年以前の皇帝への手紙などに見られた煮え切らない態度や、師として尊敬していたチェルヌイシェフスキーとの論争を通じて、ウーチンが前々からゲルツェンに不満を抱いていたことと、さらに「ポーランド問題」や地下運動についての最近のゲルツェンの考え方を彼があきたらなく思っていたことが指摘されている。¹⁶⁴⁾一方ゲルツェンの方もウーチンの「専門学校風の調子と甘ったれた態度」¹⁶⁵⁾が我慢できなかった上に、「土地と自由」のマークを『鐘』の紋章として用いることを拒否されたことも手伝って、¹⁶⁶⁾彼に対しては次第に冷たい態度をとるようになった。かくてウーチンは翌1864年の4月にベルギーへ渡り、ついでスイスへ移ったが、ブリュッセルから4月27日付でオガリョーフ及び『鐘』の編集部へあてて（ゲルツェンあてとはしていない）以下のような手紙を書いた。この中には当時の彼のゲルツェンに対するはげしい批

156) Там же, стр. 615-616.

157) 100-101. 頁参照。

158) Там же, стр. 617.

159) Там же, стр. 618.

160) Колокол, VI, 1396.

161) Литературное наследство, т. 62, стр. 620.

162) Герцен, XXVII, 378.

163) ウーチンの自尊心の強さはラヴローフも後年回想しているし、バクーニンも記している。

164) Литературное наследство, т. 62, стр. 621, 636-639, 648-650, 651-655, 657-659.

165) Герцен, XXVII, 438.

166) Л. Н. т. 62, стр. 637. (なおこのマークの実例は стр. 649 に出ている。)

二つの論争

判が明らかに見てとれる。

「……私は比処で、親しきよき友、親愛な総主教¹⁶⁷⁾としてのあなたにではなく、『鐘』の編集部にあてて書きます……

あなた達の作られたメッセージ¹⁶⁸⁾は、私にとっては驚くほど不愉快なものであるのみか、不都合な誤りをおかしているように思われるので、これを詳細に検討した上でこのメッセージに署名をして送られた編集者としてのあなた方に対し釈明を求めなければなりません……

『政府は国内の変革を市民的自由の意味で企てたが、これらの変革は唯一人をも満足させていない。』これらの言葉こそいままでのすべての宣伝や、ペテルブルグ政府に対するわれわれの態度との矛盾をもっともよく反映しています。『市民的自由の意味で』とおっしゃいますが、いったいどこに突如として市民的自由の意味を認められるのですか？ スラヴ人と話し始めながら、あなた達は自分が意味もないことをくりかえしていることを、つまりペテルブルグ政府の下ではいかなる自由を愛好する変革も不可能であることを忘れてしまったのです。その上『誰一人として満足させていない』という言葉は、きまり文句以上にひどいものです。適切でないどころか、まさに反対です！……

私にとってあなた方のこのようなメッセージが耐えがたいのは、まず何よりも短かくて見ずばらしい上に、思いもかけなかったことに、これがあなた自身のプロパガンダとも指導原理とも矛盾するものだからです。この指導原理こそ「土地と自由」の直接の機関紙である『自由 (свобода)』¹⁶⁹⁾によって高らかに唱われているところです。わたし達は『自由』の中で、政府と直ちに手を切る必要があることをはっきり述べました。わたしたちは改革と呼ばれている政府のいつわりの策略の中に、断じていかなる意味もないことを明示しました。わたし達は何故自分たちが現在の帝位を完全に不条理なものとして扱っているかを示しました。あなた達の『市民的自由の意味での改革』という言葉は、現在までの全プロパガンダと正反対のものです。わが国においては『ゼムスキー・ソボール及びその決議を通じての根本的変革の必要性が増大している』とか、『この成長にはながい時間がかかる』とかいった言葉はあまりにも不明瞭であって、そのためにいままで語られてきたすべてとの矛盾が見落されてしまいます。以上引用した言葉からは、結論として、黙って腕をこまねいて待機しているべきだということになります。しかしわれわれは、人民の解放を促進するために、誠実でエネルギッシュな個人を組織化すべきであることを宣言しました(『自由』第1号。さらに私は同じことを仮定の手紙の中でも宣言しました。)しかしこのような正しい宣言を棄てることは、生きながら自らを埋めることをのぞまぬわれわれには不可能なことです。沢山です。……」¹⁷⁰⁾

167) オガリョーフの渾名。

168) コンスタンチノーブルで開かれたスラヴ会議に送ったメッセージをさす。この会議についてはほとんどわかっていない。См. *Л. Н.*, т. стр. 650, 656.

169) これは第1号が1862年12月に、第2号が1863年1月13日頃書かれた。*ПНРС*, т. II, стр. 62-72 に収められている。(なお第1号は *РСР*, 1960, стр. 537-542 にも収録されている。)

170) *Л. Н.*, т. 62, стр. 652-655.

ウーチンはこの手紙の中で、さらにポーランド問題に対する『鐘』の編集部への態度の不明確さも指摘しているが、先に見たようなゲルツェンのツァーリ政府及びポーランド蜂起に対する態度の中に、中途半端でなまぬるいものを痛感して、心から苛立っていたことがこれからもわかる。

しかもこのように『鐘』の編集部に対する不満は、ひとりウーチンのみならず、当時ジュネーブに住んでいた「若き亡命者たち」の間にひろく見られたところであった。一方ロシア国内においても、政府の反動の強化とともに『鐘』の配布が事実上不可能となり、さらに愛国主義的風潮の勃興とともに、『鐘』の発行部数はみるみる減少の一途をたどった。このような状況の下で、ゲルツェンはその自由ロシア出版所をロンドンから大陸へ移すことを考えて、1864年の5月にイタリアのルガノに移転させることがひとまず決まった。しかしオガリョーフはこの移転には反対であり、さらに当時のナポレオン3世治下のフランスやビスマルクのドイツの進出を見たゲルツェンのイタリア情勢に対する考慮もあって、結局この移転（スイスのジュネーブへ）は1865年3月までひきのばされた。しかしこのような遅延のもうひとつ有力な原因として、ゲルツェンが、「若き亡命者たち」の自分の仕事に対する干渉をきわめて警戒していたという事実が背後としてあったことも指摘されなければならない。¹⁷¹⁾

「土地と自由」の秘密出版所が政府によって摘発され、ウーチンが亡命してからロシア国内には非合法活動のセンターとしての出版所はまったく無くなっていた。一方国外の出版所も先述のベルンのロシア語出版所の中絶以来ロンドン以外には存在しなかったために、『鐘』の編集方針に不満を抱いていた「若き亡命者たち」は、自由ロシア出版所の大陸移転をきっかけに再びこれを新しい亡命者の機関紙として利用しようとするようになった。一年前にアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエヴィチとともにゲルツェンに会ってロンドンとベルンの両出版所の統合を提案して断られたアレクサンドル・チェルケーソフは、またしても『鐘』と並んで亡命者の機関紙となるべきもうひとつの出版所を作ること、を1864年の3月に提案したが、再びゲルツェンに頭からはねつけられてしまった。¹⁷²⁾ このことに関してゲルツェンは3月31日にマルヴィーダ・マイゼンブークに次のように書いている。

「チェルケーソフの意見には真実の一面もあります。そしてわれわれはそのことについて一度ならず考えました。まず彼が間違っている面から申しませう。われわれが見捨てられたのは『鐘』の要求がすでに実現されたからではなく、ポーランドの戦いが粗暴にして始末におえないナショナリズムを喚起し、政府がムラヴィヨーフへの礼賛もカトコフの人気もおさえることが出来なかったからです。これら紳士諸君はいかなる文明化された階級について語っているのでしょうか？ 全貴族階級は拍手喝采することによって、恐るべき所業を彼らと共になしたことはないのでしょうか？ 信じて下さい。われわれはロシアに対して再び大きな奉仕をしたのです。われわれは一民族の皆殺しに反対する抗議の生き

171) Козьмин, указ. соч., стр. 521-522.

172) Там же, стр. 522.

二つの論争

た証拠なのです。私はまったく後悔していません。しかし他方、私はあれらの若い人びとが、われわれが彼らの贖罪の、あるいは少なくとも罪ほろぼしのために犠牲の役を果たしているという点を第一の功績として評価しなかったことについて、若者達を非難しています。われわれや、ミハイロフのように死んだ人びとや、チェルヌィシエフスキーやセルノ-ソロ（ヴィエーヴィチ）のように投獄された者たちだけが、血に汚れた所業を共にしなかったのです。教条的開化主義者の役割とは、それではいったい何だというのでしょうか？ 小粒のピョートル大帝の役割か、それとも文明の奴隷とでもいったものでしょうか？ 人は黙っていることもできますし、あれこれ書くこともできます。しかしこの *Hohe Priester*（大祭司）の役割は私は御免です。

Weiter（さらに）、もう一つ問題があります。どうしてこれらの若い人びとは、at home（国内）でも abroad（国外）でも、定期刊行物を出すだけの力も才能も愛情も根気もないのでしょうか？ われわれは、論文でも印刷所でもチェルニエツキ¹⁷³⁾でも譲りましょう。左様、彼らにやらせてみましょう。ロシア文学の不毛さは驚くべきほどです。これは砂漠の不毛さです。チェルケーソフに言って下さい。わたしたちは協力する用意はあるが、編集の仕事は（精神的にも肉体的にも）引受けなかつもりだと……」¹⁷⁴⁾

この短い手紙の中に、ゲルツェンの考えや立場がかなりはっきり出ている。彼はカトコーフをはじめとする体制派に対しては、彼らが政府のポーランド弾圧に加担したことを非難するとともに、リベラルな貴族層もまたそれを支持したことを責める一方、他方では若き反体制派がゲルツェンの立場を正しく評価できず、いたずらにはげしい言辞のみを弄し、さらにはゲルツェンが苦勞して作りあげたロシア出版所を利用することのみを考えていることに不満を表明しているのである。しかし「若き亡命者たち」にしてみれば、殺されたり投獄されたりした同志、先輩たちと、ロンドンで潤沢な資金をもって、口先だけのそれも生ぬるい政府批判をやっているゲルツェンとを同一視することは絶対にできないところであった。

ゲルツェンが自由ロシア出版所をロンドンから大陸に移す意志があると聞いて、これをロシアの「すべての亡命者の機関紙」¹⁷⁵⁾に変えようとの考えは、ひとりチェルケーソフのみならず、ウーチンを中心とするスイスの「若き亡命者たち」の共通の意向でもあった。ウーチンはこのような改造の必要性をこの年6月22日と7月9日の二回にわたってオガリョーフへの手紙¹⁷⁶⁾の中で述べたが、ゲルツェン自身ジュネーブを訪れると聞いて12月16日にめづらしくゲルツェン本人にあてて以下のような手紙を書いた。

「まず最初に友人たちからの頼みをお伝えします。あなた御自身当地を来訪される御意向の由、またスイスへ移住され、当地へチェルニエツキをお連れにななるという御決心を

173) リュードヴィク・チェルニエツキ(1825-1872)のこと。彼はポーランドの亡命者で、ロンドンの自由ロシア出版所にながく働いていたが、ゲルツェンは1866年に彼に印刷所を譲った。

174) Герцен, XXVII, 449.

175) *Л. Н.*, т. 62 стр. 675.

176) Там же, стр. 657, 663.

変更されてはいけないとの御返事に対し、感謝申し上げるとのことです。……私はあなたにわれわれの共通の友人たちが各地からジュネーブに集まったと書きました。実際に、メーチニコフはイタリアから、あなたも御存知のポーランド革命の活動家のヤコービもチャーリヒでの急ぎの仕事を捨てて当地での共同会議にやって来ました。此処にはこの夏あなたの所にお連れした百姓女¹⁷⁷⁾もいますし、ソロヴィエーヴィチも、ジュコーフスキーもグレーヴィチもいます……

尊敬するアレクサンドル・イワーヌィチ、すべてこれらの人びとと一緒にやってゆくか、あるいは分散してしまうかは、あなたにかかっています……あなたは15年間というものを伝道してこられました。われわれはあなたの許で学び、それと同時に、ロシアに居たので、もう一人の師であるチェルヌィシェフスキーの許で学びました……われわれは成長し、強くなりました。そして現在此の地に集った人間は例外なくすべて直接的な、積極的な仕事へと進んだ者たちです……たまたまわれわれはロシア国内の革命活動の外へと放り出されましたが、われわれの希求も、われわれの心がまえも前と同じで、変わってはいりません。今日のロシアの状態を仔細に検討してみますとき、亡命生活にあるわれわれの心がまえは、以下の四点において仕事を追求すべきであると確信するようになりました。(1)プロパガンダ。(2)確実な組織的方法でロシアへ宣伝文書を恒常的に売りさばくとともに、ロシアとの通信ならびにロシアから情報を受け取ること。(3)われわれの事業にとって多少とも有益たりうる人びととの結びつきをはかること。(4)資金を組織し拡大すること。

目下のところ、主たる問題は第1と第4点、即ちプロパガンダとファンドにあります……あなたを迎えるべく集ったわれわれは、共通の事業についてさまざまな問題を討議しましたし、論じあっています、あなたがお着きになったら、共通の意見にできるだけ近い、よく考えぬかれた事柄について最終的な審議に入りたいと思ったものですから……あなたは昨日のお手紙でも『すべて過去のことは不満足である』旨くりかえしていられます。あなたはロンドンで私にも他の者にも、一度ならずこのようにおっしゃいました。あなた御自身これ以上自分たちだけで『鐘』をやってゆくのは不可能だと一度ならず申されました。——私は『鐘』のプログラムを拡張し、その意義を明白に定めるべきだと思います。そしてその上で紙面が偶発的論文によってではなく、一定の欄によって、生ける資料によって満たされるべきだと考えています。このような資料はいつでもありますし、これからもありましょう。しかしこのような仕事は二人の人だけでやるにはあまりにも大きすぎます。目下のところあなたの過去のお仕事に花を添える最上の方法は、あなたの個人的な機関紙である『鐘』を、すべての亡命者の機関紙にすることだと私は信じています。こうすることによってあなたはすべての敵に対し、言葉と文章による共感によってあなたの周囲の仕事もまたグループで行なわれていることを示すことになりましょう。『鐘』が全亡命者の機関紙になったことを告げ、示されることによって、あなたは一党の、より正しく言えば、革命的グループの、当地にもおり、ロシアにもいて行動を欲している人びとのグループの一致団結を示されることになるのです。このような『鐘』の一語一語によって、敵も

177) 誰を指すか不明。

二つの論争

味方も、個人的ではない、私的ではない、普遍的な、全体の力を、今日では十人か二十人の団結の力ではあっても、積極的にロシア国内に呼びかければ、まもなくロシア中の生き生きとした革命的なすべてが**団結するであろう力**を感ずるようになるのです。そしてこのような力こそ**重視すべきです……**」¹⁷⁸⁾

たしかに『鐘』はよい意味でも悪い意味でも、ゲルツェン個人の新聞だった。それは今日の新聞という言葉から連想されるようなものとはかなり違っており、たとえばゲルツェンの『終りと始め』などのかなり長文の論文も連載されたりする、見方によっては性格のはっきりしないものでもあった。しかもその編集者はゲルツェンとオガリョーフの二人きりで、記事の取捨選択については、ほとんどゲルツェン一人が独裁的に決めていたと見てよい。そこで文中にもあるように、ゲルツェンがジュネーブを訪れるのを機会に、「若き亡命者たち」が集って、事前に協議を行っていたのであるが、これがコジミーンの名付けた「亡命者たちのジュネーブ会議」である。この席上で、もしゲルツェンとの間に合意が成立して、新しい新聞が出されるとしたら、それはどのようなものであるべきかをめぐって意見がかわされた。その結果として、次のような改造案がまとめられたが、これは1956年になってはじめて発表された資料の中に出てくるものである。¹⁷⁹⁾

(1)政治評論。(2)経済欄、(a)ロシアの国民経済の原理を明らかにする理論的論文。(b)制度・政策の批判。(c)法制度と経済制度の緊密な関係を明らかにし、法理論を批判するもの。(3)諸問題の歴史的研究。(4)ロシア国内の記事。(a)ロシアの新聞や重要な政令の抜粋。(b)外国の新聞からのロシアに関する記事の抜粋。(c)通信員からの記事。新聞からではなく、ロシアから直接個人的手段でもたらされたもの。(5)文芸欄、新刊紹介。(6)雑録。

この文書の初めの部分は失われて伝わらないが、われわれにとってもっとも興味あるのは、新聞の発行の必要性を述べた後半の部分と推測される以下の言葉である。そこには次のように書かれている。

「今日のヨーロッパ各国の政治・経済状態は、国家的な道によっても、市民的な道によっても、どうにもならなくなっていることをはっきり示している。しかしヨーロッパの政治・経済生活の諸事実と社会主義との間に現存する結びつきは、各人にとって明らかにされてはおらず、これは政治生活の多面的な諸現象を多少なりとも深く検討することによってのみ明らかにされ得るのである。このためにわれわれは自由ロシア新聞に特別な欄を設定したいと思う。」¹⁸⁰⁾

つまりここには、彼ら「若き亡命者たち」の視野が、ロシア一国からヨーロッパ諸国の政治・経済現象へと拡大し、さらにそれらと社会主義との結びつきが認識されているのであ

178) *J. H.*, т. 62, стр. 674-675. (強調-原文)。

179) これは「パリ・コレクション」の『鐘』のアルヒーフにあったものだが、*J. H.*, т. 63, стр. 245-246 初めて発表された。

180) *J. H.*, т. 63, стр. 245.

る。この文章の前に、ロシア国内の解放事業の必要性が述べられていたであろうことは、先のウーチンのゲルツェンあて手紙からも推測されるが、彼らの観点がいまやロシア一国にとどまらず、全ヨーロッパに及び、とくに後述の「第1 インターナショナル」との関係でいうならば、社会主義運動にも向けられている事実はきわめて重要であろう。

しかしこのジュネーブの「若き亡命者たち」の提案をゲルツェンははっきり拒否した。『鐘』の1865年1月1日付第193号の冒頭で、彼はオガリョーフと連名で「『鐘』は前と同じく、ロシアにおける社会的発展の機関紙としてとどまる」と宣言したが、さらに拒否の理由として、プロパガンダには「言葉、協議、分析、摘発、理論」によるものと、「サークルを作ったり、内外の関係をつける手段を講ずること」とがあるが、後者はロシア国内でこそ行なえるのであって、自分達の仕事はもっぱら前者であるといっている。¹⁸¹⁾ このことはまた彼の先のウーチンの手紙に対する返事の下書きにおいても、くりかえされているが、¹⁸²⁾ この他に拒否の理由として彼が「若き亡命者たち」の才能も力も信じていなかったことと、さらに彼らが「バフメーチェフ資金」の横領をたくらんでいると考えていたことが考えられる。¹⁸³⁾ このジュネーブでの「若き亡命者たち」との話し合いのあと、彼はオガリョーフにあてて以下のように書き送った。

「当地では平和的に解決した。若い人たちは（腹蔵のあるなしはわからぬが）自分たちの要求を引っ込め、5月1日までに山ほどの仕事と通信を約束してくれた。印刷その他について彼らからは何の援助も期待できない。むしろカサートキンが何かやってくれることだろう。彼らと一緒にいることは、私にとってこの上なく退屈だ。みんな狭量で、小粒で、個人的で、誰一人として、興味あるもの、学問的なもの、政治的なものすら学ぶことなく、読んでもいない。ウーチンはその限りない自己過信によって他のものよりも悪い。ぼくは現在に至るまで君の彼への love が理解できない。どうして君が彼にあんなに恋文を書いたのか、すまないが、その四分の三は酒のせいだと思っている……」¹⁸⁴⁾

結局ゲルツェンはこの手紙を書いた二日後の1月6日にジュネーブを立ち去った。彼にはこの中で触れられているカサートキン一人が、頼りになる人間のような思われたが、「若い亡命者たち」はカサートキンを「ゲルツェンの犬の鎖」¹⁸⁵⁾と呼んで信用していなかった。しかもゲルツェンが「平和に解決した」と記したこの時の妥協案も、会議の直後になってアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチとヤコービの強力な反対で葬られてしまった。¹⁸⁶⁾ その原因はゲルツェンの出発直前になって、「若い亡命者たち」が『鐘』とは

181) *Колокол*, VIII, 1581.

182) Герцен, XXVII, 552-553 (1864年12月25日付)。

183) См. там же, XVIII, 608-609.

184) Там же, XXVIII, 9 (1865年1月4日付)。

185) Козьмин, указ. соч., стр. 531.

186) この時アレクサンドル・セルノを支持した一人に、『若き世代へ』の作者たるシェルグノーフの妻リュドミーラ・シェルグノーヴァがいた。彼女は政治的信念というよりアレクサンドルに心ひかれて、支持したといわれる。Н. В. Шелгунов, Л. П. Шелгунова, М. Л. Михайлов, *Воспоминания*, т. 1, М., 1967, стр. 22-23, Козьмин, *Из истории*, стр. 530-531.

二つの論争

また別の機関紙を「バフメーチェフ資金」を使って発行することを考え、ゲルツェンがこれを拒否したからである。¹⁸⁷⁾

このようなゲルツェンと「若き亡命者たち」との反目は、さらにゲルツェンの二度にわたる皇帝アレクサンドル二世あて公開書簡と、「カラコーゾフ事件」についての見解の表明によって、ますます拡大されていった。

すでに見たように、ゲルツェンは1855年に新たに即位した皇帝に期待の一文を『北極星』に発表した。それから丁度十年たった1865年5月25日付の『鐘』の第197号に、久しぶりにまた皇帝への手紙をのせた。これはこの年4月12日に皇太子ニコライ・アレクサンドロヴィチ大公がニースにおいて脳膜炎で亡くなったのを機会に、皇帝がふたたび即位当時の改革の道へ復帰することを願ったものであった。¹⁸⁸⁾ この中で彼は、権力に反対している自分たちの誰一人として、皇帝の個人的不幸を喜んではいないが、しかしその不幸とても、自分たちの息子を失ったポーランドの人びとにくらべるならば、悲しみが凌辱されないだけまだ幸せなのだと述べ、現にロシア国内にあって苦役に苦しんでいる多くの政治犯¹⁸⁹⁾の釈放を要求したのであった。¹⁹⁰⁾

ゲルツェンの次の皇帝にあてた公開書簡は翌1866年6月1日付『鐘』の第221号に発表されたものであるが、これはつい二ヶ月たらず前の4月4日に起ったカラコーゾフの皇帝暗殺未遂事件のニュースが執筆の動機となっている。ゲルツェンは皇帝が一年前の自分の手紙をよく読まず、皇太子の死を反省のきっかけとして即位当初の自由な政策に立ち戻ろうとしなかったが故に、自分が警告していたような不幸の事態が今度は皇帝自身の身の上で起ったのだといい、さらにこの事件は皇帝の取り巻きによって大々的な陰謀のように扱われているが、決してそのようなものではなく、陰謀をでっちあげることによって利益を得る奸臣や買収されたジャーナリストたちこそこの際思いきってしりぞけられるべきだと主張している。¹⁹¹⁾ さらに彼はこの手紙の中で、前に公開状を発表したとき、自分が「多くの者によって罵られた」ことを述べ、多分「この手紙が最後の」ものになるだろうとも言っている。この「多くの者」のなかに「若き亡命者たち」を中心とするラジカルな「ニヒリストたち」があったことはいうまでもない。

「カラコーゾフ事件」についてのゲルツェンの意見は、まずこの事件の直後の5月1日付『鐘』の第219号にのった『イルクーツクとペテルブルグ』という題の論文にあらわれた。この副題は『1866年3月5日と4月4日』となっているが、3月5日というのはゲルツェンの間違いで2月14日のことであり、これはニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチの死んだ日であって、4月4日はカラコーゾフの暗殺未遂の日のことである。

187) *Л. Н.*, т. 67, стр. 701.

188) Герцен, XVIII, 622.

189) とくに彼はニコライ・セルノ-ソロヴィエーヴィチとチェルヌイシェフスキーの二人の名前をあげている。

190) *Колокол*, VIII, 1613-1614.

191) *Колокол*, IX, 1789.

「われわれが間接的にもせよ当局の利益になるような言葉を言う場合は絶対にない。4月4日の狙撃はわれわれの心にはそぐわないものであった。われわれはこのことから大いなる不幸を予期し、誰か狂信者が取った責任に対していきどおりを感じている……

われわれには銃弾は必要ではない。われわれは大道を力強く進むものである。道の上には沢山の罨もあれば泥濘も多いが、それでもなおわれわれには大きな希望がある。足に重い足枷がはまっても、心には大きな、奪うことのできない権利の主張がある。われわれを止めることはできない。ただ一つの大道から別の道へと方向を転ずることができるだけだ。調和のとれた発展の道から全面蜂起の道へと転じさせることができるだけである。」¹⁹²⁾

このようにゲルツェンは、まずはじめにテロ戦術に反対の旨を表明する。さらにカラコーゾフについては「狂人、狂信家、あるいは貴族出身の怨恨を抱いた人間」という表現すら用いて、このような者を死んだミハイロフやセルノ-ソロヴィエーヴィチや病めるチェルヌィツェフスキーと同列に扱うことはできないともいっている。ところで、この時の報道によれば、皇帝は引き立てられたカラコーゾフに対し、まず「お前はポーランド人か？」と聞いたとのことであった。¹⁹³⁾ またこの時カラコーゾフが暗殺に失敗したのは、たまたまそこに居合わせた農民出身のコストロマーの商人コミッサールロフなる者が飛び出して彼の腕を打ったからであって、その後コミッサールロフは貴族に叙せられ、自由経済協会の名誉会員にも推挙されたということも報じられた。¹⁹⁴⁾ この事実は農民のツァーリに対する信仰を意図的に広めるために、政府の御用新聞によって大々的に宣伝されたが、ゲルツェンはこれをもってポーランド人及びロシアの農民に対する非常な侮辱であると口をきわめて非難している。しかしこの事件に関しては、農民を含むロシアの全世論が、圧倒的に暗殺者に対するはげしい憤りに満ちていたのは事実であって、革命家たちは、皇帝と農民とのきずながいかに強いものであるか、一方自分たちと人民との間の深淵が今なおいかに大きいものであるかを改めて思い知らされねばならなかった。¹⁹⁵⁾

ゲルツェンのこのようなテロリズム批判はさらにこの年12月から翌年2月にかけて3回に分けて『鐘』に掲載された長文の論文『秩序は勝誇る！』の中により詳細に理論立てて述べられている。¹⁹⁶⁾ ところでこの論文は『鐘』に掲載された彼の数多い文章の中でも、内容的に見て『終りと始め』と並ぶ豊かさを持つだけでなく、『昔の同志への手紙』に直接つながるところの晩年の見解がよく述べられているものである。もっともこのような論文が『鐘』という新聞に掲載されること自体、「若い亡命者たち」の側からみれば、『鐘』がゲルツェンの個人的新聞と見なされてきたことを裏付ける一助にもなったであろう。しかし同時にこのことは、この新聞が他の類似の出版物には見られない特徴を有するものであることを物語るものでもある。

192) *Колокол*, IX, 1789.

193) Venturi, *op. cit.*, p. 347.

194) Герцен, XIX, 382-383.

195) Venturi, *op. cit.*, p. 348.

196) [第一論文] 1866年12月1日付第230号, [第二論文] 1867年1月1日付第231-232合併号, [第三論文] 同年2月1日付第233-234合併号。

二つの論争

この三回に分載された第一の論文において、まず初めにゲルツェンは1848年の革命の挫折後のヨーロッパ政治状況を考察する。一言でいうなら今日のヨーロッパにおいては、「革命は打負かされ、赤は打負かされ、社会主義は打負かされ、秩序は勝誇り、帝位は強化され、警察はととのえられ、裁判所は死刑の宣告を下し、教会は祝福を与えている。」¹⁹⁷⁾しかしてこのようなヨーロッパを動かしているのは二人の人物、即ちナポレオン3世とビスマルクであろう。

ナポレオンはフランスが革命を裏切ったこと、革命に恐れをなして立ちどまったことを理解した。彼は古くから組織されてきた社会が欲したものは自由ではなく代議制という飾りにすぎないことをさとっていた。そしてこの古い社会を憎悪し、社会変革へ直進しようとする新しい力が弱いということも知っていた。彼はすべてのことを理解したが故に1848年の共和制の終らんとする喧騒の中で、ひとり黙って、『梨の実が熟する』のを待っていたのであった。¹⁹⁸⁾

一方ビスマルクもナポレオンに劣らず自国の俗物たちの本質を見抜いていた。彼はドイツにとって必要な自由とは理論上のものだけであり、自国民が権力に服従することに慣れていることを理解していた。それだけではない。今日のドイツ人がフランスを嫉み、ロシア人を憎悪していること、そこからして、侵略的な性格をもって強力な統一国家を欲しているということも見抜いていた。

他方ヨーロッパ諸国に目を転ずるならば、オーストリアは人種の上からも民族性の上からも、ばらばらの国である。それはひび割れた自らの王冠の上に、スラヴ、ドイツ、あるいはハンガリーのいずれの記章をつけたらよいのかわからないでいる。ヨーロッパの中でも今や取り残されてしまったこの国は、連邦の道によってのみ復活が可能かも知れないが、それとてもむずかしいであろう。

スイスはスイスでフランスとプロイセンにはさまれ、その偉大な最後をとげようとしている。ひとりイギリスだけがいまだ安泰であるが、それとても中世的生活の最後の局面を華麗にくりひろげているにすぎない。

このような中であって、何が滑稽だといってヨーロッパの革命家の役割ほど滑稽なものはないであろう。政府の方は少なくとも強力な統一国家を作りあげるといふ自分の仕事を知っているが、革命家ははたして自分たちが何をなしているか知っているだろうか。彼らは自由・平等・友愛を夢みてきた。しかしそれらを与えることはできなかった。だが「ローマは一日にして成らず」というわけで、彼らは個人の自由の代りに国家の自由を、民族の独立を、一言でいうならばロシアやペルンヤが昔から享受している自由を口実に反動と和解したというわけである。まったくもってこれは大した前進である。ただ残念なのは平等の代りに人種差別が、友愛の代りに諸民族の憎悪が生まれるかも知れない、ということだ。

かくして全ヨーロッパに秩序が勝誇り、伝統的な王国と合法的君主制に代って、軍事独裁と非合法的帝国が出現することになるであろう。しかしこれは老いたるヨーロッパが死に近づきつつあることを意味するものにほかならぬ。しかしその前に二、三度熱病の発作

197) *Колокол*, IX, 1879–1880.

198) Там же, стр. 1880.

にも似た最後の戦争が起るかも知れないし、あるいは医師 ビスマルク の英雄的治療が更に二、三度ほどこされるかも知れない。

人間が歴史上の出来事によって作られるように、歴史上の出来事もまた人間によって作られるものである。これは宿命論ではなく、継続するプロセスの諸要素の相互作用である。歴史的な仕事とは、現に存在するものの生き生きとした理解の仕事にほかならない。もし十人の人間が、千人が漠然と欲することを明瞭に理解するならば、千人はその十人のあとについて進むであろう。だからといってこの十人が善へ導くということにはならない。それは良心の問題である。

このようにゲルツェンはその議論を展開しているのであるが、この中ではじめて彼は「第1インターナショナル」についてごく簡単に触れている。それはヨーロッパにおいては「今日まで見せかけだけの秩序のみが可能であったが、何千という地下のもぐらがこれを掘り崩し、何千という地下の小川がこれを浸蝕してきた。これから何をなすかといえば、自由出版所と並んで鉄道がある。今日では移動が容易になり、外国まで追跡するのが困難になっている。そしてこれらのことが、互いに補い合っている。一年前にパリの学生たちがドイツの学生と一緒にリエージュに行ったことがあったが、今年はフランスとドイツの労働者がイギリスやスイスの労働者と協議するためにジュネーブに集った。」¹⁹⁹⁾と述べているくだけである。いうまでもなくこれはこの年9月に開かれた「第1インターナショナル」の第1回大会のことをさしている。そして前後のコンテクストから、ゲルツェンがこの集まりに、将来ヨーロッパの「秩序」を「掘り崩す何千という地下のもぐら」の活動の一つを見ていたことも明らかである。

つづく第二論文は、ゲルツェンがこれまでくりかえして述べてきた歴史観とその「ロシア的社會主義」のいわば要約ともいうべきものである。

まず最初に彼はゲーテの詩を引用しつつ、「老いたるヨーロッパ」に対して、新しい未来の世界を代表する二つの国、アメリカ合衆国とロシアの存在を指摘する。ヨーロッパとアジアの間にまたがるロシアは、そのいずれとも異なる発達の仕方をしてきた。征服によってではなく、植民によって成長してきたロシアは、ローマ法に依拠せずに国家を形成する一方、「人間と土地との関係にあって独自の理解」を保持してきた。西欧にあっては「六月のパリケード」においても「土地という言葉聞くことなく」、またラッサールは土地をもって個人の自由を邪魔立てし、労働者の足を縛りつける鍾りだと考えている。しかしロシアでは西欧的理解とまったく違う理解の仕方をしている。そこでは「土地に対する権利は、ユートピアではなく、現実であり、生活慣習からくる事実である。」しかもこの権利の自覚が遅かったことは、ロシアにとって大いなる幸いであった。もしもっと早かったら、西欧的見解の一方的重圧の下に、土地に対する権利が頭から否定されていたことであろう。この点で「社会主義はわれわれに大きな手助けとなった」のである。

ところでこのようなロシア独自の「土地」に対する観念を最初に指摘したのはスラヴ主義者であった。しかし彼らはロシア農村共同体に着目しながら、問題のもう一つの側面、

199) Там же, стр. 1879.

200) Там же, 1888.

二つの論争

即ち「自由」を忘れていた。しかし「個人の自由」こそ全ヨーロッパの歴史が作りあげた偉大な遺産であり、「われわれの今日の全課題は、共同体的土地所有と共同体そのものとを失うことなく、完全な個人の自由を発達させることにある。」²⁰¹⁾

しかしてそれが可能か否かということは、「われわれの将来の問題である。」しかし人間が動物と異なるのは、歴史によってである。人間は記憶の助けを借りて、多少なりとも自覚的に努力して自らの生活形態を作ってきた。人間の歴史は個人が自らを併呑する家族に服従しないことから始まった。各人の勝手な意志と法律、個人と社会、そしてそれらの様々なバリエーションを伴った果てしなき戦いこそ人間の歴史の全ドラマである。理性によってのみ社会の中で自らを解放することもできる個人は、社会に逆らう存在でもある。そして個人なしに存在しえない社会は、この反抗する個人を抑圧する。個人にとっては自分自身が目的であり、社会はそれ自体が目的だからである。かつてルソーは人間は生まれながらにして自由であるといい、ゲーテは人間は自由たりえないといった。両方とも正しいし、両方とも正しくない。この二律背反の中にこそすべて生ける者の極がある。生はつねに運動の中にあるのであって、その解決は死だけである。もし個人あるいは社会のいずれかが完全に勝利するならば、歴史は人間同士の食い合いか、おとなしく草を食らう動物の群れになってしまうであろう。しかし権力は自らの権利を、個人の目的としての国家などという抽象的な概念や、*Salus populi* (公共の福祉) とか、個人の良心を社会の良心に従属させるといったキリスト教的観念にもとづいて説明してきた。しかし理論的に解放された個性などというものは、抽象的な空しさにすぎず、現実的には、国家や社会に立脚した政府権力の前ではまことに弱いものである。個人主義の代表であるブルジョアジーもまた、政府の中に自らの支柱と庇護を求めて、大衆の攻撃から身を守っている。新しい警察国家の基礎はここにある。ここからの出口は唯一つ。それはイタリアの統一でもなければ、ビスマルクのプロイセンの道でもなく、またイギリス流の選挙権獲得運動でもない。それはかつてフランスが二度かかげた社会的道だけである。フランスによって提起された「社会問題」こそが、全ヨーロッパにとっての「未解決の問題」なのである。²⁰²⁾

ゲルツェンはこのように第二論文を結んでいるが、すでに見たように、ここには1840年代のはじめに彼が日記に書いた疑問が、二十余年の歳月を経て多くの体験を積んだ上でそれなりの回答となって述べられている。しかしそれはすでに『向う岸から』の中でも『終りと始め』の中でもくりかえし、くりかえし述べられているところでもあることをわれわれは知っている。ただこの論文の中で、ゲルツェンは全ヨーロッパを覆う民族主義と帝国主義の動きの中に、ヨーロッパがながい歴史をかけて作りあげてきた「個人の自由」に対する大いなる危険を予見し、それ故にこそ社会的解決の仕方こそが唯一のものと考えられるゆえんを適確に述べている。

最後の第三論文は、ニコライ一世の死からカラヨーゾフ事件に至る十年間のロシア社会の動きと、ゲルツェン自身の仕事の意味について論じたものである。

201) Там же.

202) Там же. (強調-原文)。

ニコライ一世の死とともに、今まで抑圧されてきた言論が花咲き始めた。このような中において、自分たちロンドンの自由出版所は「土地と自由」のスローガンをかかげて、「ロシア的社会主義」を説いてきた。われわれは「土地なくして自由はなく」「自由なくして土地は確固たりえない」と信じてきた。それではこの「ロシア的社会主義」とは何か。「われわれは以下の如き社会主義を**ロシア的社会主義**と称する。即ち土地及び農民の生活慣習から発し、事実上の土地の分与と現存する分与地の割替えとから出発して、共同体的所有と共同体的統治から発したところの、社会主義一般が志向し、科学が保証するところの、労働者のアルテリと共に**経済的公正**に向かって進む社会主義、これである。」²⁰³⁾

それと同時にわれわれは、ロシアにおける変革が「流血の破局」なしに始められるべきだと信じてきた。そしてこの信念は今も変わっていない。それ故にツァーリが土地をつけての農奴解放を原則として認めたとき、われわれはこれを「ガリラビとよ、汝は勝てり！」という表現をもって心から喜んだものである。しかしこのようなわれわれの政府に対する態度は、「教条主義的な忠良なる臣民」からも「デマゴギーのピューリタン」からも共に理解されず、われわれの「ロシア的社会主義」も笑いものとされたのであった。

われわれが自分達の社会主義をこのように名付けたのは、特にペテルブルグにおいて純西欧的的社会主義の理論が、われわれの教説と並んで勢を得てきたからであった。この最初の代表はペトラシェーフスキー派であって、彼らは「フリーエ主義者」として裁判にかけられた。(もっともわれわれは1834年に政府によってサン-シモン主義の咎で有罪とされたが。) そのあとチェルヌィシエフスキーの強力な個性があらわれた。彼はとくにある一つの社会主義理論に属していたわけではなく、現存する秩序に社会的意味を与え、鋭い批判を下した。彼やミハーイロフたちは、ロシアにおいて最初に、資本によってのみならず家庭によっても苦しめられている勤労者に対し、別の生活への呼びかけをなし、「何をなすべきか」を示したのであった。彼の仲間のもっぱら都市や大学の知的運動の従事者、プロレタリアート、インテリゲンツィア及び「才能ある人びと」から成っていた。彼のプロパガンダは**現在の**苦しみに対する回答であり、それはとくに若い世代に受けた。それは単に文筆活動のみならず、実際行動をも呼びかけたもので、歴史的意義を有するものである。ペテルブルグやモスクワに若者のサークルが出来、社会主義の一般理論が言葉と行動で宣伝された。しかしそこでは農村問題は「特殊な場合」でしかなかった。だがロシアの再建にとって、この「特殊な場合」こそがアルキメデスの槌の原点なのである。経済、行政、司法等の改革も、すべて農民の改革から出発するものだからである。しかし政府による解放は、不十分なばかりか、あらかじめ歪められたものであった。それにも拘らず、たとえ奇型ではあっても、この中には**生きた**胎児が動いていたのである。それ故にわれわれはたとえそれがわれわれの理想には程遠いものであっても、解放の全過程を注意ぶかく見守ってきた。だがここに改革をのぞまぬ政府にとって思いがけない救いがあらわれた。それはペテルブルグの火災であり、カトコフの輩の中傷であり、ポーランドの蜂起である。もともとロシアの人民は皇帝はきらいだが、自らの守護と正義の代表としてのツァーリは愛してきた。人民にとってツァーリは理想であるが、皇帝はアンチ・キリストであ

203) *Колокол*, IX, 1903. (強調-原文)。

二つの論争

る。この時起った愛国主義的力を、われわれは予想もしていなかった。われわれはもっとも強い力、即ち「愚かさの力」を忘れていたのである。この愛国心によって、人びとは心の中のすべて人間的なものを忘れ、帝国のすべて**非人間的な**ものをも忘れてしまったのである。この愛国心の拍手の中にツァーリは再び皇帝として戴冠した。政府は再び迫害を開始し、何人かの若者がその犠牲となった。

すべてこれらの中には何か狂気じみたものがあったが、この狂気は4月4日のカラヨーゾフの皇帝暗殺にまで到達した。希望を抱いてきた者は、その希望が実現しなかったことに怨みとはげしい憤りを感じるものである。狂気と暗い宗教的感情に満たされた心はピストルへと走る。しかし復讐は成功しなかった。反対にそれは反動を正当化し、より一層の反動の口実となった。だが復讐が成功しなかったかわりに、政府のテロもまた成功しなかった。嘘いつわりから始ったテロは警察的泥沼にはまり込んで、わけがわからなくなってしまった。テロは人間だけで足りなくなると、思想や信条をも殺さんとする。しかし政府のテロは、政府そのものの意味を倫理的に殺す結果となった。政府が恐れるのは、法でも共和制でも民主主義でもない。それは**ニヒリズム**と混合した社会主義である。このニヒリズムという言葉は間違われて安易に使われているが、真面目な意味では、「科学と懐疑、信仰の代りの研究、従順の代りの理解」を意味する言葉である。ところでカラヨーゾフ事件の裁判は、モスクワの若者の中にこの二つの思想を組織的に工場の労働者＝農民に宣伝しようという考えがあることを示してはいないであろうか。このような若者はひっ捕えて流刑に処せばそれですむという者があるかも知れない。しかしニコライ時代を思い起してみるがよい。あの反動の時代にこそ、地下でもぐらが活動を始めてはいなかっただろうか。歴史がかくも泥濘の荒涼とした田舎道をたどることは、実に残念なことだが、ひとり意識だけはまっすぐな道を進むものだ。われわれは自分たちの綱領を変えることなく、迂回し押返しながら、この道を進んでゆこう。²⁰⁴⁾

この一文を見てもチェルヌイシェフスキーの弟子をもって自認する若い世代の関心が、次第にヨーロッパの社会主義運動の方へ傾斜していている事実が察せられる。彼らの場合、ツァーリ政府への期待は最初から皆無であって、この点で改革初期にゲルツェンがツァーリを賞讃した態度は「動揺」としかうづらなかつた。また農民問題も彼らの場合その関心の一部であって、すでにその目が工場労働者に向けられていたことがわかる。

しかしゲルツェンのこの論文に対する「若き亡命者たち」からの批判は、まずアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチによってなされた。ジュネーブ会議の直後、病にたおれた彼は、治療を受ける費用にもこと欠き、しばしばゲルツェン、オガリョーフ及びツチコーヴァ-オガリョーヴァの援助を受けたが、²⁰⁵⁾それとても自らの主義にのみ生きるこの若者をして、ゲルツェンに対する痛烈な批判を書く妨げとはならなかつたのである。上の第三論文の出た1867年に、彼は『われらの内輪事』と題する小冊子を発表し、その中

204) Колокол, IX, 1901-1905.

205) *Литературное наследство*, т. 67, стр. 730 и след.

206) Там же, стр. 702.

で、もはやゲルツェンは「死せる人間」であって、「若い世代」は完全に「彼から顔をそむけた。」²⁰⁶⁾と記した。とくにアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチにとって許し難いと思われたのは、いま見た第三論文におけるゲルツェンのチェルヌイシェフスキーに対する評価である。ゲルツェンはあたかも彼の宣伝が、ロシアの農民の現実的要求に応えるものではなく、チェルヌイシェフスキーの仲間がもっぱら都市や大学を中心とする「純粋に西欧的社会主義」の理論家であるかの如く描いたが、これは大きな誤りである。むしろゲルツェンこそ政府による無血の改革を期待し、革命を信じない点で、非難さるべきである。ゲルツェンは自分の理論とチェルヌイシェフスキーの理論が、それぞれ農民及びインテリゲンツィアを対象とする「ロシア的社会主義」と「西欧的社会主義」を代表するもので、この二つは相補うべきもののように述べたが、アレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチには、これは絶対に認められないところであった。

「あなたがチェルヌイシェフスキーの足りないところを補ったですと！とんでもない。ゲルツェン氏、今になってチェルヌイシェフスキーの陰に隠れようとなさっても遅いというものです……あなたとチェルヌイシェフスキーの間には、いかなる共通のものもなかったし、ありえなかったし、いまありません。あなたたちは互いに並存することはできない二つの対立する要素なのです。あなたたちは補い合うのではなく、互いに一方を駆逐する二つの敵対的性格の代表者なのです。世界観から自分自身及び他人に対する態度まで、一般的問題から個人生活の些細な点まで、すべての点でまったく違います……」²⁰⁷⁾

このようにゲルツェンとチェルヌイシェフスキーの相違を述べたあと、さらに彼はゲルツェンの「若き亡命者たち」に対する態度についてもつぎのようにはげしく批判している。

「若い亡命者たちと、彼らに対するあなたの態度はどうでしょうか……あなたが涙を流したところの聖なる心の痛みを負ったこれらの若者が、苦役や絞首台から逃れて突如亡命者となり、スイスに移り住み、ぼろをまとい、腹をすかせて、百萬長者で変ることなき社会主義のあなたに、指導者としてのあなたに頼んだ時——それも日々の糧ではなく、一緒に仕事をしましょうと提案した時に——あなたは背を向けて、高慢な侮蔑をもって答えただけではありませんか。『亡命とは何だ？ わしは亡命など認めない！ 亡命など不必要だ！』と。」²⁰⁸⁾

このように主張するアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチは、「カラコーゾフにふかい共感」²⁰⁹⁾を寄せ、彼をゲルツェンが「ファナチック」とか「狂人」と呼んだことに対しても憤りをかくさなかった。²¹⁰⁾

207) Козьмин, *Из истории* стр. 545-546 より引用。

208) Там же, стр. 534.

209) *Литературное наследство*, т. 67, стр. 727.

210) Там же, стр. 703. Cf. Venturi, *op. cit.*, pp. 277 ff.

二つの論争

この『われらの内輪事』を書いた翌年、アレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチは国際的な労働運動の場に登場するようになる。

当時彼が住んでいたジュネーブには、ロシアの亡命者の他にイタリア人、サヴォワ人、ドイツ人などの外国人の建築労働者が多く働いていたが、彼らの賃金は重労働にも拘らずスイス人の時計職人の半分にも満たず、また相互扶助のための金庫もなかった。そこでこれらの建築労働者は1868年1月19日に大会を開き、セルノ-ソロヴィエーヴィチの指導下に賃金の20%アップと、12時間から10時間への労働時間の短縮とを決議した。さらに彼らはセルノの提案で「インターナショナル」のジュネーブ中央支部へも公式に援助を依頼することを決めた。しかし経営者はこの要求に 응 ぜ ず、このため3月24日から石工、左官、大工がストライキに入った。²¹¹⁾これは約1万2千もの労働者を傘下におさめ各国の労働者や亡命者の援助も受けて、²¹²⁾三週間以上にもわたったが、一応その目的を達して終ることができた。²¹³⁾この事件は当時全ヨーロッパに報道され、「インターナショナル」の歴史の上でも少なからぬ意味を持つものであったが、この大ストライキによってセルノの名は一躍有名になり、この年5月には「インターナショナル」のジュネーブ中央支部の書記に選出された。²¹⁴⁾

ところでゲルツェンはこのストライキの始った時ジュネーブにいて、ストライキがほぼ終息に向った4月7日までこの地に滞在していた。しかしそれにも拘らず、この間に彼が残している7通の手紙には、国際情勢に触れることがあっても、ストライキについてはひとことも書いていない。彼がジュネーブのストライキについて触れているのは、4月26—28日にニースから二人の娘にあてた手紙の中だけであって、それは次のようなごく簡単なものである。

「……そう、ジュネーブのストライキはあまり楽しい終り方をしなかった。労働者が仕事場に現われた時、経営者たちは『張本人たちが』仕事に着くことを拒否した。そこで全部の者が仕事場から出ていったというわけだ。何という犬どもだろう、経営者たちは。それ以上どうということなのか、私は知らない……」²¹⁵⁾

先のセルノの論文を思い起す時、二人の生活環境の相違や、関心のあり方がいかに違っていたか、この手紙は示している。事実ジュネーブに滞在していた間ゲルツェンは毎朝6時半に起きて12時には寝るといった、判で押したようなきわめて規則正しい、且つのんびりした日々をすごしている。そしてこの頃になるとそろそろ健康の衰えを感じ始めたの

211) И. С. Книжник-Ветров, *Русские деятели Первого Интернационала и Парижской Коммуны*, М. -Л., 1964, стр. 31-32.

212) 一般にソビエトの学者はこの時の「インターナショナル」総評議会の指導を強調するが、ヴェントゥーリはこれを否定している。Venturi, *op. cit.*, p. 283.

213) Б. Итенберг, *Первый Интернационал и революционная Россия*, М. 1964, стр. 16. その要結内容は冬期9時間、夏期11時間労働で、賃金は1時間当り45-50サンチーム漸時アップするというものであった。Книжник-Ветров, *указ. соч.*, стр. 33. しかしヴェントゥーリによれば、セルノ自身はこれを勝利とは見なさなかった。Venturi, *op. cit.*, pp. 283-284.

214) Книжник-Ветров, *указ. соч.*, стр. 33.

215) Герцен, XXIX, 323.

か、手紙の中で、コーヒーはよくないの、コニャックはからだに悪いの、といった愚痴をこぼしている。²¹⁶⁾

ところで先に見たアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチの『われらが内輪事』の出版された直後、これを読んだゲルツェンはジュネーブからイタリアのイスキア島にいるバクーニンに以下のような手紙を書き送った。

「親愛なるバクーニン。

セルノ-ソロヴィエーヴィチを送る。彼は厚かましく、気遣いだ。しかし恐ろしいのは若者の大部分がこのようであり、われわれもまたすべて彼らに対してこのようになるかも知れないということだ。ぼくは最初このことについて随分考えもし、書きもしたが、いまそれを印刷にする考えはない。これはニヒリズムではない。ニヒリズムはロシアの発展の中の偉大な現象だ。いや、これはニヒリスチックな服を着て空白の上に現われてきた部屋着であり、将校であり、書記であり、坊主であり、小地主なのだ。これはその下劣さで政府の施策を正当化するところのぺてん師どもであり、カトコーフやポゴージンやアクサーコフ等が指している無学な輩なのだ……君とオガリョーフがこれらのサソリどもをその乳で育てたのだ。これは確かだ。Caro mio (まあ君)、よく考えてみてくれ。彼らに未来はない。これは死んでゆく性病病みの弟なのだ。そしてその墓の上で兄貴がそのまた弟と出会うことになるわけだ。

ぼくはツルゲーネフと Campo Formio²¹⁷⁾ の間柄だ。彼は mit Zärtlichkeit (やさしい) 手紙を書いてきた。ぼくの方も mit Gemütlichkeit (愛想のよい) 返事を出した。『煙』に対するぼくの悪評にもかかわらずこういった次第だ。』²¹⁸⁾

おそらくこの手紙ほどゲルツェンの「若き亡命者たち」に対する憤懣をぶちまけたものはほかにあるまい。表現もかつて見られぬほどどぎついものである。ゲルツェンはかつて『青年ロシア』を批判した時に、バクーニンが自分の意見を支持してくれた²¹⁹⁾ ことをおぼえていて、彼に心の中を打ち割った手紙を書いたのであろうが、その思惑は今回ははずれた。これに対するバクーニンの返事は、二人の「若き亡命者たち」に対する見方がどれほど異なるものであったかを如実に示している。

なお上の手紙の中でゲルツェンはツルゲーネフと和解したと述べているが、このバクーニンの手紙を書く少し前に、彼は三年ぶりでツルゲーネフから手紙をもらっており、その上ツルゲーネフの近作『煙』を送られている。ツルゲーネフはその手紙の中でゲルツェンのことを「スラヴ主義者にして愛国主義者」と呼び、『煙』²²⁰⁾ に対する若い世代の悪評と

216) Там же, 295, 297. (1868年3月23日及び28-30日付の手紙)。

217) 1797年イタリアのカンポ・フォルミオでフランスとオーストリアとの間に講和条約が結ばれたところから、和解の意味で用いられている。

218) Герцен, XXIX, p. 110. (1867年5月30日付) (強調-原文)。

219) 『檄文の時代』, p. 206 参照。

220) この作品に登場するグバリョーフが、はたしてオガリョーフをモデルにしたものかどうかは、にわかには断定し難い。См. Тургенев, Письма, VI, 546.

二つの論争

彼らの自分ひとりに対してだけでなく、ゲルツェンにも向けられた冷たい態度から親近感を抱くようになった気持を伝えている。²²¹⁾

このようにゲルツェンとツルゲーネフが、「若き亡命者たち」に対して憎しみに近い感情を共有していたのに対し、バクーニンは先のゲルツェンからの手紙に対して次のような返事を書いた。

「親愛なるゲルツェン。ぼくはセルノ-ソロヴィエーヴィチのパンフレットを待ちに待ったが、ついに待ちきれなくなった。しかし君の手紙がぼくを驚かしたことは白状する。しかしそれはセルノ-ソロヴィエーヴィチのためではなく、君のためだ。彼に対する君の憎悪には何か年寄りじみたものが感じられる。セルノ-ソロヴィエーヴィチが君に汚い悪口を書き、君の彼に対する憤慨が正しいものであることは、ぼくも信ずるにやぶさかではない。しかし君は彼一人だけではなく、また彼と同じジュネーブの亡命一年生だけを罵っているのではなく、すべての若い世代に対して呪詛を浴びせているのだ。このことは、ポゴジンやカトコフやアクサーコフやツルゲーネフの輩がこの世代に属する若者たちを指差しているとか、彼らがその下劣さで政府の施策を正当化している！とかいった書き方からも証明されるように思われる……

違うのだ、ゲルツェン。現在の若い世代にたとえどんな欠点があろうとも、彼らはカトコフやポゴジンや、君のアクサーコフやツルゲーネフの輩よりもはるかにすぐれたものなのだ。従ってかの放蕩老人どもが指差していることは、彼らにとって名誉にこそなれ、決して不名誉なことではない……君の最後の手紙は不当な不平に満ちている。君はツルゲーネフと Campo Formio の間柄だと書いている。待ってくれ、ゲルツェン。Campo Formio はナポレオンの辞書の最初の言葉で、その最後の言葉がワーテルローであり、セント-ヘレナであったことを思い出してくれ。ツルゲーネフが図々しくも君に Zärtlichkeit（心をこめて）近づいたのは、君と若い世代の不和を嗅ぎつけたからではないだろうか。彼自身は若者たちとの決裂の後、おいぼれて回復できぬほどもうろくしてしまったのに。そして同じ原因からは同じ行動が生まれると思って、今後は君と同じ立場に立つことになるだろうと考えたからではないだろうか。

一人ひとりをとって見れば、若い世代の個々の場合に、不愉快な、無秩序な蒙昧さもあるだろう。汚い側面さえあるだろう。しかしこれはまったく自然な現象だ。宗教的、族長的、身分的伝説にもとづいた古いモラルは、崩れ去ってもう取り返しがつかなくなってしまった。一方新しいモラルは未だ創られていないが、予感されている。実際にそれが実現するのは、根本的な社会変革によってだけだ。そのためには、たとえどれほど強く賢明でも、一人の人間の孤独な力では不足だ。だからこそ新しいモラルが未だないわけだ。若い世代はそれを求めているが未だ見出していない。そこから動揺や矛盾や醜態や、時として汚いスキャンダルが生まれる……すべてこれらはきわめて不愉快な事であり、痛ましくも悲しくもある。しかし自然で避けられないところなのだ。これらすべては、われわれの貧しく、経験のないロシアの亡命者の中にあっては、君があればほどたしかに学びとり手記の中

221) Там же, VI, 246-247. (1867年5月17日付)。

でも書いたかの亡命生活の病いによって倍加されたに違いない。しかしだからといって、こういったことがわれわれの若い世代の真面目な、そう、偉大なといってもよい、資質をわれわれから隠すことになってはならない。彼らの中には、温室的な、人工的な、反射的なものではなく、平等や労働や正義や自由や理性に対する本当の情熱だけがあるのだから。この情熱のために、彼らの中の何十人かはすでに斃れ、何百人かはシベリアへと送られたのだ。彼らの間にも、いつでもどこでもいるように、つまらぬほら吹きや口先だけの徒も多くいることだろう。しかし美辞麗句を並べない英雄もいるし、あるいは自分に対してのみ悪口を言う者も、極端に誇張した否定的言辭を吐く者もいよう。いや君の勝手だが、ゲルツェン、これからの新しい正義と新しい生活の潔白にして不器用な、時としてまったく場所がらをわきまぬパイオニアたちは、君の礼儀正しい故人たちよりも何百万倍もすぐれているのだ。』²²²⁾

もとよりバクーニンはツルゲーネフのゲルツェンにあてた手紙を読んではいなかったが、何故にこの時期に彼がゲルツェンとの仲を復活させようとしたかを見抜いている。そしてあたかも説教するかのよう、ゲルツェンの「若い世代」に対する憤懣を解説し、その誤りを指摘したのであった。ここで彼が「若い世代」の弁護をし、新しいモラルについて述べたのは、心からそのように信じていたからであったに違いない。しかしこれに対してゲルツェンがいかなる反応を示したかは、このあと二年余もバクーニンにあてた手紙がないのでわからない。恐らく返事は書かなかったのであろう。そしてこれ以後二年余の間にゲルツェンの中に積み重ねられた考えが四通の『昔の同志への手紙』となって結実することになるとも言えるのである。

*
* *

バクーニンが四年間にわたるイタリア生活を切り上げてスイスに移って来たのは、このゲルツェンへの手紙を書いてから三ヶ月ほどたった1867年の9月であった。彼はこの年9月9日からジュネーブで開催された「平和自由同盟」の第1回大会にオガリョーフ及びヴィルポフと共にロシアの代表として参加した。この大会はプロイセンとフランスの間の関係が次第に切迫してゆくのを前にして、ヨーロッパの平和主義者や自由主義的共和主義者が、政治的自由と平和主義の宣伝のために6,000人にのぼる各国代表を集めて開催したものであったが、バクーニンは大会第二日目に演説を行っている。²²³⁾ 一方ゲルツェンの方はオガリョーフのすすめにもかかわらず、この会議にはまったく冷い態度をとり、ニースから腰を上げようとしなかった。²²⁴⁾ バクーニンはこの「平和自由同盟」の中央委員として活躍し、10月26日の中央委員会に「理由付き提案」として同盟の綱領ともいべき長文の論文『連合主義、社会主義及び反神学主義』²²⁵⁾を提出した。この論文はバクーニンの

222) *Письма Бакунина к.....* стр. 314-317. (1867年6月23日付). (強調-原文)。

223) E. H. Carr, *op. cit.*, p. 344.

224) Герцен, XXIX, 183. (1867年8月27日付オガリョーフあて手紙)。

225) Michel Bakounine, *Oeuvres*, т. 1, (6-ème édition), Paris, 1912, p. XXIV, pp. 1-205. 邦訳『バクーニン II』三一書房, 1970, pp. 161-294.

二つの論争

大部分の論文と同じように完成されてはならず、しかも連合主義と社会主義については、綱領にふさわしく比較的短かくまとめられているのに対し、神と国家の否定とうたった反神学主義は哲学的議論に立ち入ってついに未完に終わっている。

彼はジュネーヴ湖畔のヴェヴェイに身を落ちつけたが、そこは少し前からウーチン夫婦がジュコーフスキー夫妻やオリガ・レヴァショーヴァと一緒に共同で暮っていた家であった。かくて間もなくバクーニンの周囲には、新しい亡命者のサークルが作られ、上記のほかにエルピジン、トルーフ、ジェマノフ、シチュルバコフ、バルチャーネフ夫妻などが加入してきた。このグループによって翌1868年の9月はじめに、新しい機関紙『人民の事業 (Народное дело)』の第一号が出されたが、²²⁶⁾ その中の『われわれの綱領』はバクーニン一人によって書かれている。²²⁷⁾ その中で彼はまず「人民の知的、社会的、経済的、解放」をかかげ、まず知的解放については「神に対する信仰及び靈魂の不死と」「あらゆる種類の観念論一般の信仰」をまっこうから否定し、「無神論と唯物論の味方」であることを宣言した。つづく社会的、経済的解放に関しては、「人民の経済的生活こそが根本問題であって、人民の政治的存在の真の説明もその中に含まれる」と述べ、現在の政治機構の基礎にある相続権及び家庭における父親と夫の権利を否定した。この相続権及び父権の否定は、「結婚制度の廃止」の主張や男女同権の主張とともに、バクーニンによってくりかえし強調される場所であるが、後にゲルツェンは『昔の同志への手紙』の中でこの点を批判の対象に取上げることになる。さらに経済的権利の基礎としては、土地がそれを耕作する農村共同体に属することと、資本並びにすべての生産手段が労働者の連合に属するものであることを「二つの基本的命題」としてかかげている。そして最後の政治的な自由については、「まずはじめに国家の完全な破壊」の上に労働者並びに農民、手工業者の連合を打ち出している。²²⁸⁾

即ちこの論文は、まさしく彼の『連合主義、社会主義、反神学主義』の主張の要約ともいえるものであったが、この内容をめぐって内部で意見が別れ、とくにウーチンがこれに反対した。この時バクーニンは、一つにはロシアの問題からより広い国際的な場へ活動の舞台を移すことを望んだことと、二つにはゲルツェンの「若き亡命者たち」との「経験に学んだ」²²⁹⁾ こともあって、この『人民の事業』から去って行った。そこで第二号以後は彼に代ってもっぱらウーチンが編集、執筆に当るようになるが、後年のマルクスをはさんでのバクーニンとウーチンの「第一インターナショナル」内部における対立の芽が早くもここに生まれることになる。²³⁰⁾

226) Пирумова, указ. соч., стр. 264-265.

227) しかしバクーニン自身はこのことについてまったく相反する発言をしており、ジュコーフスキーによって書かれたという説もある。だがそのもとになるのはバクーニンの『国際同胞団』の綱領であると考えられるのでここでは一応バクーニンの著作として扱う。См. Б. П. Козьмин, *Русская секция Первого Интернационала*, М., 1957, стр. 87.

228) Вл. Бурцев, *За сто лет*, London, 1897, стр. 87-89.

229) М. Бакунин, "Интриг г-на Утина," *Материалы для биографии М. Бакунина*, т. 3, М. -Л., 1928, стр. 409.

230) Там же, 410-411.

バクーニンがエルピジンの紹介で「インターナショナル」のジュネーブ支部に加入したのは、1868年の7月であったと考えられる。²³¹⁾ 彼はこの年9月21日から25日にかけてベルンで開かれた「平和自由同盟」の第二回大会に出席したが、同じ9月のはじめにブリュッセルで開かれた「インターナショナル」の第三回大会は、三票の差で「平和自由同盟」の大会へ代表を送る招待を拒絶し、²³²⁾ 逆に「同盟」の会員がインターの支部の会員になることを要請した。²³³⁾ このベルンの同盟の大会において、バクーニンは、はじめてそのアナキズムの諸原理を公けに宣言した²³⁴⁾ が、国家と私的相続権の廃止を要求する彼の決議案は多数によって否決されることとなった。かくしてバクーニンは『大会を去る会員の集団的抗議』を叩きつけて「平和自由同盟」を脱退し、18人の同志と共に、大会最終日の9月25日に「国際社会民主同盟」^{アリアンス}を設立した。²³⁵⁾ この時イタリア人やフランス人の同志は、この「同盟」が「インターナショナル」とは別の独立した組織になるべきだと主張したが、バクーニンはそれでは両組織が対抗関係に立つことになるとして反対し、討論の結果、「同盟」は「インターナショナル」全体にとってその必要欠くべからざる一部であり、しかしてインターの規約は「同盟」の全員にとって義務と見なされるものであることを決めた。²³⁶⁾ しかしてこの同盟の綱領はインターの規約よりももっとラジカルなものであったが、その内容は以下の如くであった。

(1) 同盟は無神論たることを声明する。それは礼拝の廃止及び科学を以て信仰に代え、人間の正義を以て神の正義に代えることを要求する。

(2) それは何よりもまず階級及び男女個人個人の政治的、経済的並びに社会的平等化を要求する。これは相続権の廃止に始まり、将来各人が生産を平等に享受しうるために、またブリュッセルにおける最近の労働者の大会が決議したところに従って、土地や労働手段が他のすべての資本と同様社会全体の集団的財産となり、労働者によってのみ、即ち農業及び工業の連合によってのみ使用されうるようになることを要求する。

(3) それは男女の子供が誕生以来成長の手段において平等たることを欲する。即ち扶養、教育並びにあらゆる程度の学問技術、芸術の教授が等しく施されることを欲する。けだし、当初は単に経済的、社会的たりしこの平等が、最後には次第次第に個人の偉大な生得の平等にまで達し、偽りにして不正なる社会組織の歴史的産物たるあらゆる人為的不平等を消滅させるであろうことを確信するが故である。

(4) それはあらゆる専制の敵であり、共和制以外のいかなる政治形態をも認めず、すべての反動的同盟に断固反対し、資本に反対する労働者の勝利のみを直接の目的とはしない全政治行動を拒否するものである。

(5) それは現存するすべての政治的独裁国家が、それぞれの国において次第に単なる公

231) *Archives Bakounine*, т. I (1), p. XXIV, Пирумова, указ. соч., стр. 267.

232) E. H. Carr, *op. cit.*, p. 353. 邦訳, p. 460.

233) G. M. Stekloff, *History of the First International*, 1928 (Reissued, N. Y., 1968), p. 123.

234) E. H. Carr, *op. cit.*, p. 356. 邦訳, p. 464.

235) *ibid.*, p. 359, 邦訳, p. 469, *Archives Bakounine*, т. I, (1), p. XXIV.

236) *Archives Bakounine*, т. I (1), p. XXIV.

二つの論争

共の奉仕の行政機関となり，自由な農業と工業の連合の全世界的同盟へと解消するであろうことを認めるものである。

(6) 社会問題の真の最終的解決が，万国の労働者の国際的ないし全世界的連帯の上に立つてのみ可能であると考える同盟は，いわゆる愛国主義や諸民族の敵対にもとづくすべての政策を拒否する。

(7) それはすべての地方連合が自由によって全世界連合となることを要求する。²³⁷⁾

ここに打ち出された生産手段の共有や国家の廃止といった考えは，すべて1864年以来バクーニンの頭の中で考えられてきたものであり，とくにそれは1866年に彼がイタリアにおいて創設した秘密結社「国際同胞団」の綱領を発展させたものであった。²³⁸⁾

ところで「インターナショナル」のブリュッセル大会においては，戦争の問題をはじめ，ストライキ，労働時間，機械の使用，総合教育といった議題が取り上げられたが，このほかすでにローザンヌの第2回大会で問題となった財産及び国家の機能の問題が再び取り上げられた。²³⁹⁾しかしてこの「大会の活動中もっとも重要な出来事は土地所有に関する決議の採択であった。」²⁴⁰⁾はげしい討論の後，大会は土地の私有が，社会に対する個人の独立と自由の保証であるというプルードン主義者の主張に対し，30対4，棄権15をもって耕地をも含め土地とその埋蔵物の社会的所有の確立の必要性を宣言した。²⁴¹⁾

ロシアのジャーナリズムはこの時まで「インターナショナル」については何ひとつ詳細な報道をしなかったが，このブリュッセルの第3回大会にはじめてクラエーフスキーの編集するペテルブルグの日刊紙『声』が，特派員としてボボルイキンを派遣した。彼は「b. b. b.」の署名で8月30日（新暦9月11日）の第239号から14回にわたってこの大会について詳細な報告記事を書き送ったが，これはきわめて客観的な報道で今日でも資料的価値を失っていないといわれる。²⁴²⁾ゲルツェンはこの『声』の記事を丹念に読んでおり，²⁴³⁾ブリュッセル大会の資料をジュネーブにいたオガリョーフに送るよう頼んでいる。²⁴⁴⁾

一方9月25日に成立した「国際社会民主同盟」はその後その書記局の代表であるベッカーを通じて「インターナショナル」への加盟を請求したにもかかわらず，これは12月28日付でロンドンの総評議会によって拒否されることとなった。その理由は「インターナショナル」の中に第二のインターを認めることはできないというマルクスの考えによるもの

237) *ibid.*, pp. XXIV-XXV.

238) *Материалы для биографии М. Бакунина*, т. 3, стр. 558-560.

239) *Stekloff, op. cit.*, pp. 121-127.

240) *Первый Интернационал*, под ред. Бах, Гольмана, Куниной, ч. 1, М. 1964, стр. 161.
邦訳『第1インターナショナル史』第1部，第1巻，刀江書院，1966，p. 172.

241) Там же, стр. 162, 邦訳, p. 174.

242) Б. П. Козьмин, “К вопросу об отношении А. И. Герцена к 1 Интернационалу”,
Исторические записки, т. 54, 1955, стр. 432.

243) Герцен, XXIX, 450 (1868年9月26日付オガリョーフへの手紙。)

244) Там же, 451. (9月28日付)。

であった。²⁴⁵⁾これに対し「同盟」の主としてジュネーブの会員が総評議会と手を切るべきだと主張したが、バクーニンとペロンはこれをおしとどめ、「同盟」の中央書記局並びに地方委員会は解散し、その支部をもって「インターナショナル」の支部に変え、「同盟」の規約は「インターナショナル」の規約と矛盾するものではないので保持することを提案した。²⁴⁶⁾このような考えにもとずき、「同盟」は再度インターへの加盟を申請したが、この申し出に対し総評議会は、翌1869年3月9日付で回答²⁴⁷⁾を寄せ、「同盟」の支部が「インターナショナル」の支部になることは何ら障害がないが、規約については「階級並びに個人の政治的、経済的、社会的平等化」という表現を「階級の最終的廃止と個人の政治的、経済的、社会的平等化」と改めることを求めた。かくて「国際社会民主同盟」の先の規約は「インターナショナル」のジュネーブ支部たる「同盟」の規約として残ることが認められたものと理解され、バクーニンはこの「社会民主同盟ジュネーブ支部」の「綱領と規約」を新たに49条にまとめ、これに「インターナショナル」の規約を冒頭に添えて出版した。²⁴⁸⁾かくて1869年6月22日、シャルル・ペロンは総評議会に対し、「国際社会民主同盟」はこの日をもって解散したことを告げるとともに、同盟のジュネーブ支部（実際に存在したものとしては「同盟」の唯一の支部であった²⁴⁹⁾）を「インターナショナル」の支部として公式に認めてくれるよう、新たな規約を添えて要請した。これに対して7月28日総評議会の書記長エッカリウスは、万場一致で加入が承認された旨の返事をした。²⁵⁰⁾しかし以上に見た面倒ないきさつが、後に「インターナショナル」におけるマルクスとバクーニンの対立となって尾を引くこととなる。²⁵¹⁾

これより前「自由平和同盟」を脱退したバクーニンが、「国際社会民主同盟」を設立したことは、いち早くロンドンのマルクスの耳に入っていた。かねてからバクーニンの思想と行動に不安を抱いていたマルクスは、そこでバクーニンについての問合せをアレクサンドル・セルノ-ソロヴィエーヴィチに手紙で聞いたが、この事実をセルノから聞いたバクーニンは、12月22日にマルクスにあてて次のような手紙を書き送った。

「わが親しき旧友！」

セルノが君の手紙のぼくに関する部分を知らせてくれた。君はぼくが依然として君の友であるかどうか、彼にたずねている。その通りだ。親愛なるマルクス、今までのいつの時にもましてぼくは君の友達だ。今のぼくには君が経済的革命の大道を選んでわれわれに後

245) *Archives Bakounine*, т. 1, (2), p. XXII, XXV. A. Lehning, *From Buonarroti to Bakunin*, Leiden, 1970, p. 267., Пирумова, *указ. соч.*, стр. 269.

246) *Archives Bakounine*, т. 1, (2), pp. XXVI-XXVII. ピルモヴァはこれをもって「インターナショナル」の中に「同盟」を温存させる考えであり、ギョームは最初この考えに反対したと説明している。Пирумова, *указ. соч.*, стр. 273.

247) この回答はマルクスに委ねられたが、彼は12月15日にエンゲルスに手紙を書き、その意見を「フランス語」でただちに送るよう要求している。См. Пирумова, *указ. соч.*, стр. 299-270.

248) *Archives Bakounine*, т. 1, (2), p. XXVII.

249) Lehning, *op. cit.*, p. 267.

250) *Archives Bakounine*, т. 1, (2), p. XXVII.

251) Lehning, *op. cit.*, pp. 273 ff.

二つの論争

に続くことを呼びかけた時、どれほど君が正しかったかがわかる。その時君はわれわれの中で民族主義的な、あるいは純政治的な企ての小道をさまよっている連中を嘲笑していたものだ。ぼくは今、君がすでに20年以上も前に始めた仕事をしている。ベルンの大会でぼくがブルジョワと呼んだもったいぶった公衆に接して以来、ぼくは労働者の世界以外のいかなる社会も仲間も知らない。爾後ぼくの祖国は『インターナショナル』となろう。そしてその創設者の一人が君なのだ。従って、親しき友よ、ぼくが君の弟子であるということを知られよう。そしてぼくはそのことを誇りに思っている。ぼくの君に対する個人的感情や関係について、言わなければならないと思うのは以上で全部だ。

今や別の問題に移ろう。

セルノの手紙の中で、君は階級と個人の平等化についてわれわれが問題の出し方を間違えていると述べている。この指摘はわれわれが用いた術語や表現に関する限りまったく正しい。しかしこの表現はわれわれのブルジョワ的聴衆の愚かしさと、信じられないほどの物分りの悪さによって、無理に押しつけられたものだ……しかしぼくは、そう、以下のような別の表現で言うなら、喜んで賛成しよう。即ち、『様々な階級の存在の経済的原因の徹底的な廃棄と、性、国籍、人種の区別なく、すべての個人の存在と発達の環境並びに諸条件の経済的、社会的、及び政治的平等化』という風に。

ぼくはベルンでやった以外のすべての自分の演説を郵便で送ろう。ゲルツェン氏はこれを最後のモヒカン族たる自分の新聞の最新号に掲載する許可を求めてきた。この新聞は読者がいなくなって中止になっていたので、ぼくは彼に断り切れなかった。しかしぼくと彼の間にはいかなる一致も**絶対に**存在しないということは信じてもらいたい。とくに1863年以来、われわれの全政治的関係は、そして今では個人的関係すら完全に絶たれてしまっている。彼はぼくがベルンで友人のムロチコフスキーの演説に対する回答としてロシアに関して語った演説の内容を、**彼の意味に変更する**ように頼んできた。これは君も『鐘』の中に見られる筈だ。ぼくの友人のロシアのすべての社会民主主義者と同じように、ぼくは自分の作った綱領の——ぼくはこれも君に送ろう——第一の条件として真の解放、即ちロシア人及びロシア帝国内に含まれる非ロシア人の経済的、社会的、政治的解放とこの帝国の**徹底的な絶滅**とをかかげた。これはゲルツェンにとってあまりにも激しいものだったので、われわれは分かれた。

ぼくは君にぼくがベッカーやイタリアやポーランドやフランスの沢山の友人と作った『同盟』の綱領も送ろう。このことについては、われわれはまだ多くのことを話し合わなければなるまい。ぼくはこの件について友人のセザール・ドゥ・ペープに書いた長文の手紙——殆んどパンフレットといってもよい——のコピーをじき君に送ろう。だが今は此処の出来事について少し話そう。

今やバーゼルには大ストライキが起っており、その結果『インターナショナル』には新しい5,000人のメンバーの加入をみた。ジュネーブの方は素晴らしい調子だ。われわれはここで大集会を開いたが、これはバーゼルとの通信のための常置委員会を任命した。ぼくとベッカーがその委員になった。ぼくは労働者の間にまったく素晴らしい人々を見出している。

エンゲルスにはぼくからよろしくとつたえてもらいたい。もし彼がもう一度死んでなければの話だが——彼が前に一度葬むられたことは君も知っているだろう。——そしてどうか彼にぼくの演説を一部渡してもらいたい。エッカリウスとユックにも。

頓首 M. バクーニン

マルクス夫人によろしく伝えてくれるように。」²⁵²⁾

マルクスはかねてからセルノ-ソロヴィエーヴィチがバクーニンと不仲のことを知っていて、それを利用してバクーニンについての不利な情報を入手しようと思っていたが、まさかそのセルノがマルクスの手紙をバクーニンに見せるとはまったく予期していなかった。このバクーニンの手紙を読んだあとの彼のエンゲルスにあてた手紙には、いまいまいき気持ちが如実にあらわれている。²⁵³⁾ ところでこの文章の調子は、その書かれたのがあきらかに「同盟」の「インターナショナル」加盟申請の時期であることを抜きにしては正しく理解できない。ポロンスキーは、バクーニンのこのようなゲルツェンに対する誹謗も、彼の「戦術」であったといているが、²⁵⁴⁾ たしかにそれもある。ゲルツェンとマルクスの反目はそれこそインターナショナルに知られていた周知のところだったからである。しかし少なくともこの手紙を書いた当初のバクーニンが決してそれだけでなかったこともゲルツェンとの往復書簡から知れる。ゲルツェンは1869年10月28日付の手紙の中で「君は自分の関係を害わないように、単にマルクスをやっつけたがらないでいる。それもよからう……」²⁵⁵⁾ と書いたが、バクーニンの方はこれに対する例の如き長文の手紙の中で自分とマルクスの関係²⁵⁶⁾ を次のように述べているからである。

「明日ぼくはルガノへ行く。君の手紙を受けとって注意して読んだ。

1. マルクスに関しては、ぼくの回答はつぎのようだ。ぼくも君と同様マルクスが他のすべてと同じくわれわれに反対していることはよく知っている。そののみか彼がわれわれに対して投げられたあらゆるけがらわしい誹謗の張本人であり、煽動者だということすら知っている。それなのになぜぼくが彼を容赦したり、偉大だなどと呼んで称讃するのか？ゲルツェン、その理由を少し考えてみてくれ。第一の理由は、公正なことだ。われわれに対する彼のあらゆる誹謗を別とすれば、彼の社会主義の事業に対する巨大な貢献は認めざるをえない。少なくともぼくはそうだ。この事業に彼は25年近くも賢明に、精力的に、確実に打ち込んできた。この点では疑いもなくぼくの(?)²⁵⁷⁾ われわれの誰をも凌駕している。彼は『インターナショナル』の最初の一人であり、その主要な創始者の一人ですらある。これは誰から見ても巨大な貢献であり、たとえ彼がわれわれにどのような反対行動を

252) *Материалы для биографии М. Бакунина*, т. 3, стр. 137-139. (強調-原文)。

253) См. Пирумова, указ. соч., стр. 270-271.

254) *Материалы* т. 3, стр. 560.

255) Герцен, XXX, 228.

256) このあとバクーニンは1871年12月に『マルクスとの個人的関係』と題する一文を書き、その中で1844年にパリで初めてマルクスに会って以来の二人の関係を詳述している。*Archives Bakounine*, т. I, (2), pp. 121-130.

257) 原文不明。

二つの論争

とったとしても、ぼくは常にこのことを認めるつもりだ。

第二の理由は政策と、ぼくの考えではまったく確実な**戦術**だ。君がぼくのことを実にひどい政治家だと思っていることは、ぼくも知っている。しかし君の間違いだと言っても、自惚れとは思わないでもらいたい。問題は君がぼくを判断するに際して、文明化された社会の中での、ブルジョワ世界の中でのぼくの行動を基準にしてきたこと、そして今もってそうしていることにある。事実ぼくはこういう世界の中では、まったく計算なしに、いささかのもったいぶりもなしに、悪口も言い、**無遠慮な率直さ**でやってきている……

マルクスはたしかに『インターナショナル』では有用な人間だ。その中での彼は今日にいたるまで、社会主義のもっとも確実で、賢明で、影響力のある支柱の一つだ。いかなるものであれ、ブルジョワ的傾向や考えがその中に侵入してくるのを防ぐもっとも強い障壁の一つなのだ。彼のこの疑いようのないすぐれた影響力を、もしぼくが個人的な復讐心からけなしたり、過少評価するようなことがあったら、決して自分自身を許しはしないだろう。しかし個人的な腹立ちからではなく、原理上の問題で彼と戦わなければならない時があるかも知れない。多分あるだろう。それは、彼と彼によって代表される一派やイギリスやドイツの熱烈な擁護者どもの説く、国家共産主義の原理についてだ。その時は死を賭して争うことになろう。しかしその時はその時だ。未だその時が来てはいない。』²⁵⁸⁾

先のマルクスにあてた手紙が「戦術」上の考慮にもとずいたものだとしても、この手紙がすべてそうだと考えることはできない。おそらくここには当時のバクーニンの気持がかなり率直に述べられているものと考えても的外れではあるまい。

ところでこの手紙の末尾でバクーニンが言っているマルクスとその一派の「国家共産主義」の原理についての対立は、その後「インターナショナル」の内部でマルクス派とバクーニン派の対立となってあらわれ、ついにはインターの分裂と、ニューヨークへの移転、さらにはインターそのものの消滅へとつながるものであるが、それはまずこの1869年9月6日から11日までバーゼルで開かれた第4回大会において、相続権の問題としてあらわれた。

この相続権の問題は「インターナショナル」のジュネーブ支部の提案によるものであったが、この支部が「国際社会民主同盟」の実際に存在する唯一の支部たるジュネーブ支部と同一のものであることは前述の如くである。この相続権の問題はすでに「インターナショナル」のローザンヌ大会(第2回1867年9月)でもブリュッセルの第3回大会でも、部分的制限かそれとも完全な廃止かという形で多くの代表によって何度か提案されたところであったが、バクーニンは「同盟」の綱領でも見た如く、「相続権の廃止」をもって社会革命の出発点だと考えていた。一方これに対してマルクスの方は「労働者階級が相続権を廃止するに足るだけの権力を獲得すれば、労働者階級は生産手段を剥奪するだけの力を持つことになり、それははるかに簡単で有効な措置になるだろう。』²⁵⁹⁾と saying it. 即ち、彼は生産手段が社会化され、各人が自分の労働力を行使する権利と可能性を持つことにな

258) *Письма Бакунина к ……* стр. 337–339 (1869年10月28日付) (強調-原文)。

259) 『マルクス・エンゲルス全集』(ロシア語第2版)第16巻, 593頁。邦訳『第一インターナショナル

れば、相続権はあらゆる意味を失うだろうが、これがないうちは、このようなスローガンを掲げることは政治的にまちがっている。これは人々をまどわすだけで、なんの利益ももたらさないであろうし、このような手段は、社会革命の開始とはならないで、ただそれを終らせることにしかならないであろう、と考えていたのであった。²⁶⁰⁾

このようなマルクスの考えは、総評議会を代表するエッカリウスによってこのバーゼルの大会で述べられた。これに対してバクレーニンは、法的ないし政治的権利が既存の産物の表現にほかならないのは歴史的に確かだが、同時にそれがその後を生ずる諸事実の原因となることも同様に確かである。したがって法律は新しい社会を創始せんと欲する者によって廃止されねばならず、政治的国家の基礎となり法的に確立された家庭の基礎となった相続権は廃棄されるべきだと反論した。この結果二つの決議が票決に付されることになったが、総評議会の決議案は賛成 19, 反対 37, 棄権 6, 欠席 13 で否決されたのに対し、バクレーニンの決議案の方は賛成 32, 反対 23, 棄権 13, 欠席 7 で多数の支持を得た。しかしそれにもかかわらずこの決議案は全代表の過半数が得られなかったために、大会の正式決議とはならなかった。²⁶¹⁾ だが総評議会の方は明らかに投票総数の過半数によって反対されたことになり、マルクス派がバクレーニン派に敗れたことは、ここにはっきり数の上で示された。

さらにこの大会では、前のブリュッセル大会に引き続いて土地所有の問題が取りあげられ、14人から成る特別委員会が決議案を大会に提出し、圧倒的多数をもって土地の私的所有の廃止が決議された。この時のバクレーニンは、総評議会の代表と共に決議案に賛成の演説をしている。²⁶²⁾

ところで土地問題がバーゼルの大会で取り上げられることは、ゲルツェンも知っており、かねてからこの大会に注目していた彼は、²⁶³⁾ オガリョーフへの手紙の中でも「土地の共同体的所有」に関して、ロシア人で説明する人間がいればよいが、バクレーニンはどこにいるのだろうか、と質している。²⁶⁴⁾ さらにその二日後の手紙でも「バーゼルにおける彼（バクレーニン—引用者）の農民についての回答は失敗だった」²⁶⁵⁾とも記しているが、これからもゲルツェンがこのバーゼル大会に並々ならぬ関心を抱いていたことがわかる。

そのようなゲルツェンがバクレーニンにあてた書簡形式の論文『昔の同志への手紙』を書いたのはまさにこの「インターナショナル」のブリュッセル大会の直前の1869年1月から8月にかけてのことであった。

VIII 『昔の同志への手紙』

ロシア国内における反動の強化と、「若き亡命者たち」との反目から、『鐘』の発行部数

史』第1部第1巻，200頁より引用。

260) *Первый Интернационал*, ч. 1, стр. 185. (邦訳第1部第1巻，200頁参照。なお邦訳では「社会革命」が「社会主義革命」となっている。)

261) *Stekloff, op. cit.*, pp. 144-145. フォスター、『三つのインターナショナルの歴史』，大月書店，1968，84頁参照。

262) *Stekloff, op. cit.*, p. 141.

263) Герцен, XXX, 189. (1869年9月4日付オガリョーフあて手紙) 参照。

264) Там же, стр. 195. (1869年9月17日付)。

265) Там же, стр. 197.

二つの論争

の減少とニュースソースの入手困難を見てとったゲルツェンが、その発行の一時中止を考えるに至ったのは1867年5月のことであった。²⁶⁶⁾ この年7月1日の『鐘』の第244—245合併号の冒頭において、ゲルツェンはオガリョーフと連名で『1857—1867』と題する記事をかかげ、第一号が発行されてから10年間の『鐘』の歩みを記し、とくに後半の5年間は発行を維持することがかなり困難であったことを率直に述べている。そして半年間の発行停止の後、次の10年間に向って前と同じく「ロシア的社会主義とその発達の機関紙」として、この新聞の発行を続けてゆく決意を披瀝した。²⁶⁷⁾

この記事を読んだバクーニンは、先に引用したイスキア島からの手紙の中で、ゲルツェンが老けこんで「ジャン・ジャック・ルソー流の空論家」となることなく「われらが力強いヴォルテールとして留まる」よう激励し、ひきつづいての『鐘』の発行をうながした。²⁶⁸⁾

しかし『鐘』はこのあと半年して1868年1月1日からは、フランス語で一年間出ただけで、ついに最終的にその幕を閉じることとなった。ゲルツェンはこの廃刊の辞を次のようなオガリョーフへあてた書簡形式で述べている。

「親しい友よ。

ぼくは君に一つの「クー-デター」にはかならないことを、即ち『鐘』の即時中止を、もし君がそう言いたければ、無期延期を提案する。

われわれの石臼は止まってしまった。小川は別の場所を流れている。別の土地と別の水脈をさがしにゆこう。

君は1864年以来ぼくがどれほど『鐘』の継続を頑強に主張してきたかを知っていよう。しかしついにその存在がわざとらしい不自然なものになってしまったという確信に到達した。もはやぼくにはこれ以上続けられない。**仕事の精神は消えうせ**、ただその音を聞く楽しみのためにだけわれわれの『鐘』をプラトニックに動かすことはまったく不可能だというのを、ぼくは感じている。

われわれの新聞は決して目的ではなかった。それは手段であり、道具であった。われわれがこれを捨てるのは、最初の見込み違いとか、疲労とか軽薄な考えといった、理由のないことではない。強情を張って、この瀕死の重病人を無理に生かし続ける理由がないと考えるからだ。

すべて物事には時期がある、と賢者は言っている。石を集める時期もあれば、それを投げる時期もある。

われわれは逆戻りするにはあまりにも長く自分達の道を歩いて来た。しかし今やそれが通れないのに、日々の糧がないのに、同じ道を歩む必要はまったくない。国からの通信もなしに、外国で新聞を編集することは不可能だ。現実性を失って、亡命者の聖務日課書となるか、苦情の要約、嘆きの記録となるのが落ちだろう。

266) Герцен, XXIX, 89, 92, 93 (1867年5月6日, 10日付ツチョーツァ-オガリョーフツァあて, 5月11-12日付息子あて手紙。)

267) Колокол, IX, 1991.

268) Письма Бакунина к стр. 318.

われわれは自分たちの確信のもっとも大切なことの大部分はすでに言ったし、百回もくりかえした……

若い世代は自分の速度で進む。彼らはわれわれの言葉を必要としない。彼らは一人前の成年であり、またそのことを知っている。他の者に対しては、われわれは何一つ言うべき言葉を持たぬ……

われわれはロシアの世論とはあまりにもかけ離れてしまった。いまや橋をかけることはできない。われわれの声を聞かせるだけ長い海底のケーブルもない……

われわれは新しい道をさがす方がずっとよいだろう。そして万一それが見付からないとしても、歴史的発展の奇妙な移り気を学ぶ材料には、その後の人生に事欠くまい。歴史の歩みは、猟師の猟犬と同じように、どれほど本道からそれて、通れない道に入り込んで、決して元の道を見失うことはないものだ。……

一年前ぼくはロシア語の『鐘』に代って、フランス語版をもってすることができると考えた。これは間違いだった。われわれの本当の使命は、生ける者への呼びかけと、われらの死者に弔鐘を鳴らすことにあったのであり、われわれの隣人に自分たちの墓や揺りかごの物語りをすることではなかったのだ……。

ベルンにおける「平和同盟」の「大会」はまたしてもわれわれに、西ヨーロッパという家族の合奏の中では、一般にロシアの声が場違いだということを示してくれた。われわれはきわめて不愉快な真理を不器用に示し、場所柄をわきまえぬ粗野な態度と峻厳で傲慢な論理でもってこの合奏をかき乱す。残忍な力によって屈服させてきたわれわれは、あまりにも長いこと黙っていたので、ひとたび自分が自由だと仮定するや、あまりにも多くのことを口にする。われわれの経験を積んだ賢い兄たちが、アコンサスやブドーの葉で飾って、それとなく *sub rosa* (そっと) ほのめかすところを、われわれは屋根の上から大声でわめきたてかねない。これは彼らを怒らせ、われわれの言葉を聞いただけで背を向けさせることになる。

人びとが平和の理論を作り上げることと、戦争の準備に余念のないこのさなかに、われわれは誰にも気づかれずに、鐘を鳴らすことを止めにしよう。

親しき友よ。これがぼくのクー-デターだ。時期はよい。今は12月だ。

この上に立って、われわれの道が続けよう。最初の時のように、手に手をとって。宿場は遠くない。

A. Herzen

1868年12月1日²⁶⁹⁾

ロシア語で読まれなくなった『鐘』は、フランス語になってもやはり読者を獲得することはできなかった。どうにか一年間だけ発行してはみたものの、もはや『鐘』は空しく響くだけであった。今や残されたことは「別の土地と別の水脈」をさがすほかはなかったのである。しかし「平和自由同盟」におけるロシア代表のぶざまなやり方が示すように、またフランス語に変わった『鐘』の不振ぶりからしてみてもそれが西ヨーロッパにおいて容易

269) Герцен, XX, 395-398. (強調-原文)。

二つの論争

に「水脈」を見出せるとは思われなかった。そしてこれ以後のゲルツェンは、自分の著作をフランスの雑誌《Le Siècle》や《Revue des Deux Mondes》に掲載したり、さらにはロシア国内のハリョフの出版者の申し出を真剣に考えたりするようになる。²⁷⁰⁾

このような彼が『昔の同志への手紙』の執筆にとりかかったのは、まさに今みた『鐘』の終刊の辞を書いた直後のことであった。彼はこの年11月12日付のマイゼンブークあての手紙の中で、バクーニンの自分に対する批判に答える意図のあることを伝えたが、²⁷¹⁾翌1869年1月9日—10日付のオガリョーフへの手紙では、すでに『第一書簡』を書きあげたと述べ、更にこれを『北極星』に印刷する気持であることを明らかにしている。²⁷²⁾この『第一書簡』の日付は1月15日で、続く『第二書簡』は1月25日になっているが、1月31日に息子のアレクサンドルへあてて、このことを「私はバクーニンにあてた長い長い辛辣な手紙を書いた。これに『爺さん同志 (“Между старичками”)』という題をつけて『北極星』に送るつもりだ。彼の名前はあげられていないが、誰にでもわかるだろう」と書いた。²⁷³⁾その一ヶ月半後に彼はこの二編の書簡形式の論文をニースからジュネーブのオガリョーフに送り「注意ぶかく読む」ように求めている。²⁷⁴⁾さらに彼はこのあと3月24日付の手紙で、先に送った論文の趣旨をつぎのように説明している。

「ぼくのバクーニンに対する論文の意図は単純なものだ。彼の理想が奈辺にあるかを引き出すために、君かあるいはぼくがもっと別のもの、つまり審問（個人的なものではなく、一般的な）を書ければよいと思っている。もしぼくのところに彼の演説やその他のものがあつたら、この審問はぼくが書いたであろう。彼は財産と家庭の完全な廃止（プラトン流に両親が自分の子を知らないといった）を説いているとのことだが、これはまったくのたわ言だ。——もしそうならこれは人間が猿にかえることになり、退屈な千篇一律になってしまう。いかに人類に空想的要素があるとしても、これには我慢できまい。いったいどのようにして彼はこのような要素を発達させるというのか？」²⁷⁵⁾

すでにここには、オガリョーフに送った論文で述べた主張が見られる。ゲルツェンにとって人間が人間であることは、まさにその個性（личность）によるのであって、彼がバクーニンの思想の中にそれに対する脅威を見出していたことがこの手紙からもわかる。

一方オガリョーフはこのゲルツェンの論文をうけとるや、すぐその日に読み、翌日にもくりかえして読んだ。そして「この中にはきわめて多くのすぐれたものがあるが、バクーニンの不明瞭な点と同様、（目下のところは）賛成することが出来ない」²⁷⁶⁾と返事した。

ゲルツェンは最初からこの論文の原稿がバクーニンに読まれることに反対していなかったが、²⁷⁷⁾オガリョーフは3月末にバクーニンにこれを見せている。²⁷⁸⁾ゲルツェンはオガリ

270) Там же, XX, 810–811.

271) Там же, XXIX, 489, XXX, 85.

272) Там же, XXX, 12.

273) Там же, XXX, 24.

274) Там же, XXX, 57 (1869年3月11日付)。

275) Там же, стр. 66.

276) Л. Н., т. 39–40, стр. 534.

277) Герцен, XXX, 63 (1869年3月17日付オガリョーフあて手紙)。

278) Л. Н., т. 39–40, стр. 545.

ョーフの意見をも聞いた上で、今度は『北極星』ではなく、ペテルブルグの週刊紙『ニェヂェーリャ』に偽名で発表しようと考えたが、これは5月10日から1週間ほどジュネーブへ行った折にオガリョーフと話し合っ取り止めにした。²⁷⁹⁾ その理由はオガリョーフの反対以外に、丁度この5月10日にジュネーブでバクーニンの『革命問題の設定』と題するパンフレットが発行され、これを読んだゲルツェンが、前に書いた二つの論文を書き換えるだけでなく、さらに第三の論文をも続けて執筆する気持になったからであった。²⁸⁰⁾

*
* *

ところでこの『革命問題の設定』は無署名で発行されたものであって、はたしてその筆者がバクーニンであったか否かについては今日なお疑問が残っていた。というのはこの年3月はじめにネチャーエフがロシアを偽の旅券で出国してジュネーブに現われ、4月から8月にかけてバクーニンやオガリョーフと七冊のロシア語のパンフレットを発行したのであるが、²⁸¹⁾ この中『革命問題の設定』を含む三つは無署名であって、その実際の筆者が誰であったかについては、「バクーニンに関する文献中もっとも議論の多い問題のひとつ」だからである。²⁸²⁾ この中の『ロシアの学生たちに』あてた檄文も、ステュクローフやE. H. カーはオガリョーフの作ったものであるとしているが、²⁸³⁾ 最近ではレーニングによってネチャーエフの執筆によるものをオガリョーフが印刷したことが明らかになった。²⁸⁴⁾ また有名な『革命家の教理問題』についても、最近の研究者は、ステュクローフやカーなどが言うところの、バクーニンの協力を否定し、すでにジュネーブに来る以前にネチャーエフがトカチョーフら「委員会」のメンバーの議論を聞き、一人で作製したものと結論を下している。²⁸⁵⁾

ところでゲルツェンはこの5月10日にジュネーブを訪れた日に、ネチャーエフに初めて会っているが、それはかねてから問題があった「バフメーチェフ資金」の半分をオガリョーフとバクーニンがゲルツェンに要求し、その受取り人としてネチャーエフが現われたからであった。²⁸⁶⁾ この時ネチャーエフのゲルツェンに与えた印象について、ツチコーヴァ-オガリョーフは『回想』の中でつぎのように書いている。

「ネチャーエフが現われた時私はゲルツェンが仕事をしている書齋にいました。それは中背の黒い短い髪とせまい額の、こせこせした目鼻立ちの若者でした。入って来るや、その小さな黒い、燃えるような目がゲルツェンに向けられました。彼はきわめてひかえめ

279) *Л. Н.*, т. 61, стр. 181.

280) Герцен, XXX, 109 (1869年5月11日ツチコーヴァ-オガリョーフあて手紙)。

281) ステュクローフは『革命家の教理問題』をも入れて八冊として扱っている。Стеклов, Указ. соч., т. III, стр. 444-445.

282) E. H. Carr, *op. cit.*, p. 394, 邦訳『バクーニン』515頁。

283) Стеклов, указ. соч., т. III, стр. 444, E. H. Carr, *ibid.*,

284) *Archives Bakounine*, т. IV, Leiden, 1971, p. XXIV.

285) *ibid.*, p. LX-LXI.

286) *ibid.*, p. XLII.

二つの論争

で、あまり話をしませんでした。ゲルツェンの言葉にそっけなく挨拶し、アレクサンドル・イワーヌィチ（ゲルツェンのこと—引用者）の手を、なにか気づまりで気がすすまない様子で取りました。それから私は二人だけにして、部屋を出ました。ネチャーエフほどゲルツェンにとって好ましくない人は珍しいことでした。アレクサンドル・イワーヌィチは彼の目差しの中に何か冷酷で粗暴なものを見出していました。多分当時人びとがよく話題にしていたペトロフスヤ・アカデミヤのイワーノフ殺害事件の話が、彼に影響を与えていたのでしょう。」²⁸⁷⁾

彼女の『回想』の記述が多くそうであるように、この最後の叙述も後に思い出して付け加えたことから来る誤りである。というのはこの殺害事件はこの会見から半年ほどたった11月21日に起ったからである。しかしネチャーエフがゲルツェンに好ましからざる印象を与えたことはたしかで、ラリもこれを裏付ける発言を残している。²⁸⁸⁾

しかし先の『革命問題の設定』に関して言うならば、これがネチャーエフの手によるところと推測する余地はまったくない。ということは、後にコジミンが明らかにしたように、この論文はパンフレットになって出る以前に、ということはネチャーエフの出現する前に、先に見た『人民の事業』第1号に付録の形ですでに出版されているものだからである。そしてこれがバクーニン自身の執筆によるものであることもまた「疑問の余地はない。」²⁸⁹⁾

それではゲルツェンがその論文の書きかえを決心するに致ったバクーニンの『革命問題の設定』はどのような内容のものであったのだろうか。

まずはじめにバクーニンは、「あらゆる国家機構の容赦なき破壊と、帝国の要塞が根拠を置くあらゆる社会秩序、力、手段、物、人間の徹底的な撲滅」とを呼びかけている。そして「国家組織の全条件や型態の完全な破壊なしに……人民の経済的な福祉をもたらす」などと考える「共和主義的リベラリズム」がいかに間違っているか批判する。ついで彼は革命陣営の中にありながらも、「若い教養ある教条主義的な陰謀家＝社会主義者や、革命をもてあそんで革命を行なう手段を持たぬ書物の上の革命家、書齋の革命家＝国家主義者や未来の独裁者たち」を槍玉にあげ、このような者が若者を駄目にしてしていると断ずる。しかし幸いなことに政府は大学を閉鎖することによって、これらの若者に「真の学校—人民」の存在を教えることになった。それでは人民の中に入って何を為すべきかといえば、人民に教えるを説くということはおよそ「馬鹿げた」考えであって、人民自身みずからの欲するところはよく知っている。しかし「人民の中にすでに存在しているにもかかわらず、今日なお組織化されず散在している反乱の力を結合」するために、若い世代は「みずからをしっかりと結合し、さまざまな農民反乱を一つの、計算された情容赦のない人民革命へとまとめあげる」仕事をしなければならない。

ところでロシアには昔から二種類の反乱（ブント）があった。即ちそれは平和な農村の

287) Н. А. Тучкова-Огарева, указ. соч., стр. 243-244.

288) *Archives Bakounine*, т. IV, р. XXIV.

289) Б. П. Козьмин, *Русская секция Первого Интернационала*, стр. 87.

住民の反乱と強盗のそれである。個々の農村の一揆は毎年のように起るが、それらは散発的なために、時には一つの郡を包むことがあっても、結局は政府によって鎮圧されてしまった。しかしこの鎮圧された者の中から森に逃れて強盗となる者が出てくる。このように論をすすめた上で、バクーニンはつぎのように強盗行為を説明している。

「強盗行為はロシア人民の生活におけるもっとも尊敬すべき形態の一つである。モスクワ国家が建設された時、強盗行為は未だ西欧のモデルにならって完成されたり変貌したりしない後代の、恐るべき社会秩序に対する人民の絶望的な抗議を表現したものであった…強盗は常に人民の英雄であり、守護者であり、復讐者であり、全国家制度にとっての妥協することなき敵であって、わが国の国家的=貴族的、官僚的=聖職者的文明に対して、社会的にも市民生活の上でも徹底的に死を賭して戦ったのであった。ロシア人民の歴史を理解するためにも、この強盗行為を理解することが肝心である……ロシアにおいては強盗こそ真の唯一の革命家であり、文句を言ったり、書物の上で美辞麗句を並べることのない革命家なのである。人民革命はこの強盗の反乱と農民の反乱との一体化から生まれるものだ……スチェンカ・ラージンの反乱がそうであり、プガチョーフの反乱がそうであった…そして今日においてもなおそれはロシア革命の世界なのである。強盗の世界が、強盗の世界のみが、常に革命と一致してきた。ロシアにおいて真剣に陰謀をはからんとする者、人民革命を欲する者は、この世界に目を向け、その中に入らなければならない。」²⁹⁰⁾

ところでバクーニンはこれに類した考えを四年後に『国家制度とアナーキー』の『附録 A』の中でも述べている。その中で彼は、ロシア人民の理想の「性格をゆがめ、その実現を極度に困難にし、遅らせている三つの特徴」として、「家父長制」「ミールによる個人の併呑」、「ツァーリ信仰」をあげているが、ミールに逆らう唯一の人間は強盗であり「それ故ロシアにおいては強盗行為は重要な歴史現象であり、ロシアにおける最初の反乱者、最初の革命家たるプガチョーフとスチェンカ・ラージンは強盗であった。」と言っているのである。²⁹¹⁾

さらにバクーニンはこの『革命問題の設定』を書いた半年ほどあとの、1869年4月にジュネーブで『ロシアにおける若き兄弟へ数言』というもう一つのパンフレットを出している。この方は署名もあり、その後フランスの *Liberté* やドイツの *Volksstaat* にも転載しているので、これがバクーニンの筆になるものであることは問題たりえない。²⁹²⁾ この中で彼はネチャーエフのような、政府の迫害にも拘らず、国の内外で運動を続けている若きロシアの革命家につぎのように呼びかけている。

「諸君は再び起ちあがった。ということは諸君を首尾よく葬むることができないという

290) “М. А. Бакунин”, “Статья А. И. Герцена о Бакуanine, Биографический очерк М. Драгоманова, речи и воззвания, 1906 стр. 235. Стеклов, указ. соч., т. III, стр. 459–460 及び Venturi, *op. cit.*, pp. 368–369 より引用。

291) *Archives Bakounine* т. III, стр. 170, 174. 邦訳, 246, 251頁。

292) Стеклов, указ. соч., т. III, стр. 444.

二つの論争

ことを意味する。このことは、国家に反対し、あらゆるものを破壊せんとする若き階層を越えた世代の精神が、青春の軽率や虚栄の一時的燃え上りではなく、真の生活と熱情の表現であることを意味している。これはまたこの精神が人民のあらゆる気持と要求の中にふかく根ざしていることをも意味するものである。」「諸君は持ちこたえた。このことは諸君が確固たるものであることを意味する。諸君の同志の多くが、実に多くの者が斃れた。しかし一人の斃れた者の上に、地の底から十人の新しい闘士が、国家の敵が成長している。これはこの醜悪なる国家の終りが近づいているということの意味している。」

「スチュエンカ・ラージンの時が近づいている……今もまた当時と同じように、全農民の全日傭いのロシアは、もはや上からではなく、下からの本当の自由を求めて沸き立っている……人民のルーシと政府のロシアとの間の生命を賭した新しい戦いが、明らかに準備され、近づいている。今度はどちらが勝利を収めるか？ 疑いもなく人民である。」²⁹³⁾

恐らくネチャーエフからロシアの国内の革命運動をかなり誇張された形で聞いて、バクーニンは早速このように若い革命家に向けて呼びかけたのであろう。しかし、このパンフレットをよんだゲルツェンは、4月28日付の手紙でオガリョーフにつきのように書いている。

「君が明日送ると約束したバクーニンの *factum* (著作) が、昨日送られてきて、ぼくは読んだ。君のより²⁹⁴⁾ スタイルも調子もよい——これは疑いがないところだ。しかしこれにどんな有益な点があるか、ぼくにはわからない。はたして君は今のロシアに『国家の解体』とスチュエンカ・ラージンの即位がすぐにも起ると本当に考えているのだろうか。何か疑わしい。若い人びと、とりわけすでに逮捕されたり、追放になった連中にとって、バクーニンによって『反国家的』と言われることはあまり支えにはなるまい。『醜悪なる国家』という言葉は馬鹿げたものだし、その上歴史的モメントを認めないものだ。もし認めるなら動物の発生学の事実も軽蔑して無視することが許されることになる。(……)²⁹⁵⁾ 母親がカマスで雌犬の息子がクモであるというように。それにつけてもバブーフやスチュエンカ・ラージンを二倍にもしたあの力は、あの93年の性格はいったいどこに見られるというのか。自分たちの金庫や集会や裁判の権利を求めている学生達の要求²⁹⁶⁾の中にでもあるというのだろうか。それとも君はぼくの知らないことをずっと多く知っているのだろうか。バクーニンはポーランドとは完全に断絶してしまった。ポーランド人は誰一人として彼の綱領を採用しないだろう。

君は思いきってバクーニンが23世紀のためではなく、われわれの世紀のために、いったい何を宣伝しているのかひとつ質問してみないか。

いったいどうして君は彼に1863年の寝言について読んでやらなかったのだ。二回は読んでやるべきだった。

君の新しいアピールの草稿を待っている。ぼくにはどういうことになっているのかよくわからないが、それに付け加えたり、提案する権利は認めてもらいたい。」²⁹⁷⁾

293) Там же, стр. 457. См. Герцен, XXX, 372.

294) 後述。

295) 原文欠如。このところ意味不明。

296) 拙稿『檄文の時代』, 188頁参照。

297) Герцен, XXX, 92.

当時オガリョーフはジュネーブに住んで、バクーニンやネチャーエフと一緒にラジカルな檄文の作製に当たっていた。当時発行された七つのパンフレットの中で、「一番短かくて、もっとも穏やかな」²⁹⁸⁾『ロシアの学生たちに』あてたネチャーエフの檄文を、²⁹⁹⁾ ゲルツェンはオガリョーフの手になるものと思ってこの手紙の冒頭で、バクーニンの先の檄文『ロシアにおける若き兄弟へ数言』と比較しているのである。

われわれはこのさして長くないゲルツェンの手紙の中に、実に多くの内容を読みとることができる。しかしその中心となるのは、バクーニンの革命的宣伝が歴史の発展を無視したものであり、手段としても無謀だという考えである。この手紙を書いた6年以前に、ゲルツェンはツルゲーネフから「カモが魚のようにえらで呼吸するかも知れないなどという話は聞いたことがない」³⁰⁰⁾という批判を受けたことをわれわれは知っている。それに対して『終りと始め』の『第八書簡』で反論した³⁰¹⁾ゲルツェンが、今度はオガリョーフとバクーニンを相手にツルゲーネフと同じ批判をしているかに見える。しかし先の『終りと始め』と今度の手紙との間には、ポーランド蜂起の挫折、ペテルブルグの火災事件、カラヨーゾフの皇帝暗殺未遂事件、「若き亡命者たち」との軋轢、「インターナショナル」への注目、『鐘』の発行停止等々のいくつもの出来事があったことも、われわれは見て来た。このような体験の上に立って、いま見たオガリョーフへの手紙の中で述べた見解を、ゲルツェンは四編から成る『昔の同志への手紙』の中で、よりまとまった形で述べているのである。

それではこの『昔の同志への手紙』がどのような内容のものかを、最後にわれわれは見ることにしよう。

*
* *

〔第一書簡〕

ゲルツェンはこの書簡の冒頭にジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) の次の言葉をエピグラフとして掲げているが、これは『爺さん同士』の冒頭にも記したところで、この中にゲルツェンの基本的主張の一つがはっきり見てとれる。このベンサムの言葉というのは、彼のアレクサンドル一世への手紙の中の一節で『ルースキエ・ヴェーストニク』のこの年4月号に掲載されたパイピンの論文『ロシアのベンサムとの関係』から取ったものであり、以下の如きものであった。

「動機というのは、たとえそれがどれほど十分なものであっても、十分な手段なしには現実的なものたりえない。」³⁰²⁾

この言葉につづけてゲルツェンは、「昔の同志」に対し、「われわれ二人にとって終極的解決は同じものである。われわれの間の問題は、決して原則や理論の相違にあるのではなく、方法や実践の相違に、力や手段や時の評価に、歴史的材料の評価にあるのだ。」と述

298) E. H. Carr, *op. cit.*, p. 394. 邦訳, 514頁。

299) *Archives Bakounine*, т. IV, pp. 308–310.

300) 拙稿『二つの論争(1)』, 81頁。

301) 同上 91頁。

302) Герцен, XX, 575, 856. 金子幸彦訳『古い友への手紙』『世界大思想全集—哲学・文芸』第27巻, 河出書房, 1955, 191頁。

二つの論争

べている。われわれは先にシベリアを脱出して間もないバクーニンが、ゲルツェンとオガリョーフにあてた手紙の中で、これとまったく同じ考えを記しているのを見てきた。³⁰³⁾そしてこのような手段、方法についての考え方の相違が、ポーランド蜂起の時にも、「若き亡命者たち」との関係でも、「インターナショナル」についての理解の相違においても、二人の間にどれほど深い溝を作り出してきたかも考察してきた。しかしこのような相違の根底にあるのは両者の歴史認識の違いであって、この点についてかつてゲルツェンが、『向う岸から』の中で、「個人と社会の歴史的関係を変えることは、われわれの勝手にできることでもないし、また不幸にも、社会そのものの意になるものでもない。しかしわれわれが自分自身の発達に適合した現代人たりうるか否か、一言でいうならば、われわれの行為を環境に即して創造しうるか否かは、われわれ自身にかかっている。」³⁰⁴⁾と言ったことをわれわれは想起する。

歴史の発展と個人の自由意志の関係こそ、ゲルツェンの生涯を通しての課題であったが、いまこの『第一書簡』において彼は、それを次のように説明している。

「歴史の歩みの緩慢さとつじつまの合わないことは、われわれを激怒させ、悩ませる。それはわれわれにとって耐え難いものであり、われわれの多くはみずからの理性に背いて、みずからをせきたて、他の者をもせきたてる。これはよいことであろうか、それとも悪いことであろうか。ここにすべての問題がある。

明瞭な内面的活動を促進する目的で、衝撃によってかき乱すようなことをなすべきであろうか。産婆が出産をはやめ、苦痛をやわらげ、障害を取り除かなければならないことは、疑いのないところである。しかしそれは一定の限界においてである。——この限界を定めることはむづかしく、それを跳び越えることは恐ろしい。そのためには、論理的自己犠牲のほか、節度とインスピレーションに満ちた即興とが必要である。その上、必ずしもいたるところに同じ仕事があるわけではなく、限界とても一様ではない。」³⁰⁵⁾

ここでゲルツェンは一般論を述べているのであるが、この時の彼の頭の中にバクーニンのやり方に対する批判があったのはいうまでもない。最初彼はこの「明瞭な内面的な活動」という表現を「労働者の心の中にある、——敵の恐怖の中にある絶え間なくとらえどころのない、潜伏期の、内面的活動の創造的静けさ」³⁰⁶⁾と書いていたが、オガリョーフが「ぼくは人類の歴史的歩みの中に、この絶え間なく、とらえどころのない潜伏期を見ない。歴史は内面的活動の創造的静けさよりも、闘争と跳躍によってはるかに進むものだ。」³⁰⁷⁾という意見を書いてきたことによって、上のように書き改めたのであった。なおこのオガリョーフの意見を聞いたゲルツェンは「ぼくは絶え間なさを語ったのではなく、現在の瞬間を語っているのだ」³⁰⁸⁾とも書いている。

はたして歴史が「闘争と跳躍」によって進むものか、それとも人間の知識や意識の変化

303) 78頁参照。

304) Герцен, VI, 130-131. 拙訳『向う岸から』, 現代思潮社, 1970, 196頁。

305) Там же, XX, 576. (強調-原文)。邦訳, 192頁参照。

306) Там же, 712.

307) Л. Н., т. 61, стр. 198.

308) Герцен, XX, 622.

によって進むものかについて、ゲルツェンは「第一書簡」の中で以下のように自分の考えを説明している。

「従来の変革は薄明の中に行なわれ、道に迷い、あと戻りをし、つまづいたりもした。そして内面的不明瞭さからありとあらゆる雑多なものを、さまざまな信仰や勇敢な行為を、多くの誇張した善行を、愛国主義を、敬虔主義を要求してきた。社会的変革には、**理解と力**、知識——と手段のほかには何も必要としないのである。

しかし理解は恐ろしく多くの義務を負わせる。それは理性の執拗な苛責と論理の仮借なき非難とを伴なう。」³⁰⁹⁾ たしかにピョートル一世とフランス革命のコンヴェンションは、「妊娠の一ヶ月目から九ヶ月目までを一足とびに進むことをわれわれに教えた。」歴史の上では、「暴力とテロルによって宗教と政治が普及し、専制的国家と不可分なる共和国が建設」されることもある。しかしピョートル大帝主義による社会変革は、「グラッキュス・サブーフの苦役的平等とカベールの共産主義的賦役以上に進むことはない」のである。したがって「来たるべき変革は、一つの自然力のために他の自然力を圧殺すべきでなく、すべてを一般の幸せに調和させることができなければならない。」³¹⁰⁾

このように主張するゲルツェンは、現代をもって「まさに最終的研究の時代」「実現の仕事に先立って行なわれるべき研究の時代」と言う。なぜならば、あらゆる宗教的、政治的革命よりも、経済的変革の方が「はるかに優越する」ものであるが、その実現のためには、単に数学的法則だけでなく、「経験的な側面と外面的な全条件」とを十分考慮する必要があるからである。「事物の古い秩序はそれを支える物質的な力よりも、その承認によって、より多く、強固なもの」³¹¹⁾ であるが、このことは単に社会の伝統的観念や諸制度の否定を叫ぶだけでなく、それらを支えている「人びとの意識」をも研究しなければならないことを意味する。人間のさまざまな「本能と衝突の **なまの産物**」であるこの意識を、「研究し、克服し、その手段をわれわれの目的に適応させながら、それを自然のものとして受け取り、またそれと戦うことが必要」³¹²⁾ なのである。「財産、家族、教会、国家」といったものも、「人間の解放と発達の巨大な教育形態」であって、われわれは単に、それらを不合理なものとして否定するのではなく、「必要がなくなった時にそれらから脱出する」のである。

このように論を進めた上でゲルツェンは、末尾においてつぎのように記している。

「打ち建てられようとしている新しい秩序（社会主義——引用者）³¹³⁾ は、人を斬る剣であるのみか、守りの刀でもなければならぬ。古い世界に打撃を与えることによって、その中で救うに価するすべてのものを救済するだけでなく、障害とならぬもの、多様なもの、独自のものをその運命のままに残しておかなければならぬ。精神の貧しい、芸術的意味の乏しい変革は、みじめである。それは過去の獲得されたすべてのものから、ただ糊口の道を与えることが唯一の長所であるといったたいくつな仕事場を作ることだけと

309) Там же, 580 (強調-原文), 邦訳, 196頁参照。

310) Там же, 576, 578, 邦訳, 192, 194頁参照。

311) Там же, 579, 邦訳, 195頁参照。

312) Там же, 580, 邦訳, 195頁参照。

313) 最初の原稿には「打ち建てられようとしている社会主義」となっている。

二つの論争

ろう。』³¹⁴⁾

このゲルツェンの言葉の中に、われわれは「社会主義」に対して彼が託した心底からの願いを見る思いがする。手段についての十分な考慮なき暴力とテロルによる変革が、どのようなみじめな結果になるか、すでにゲルツェンは見通していたといっても誤りではあるまい。しかも社会主義のあるべき姿について百余年前にこのような言葉が発せられたということは、ゲルツェンの体験と思索の深さとの関わりにおいて、銘記されるべきであろう。

〔第二書簡〕

つづく『第二書簡』の冒頭においてゲルツェンは、つぎのように「インターナショナル」を中心とする新しい労働者の組織と運動について述べている。

「国際的な労働者の会議はつぎつぎと現われる社会問題を裁く重罪裁判所となりつつある。それは組織的な機構を持ち、そのメンバーは専門家、予審判事となってきている。彼らはストライキと仕事の中止を強力な必要手段、*pis aller*（やむを得ない手段）として、戦いの組織としての自らの力をはかる手段として許容する。彼らの真剣な性格は敵に大きな衝撃を与えた。彼らの休息の力強さは、工場主や経営者をふるえあがらせた。もし彼らがこの機構をあまりに早く見捨てるようなことをしたならば、大きな不幸をもたらしたことであろう。

労働者たちは互いに団結して、『国家の中の国家』を形成し、資本家や所有者とは別に、また政治的限界や教会的限界から離れた、自分自身の組織と権利とを獲得しつつ、未来の経済機構の最初の網と最初の芽生えとを形成しつつある。』³¹⁵⁾

このようにヨーロッパにおいて新しい力となりつつある労働者の組織に言及したのちに、ゲルツェンは『第一書簡』でも述べた考え、即ち「理解と検討」こそが「われわれの唯一の武器である」とくりかえして主張する。もしも十分な考慮なしに、性急さの故に一気に事をなしとげようとするならば、それは「おそろしい衝突を、より一層悪いことに、ほとんど不可避免的な敗北」とを招くことになる。このような主張につづいて、彼はここにおいて初めて「漸進主義」について、はっきりした自分の立場を打ち出している。

「私はさまざまな改良主義的権力の動揺や誤った歩みによって卑俗にされた『漸進性 (постепенность)』という言葉ですこしも恐れない。漸進性は連続性 (непрерывность) と同様に、理解力のすべての過程にとって切り離すことのできないものである……

終極的な結論と現在の状態との間には、実際的な軽減、妥協、まわり道がある。それらのうちどれがより短い、適当な、可能な道であるかを理解することは、実践的な戦術の問題であり、革命の戦略の問題である。』³¹⁶⁾

ここにいたってわれわれは、ゲルツェンの真の主張が奈辺にあるのかをはっきりと知ることができる。先にわれわれは若き日のツルゲーネフの思想の中に、この「漸進主義」を

314) Герцен, XX, 581, 邦訳, 198頁参照。

315) Там же, 581-582, 邦訳198頁参照。

316) Там же, 583, 邦訳, 199頁参照。

見て、そこに彼の「リベラリズムの核」を指摘した。³¹⁷⁾そしてこの時から四半世紀後にゲルツェン自身の口から再びこの言葉を聞いたのである。しかしゲルツェンがどのような経験と思索に裏打ちされて、このような結論に到達したかということも、われわれは見てきた。はたしてこの『第二書簡』の末尾において、彼自身ここに行きつく過程を「昔の同志」につぎのように記している。

「……私は今これ以上述べない。ただ結論として次のように言おう。かつて私は死体の傍らに、砲弾によって破壊された家のそばに立って、捕虜がどのように銃殺されるかを熱病病みの状態で聞きながら、心のすべてをもって、思考のすべてをもって、荒あらしい力を復讐へと、古い犯罪的な世界の破壊へと呼びかけた——何がその古い世界に代るべきかということはふかく考えることさえもせずに呼びかけた。

それから 20 年たった。

復讐は別のところから来た。復讐は上から来たのである……諸国民はすべてを耐え忍んだ。なぜなら彼らはその時も、その後も何ひとつ理解しなかったからである。中庸はすべて踏みまじられ、泥にまみれた……長い、苦しい時が、熱情に鎮静の余暇を与え、思考に落着く暇を与えた。熟考と観察のゆとりを与えたのであった。

君も私も、ともにわれわれの信念を裏切らなかった。しかし問題に対する対処の仕方は違っていた。君は破壊の情熱を創造的情熱と見なし……障害物を打ち砕き、未来の中のみ歴史を尊重しつつ、前と同じように破壊の情熱をもって前進せんとする。私は以前の革命の道信じない。そして過去と現在の中に人間の歩みを理解しようと努める。それはいかにして人びとと足並みをそろえ、立ち遅れることなく、また人びとが私のあとについて来ないほど、来られないほど遠くに行くこともなく進むべきかを知るためである。³¹⁸⁾

ここでゲルツェンは、ほとんど言うべきすべてを語りつくしている。「私は以前の革命の道信じない。」という思いきった表現の底にある自分の思想的歩みも含めて、彼は自らの信条を告白しているといってもよい。

さらにこの『第二書簡』で彼は、家族、財産、遺産の問題についての自己の見解をも明らかにしている。

「土地所有権」というものが、ロシアと異なり、人間の解放、独立、尊厳、市民的価値と結びついて発達してきた西欧において、はたして容易に放棄されるものとは考えられない、と述べたあとで、「所有権の否定は——それ自身としては、無意味なものである……個人的所有権の変形は不明瞭であり、不確定である」と考えるゲルツェンは、ルイ・フィリップの有名な言葉にかえて「所有権はほろびないだろう」とも言っている。

さらに「遺産」の問題についても、彼は否定的である。人間は誰しも自己の財産の何らかの部分の後継者に残したいと思うものであり、「選択による、あるいは血縁関係による愛情のこの形式に対して」反対することが、どれほど困難なことかを指摘しつつ、もしこれを一挙に否定するならば、いかに貧しい百姓ですら権力の側につくであろうとも述べている。³¹⁹⁾そして労働者の国際的組織が、これらの問題を「その仕事の上に加えないように

317) 拙稿『二つの論争(1)』, 13頁。

318) Там же, 586 (強調-原文), 邦訳, 202頁参照。

319) Там же, 584-585, 邦訳, 200-201頁参照。

二つの論争

全力をもって努力すべきである」として、先の「インターナショナル」の大会における所有権や遺産問題の扱い方を批判し、インターが「第四身分の自由な議会となるべき」だと主張している。

以上見た『第二書簡』の彼の主張に、最後に付け加えるものがあるとするならば、それはゲルツェンの農民観であろう。かつて彼はツルゲーネフに、農民を知らないとして痛烈に批判されたことがあったが、³²⁰⁾いまこの『昔の同志への手紙』の中でゲルツェンは、「だが農民とはいったい何なのかを、われわれは知らないのではないだろうか。彼らの根づよい力、根づよい因循とはどのようなものなのか？ 革命の手から亡命貴族の土地を奪い取った後に、まさに彼らは共和国と革命とをペテンにかけたのである。勿論彼らは愚鈍と無知から飛びのき、飛びかかったのだ……しかしここにすべての重要さがある。」³²¹⁾と書いている。これはフランス革命における農民の行動について述べたものであるが、ここには農民のエゴイズムについてきわめてリアリスティックな見方がよく出ている。このような認識に立った上で、ゲルツェンは土地所有権や遺産の問題についても、以上に見た如き主張をしているのである。

〔第三書簡〕

『昔の同志への手紙』がもとは二通の手紙から成るものであったことをわれわれは先に見たが、のちに付け加えられた『第三書簡』には、「追記」があってその日付は1869年8月とあり、次の『第四書簡』は1869年7月となっている。この一番最後に書かれた「追記」の中でゲルツェンは、「小さい部分、せまいグループというものは見通しをひどく誤まるものだ。毎日仲間と同じことをくりかえしているうちに、どこにおいてもそれと同じことが語られているものだと自然に確信するようになる。ながいこと自分の力を他人に確信させようとしているうちに……自分でもその力を確信するようになり……最初の敗北までこの確信を持ちつづけることができるようになる」³²²⁾と書いている。これがジュネーブにいるバクーニンやオガリョーフのことをさして言っていることは指摘するまでもあるまい。

この『第三書簡』の冒頭でゲルツェンは、オガリョーフの手紙の一節を紹介したあとで、『革命問題の設定』の中でバクーニンが主張した「言葉の時代はすぎて、行動の時代が来た」という表現をまず取りあげて問題とする。そして自分に対する批判者の側の「今までどうり腕をこまねいて、世紀の終りまでじっと坐っているほかはないのであろうか？」という反論を仮定して、つぎのように答えている。

「世紀の全部か、それとも一部か、私は知らない。しかし信念の一致がなく、力の集中がないあいだは白兵戦に移るべきではあるまい……戦の中で正しいということはあまり意味を持たない。正義が勝利するのは神の裁きにおいてのみであって——われわれは神の干

320) 拙稿『二つの論争(1)』, 73-75頁。

321) Там же, 584, 邦訳200頁参照。

322) Там же, 591-592, 邦訳, 208頁参照。

涉にあまり希望を抱いてはいない。」³²³⁾

ついで彼は「ポーランド蜂起」に例をとり、それが要求においていかに正しく、行動においていかに英雄的であろうとも、力関係においてまったく不釣り合なものであり、不可解なものであったと指摘し、「ポーランド人を駆り立てた人びとは、現在良心にどのような痛みを感じているであろうか？」と問い質している。これがバクーニンをさすこともまた、あらためて言うまでもあるまい。

ついで彼は以前にあの『向う岸から』の中でも述べた歴史観をくりかえす。即ち人間の歴史の「道は決して変えがたいものではない。反対にそれは、状況とともに、理解とともに、個人の力とともに変化するものだ。個人は環境や事件によって作られるが、事件もまた個人によって実現され、自らの上にその刻印を記す。そこにあるのは相互作用である。」したがって「われわれの力は、思想の力の中に、真理の力の中に、歴史的適合性の中にある。」「インターナショナル」によって代表される労働力の国際会議も、プロパガンダによって強いのであって、物質的にはストライキという「消極的な力以上に出るものではない。」そして「言葉と行為」とを分離しうるかのように考えることが、いかに大きな誤りであるかを指摘しつつ、この点では革命陣営よりもその敵の方が、言葉の力をはるかに知悉しているとも述べている。

ついで彼は、この書簡において「人民」と「国家」とを取りあげて論じている。「人民は本能的に保守主義者である。彼らは他のものを何ひとつ知らぬ故に、現存の諸条件のほかに理想をもっていない。彼らの理想はブルジョワ的満足である。」³²⁴⁾と指摘しつつ、このような人民の本性について、抽象の中に生きてきた革命家がいかに知るところ少ないかを批判する。これら民衆の中から出ないで、書物や党派の中から出て来た革命の伝道者たちは、歴史のすべての畑を焼きはらうことからその経済的変革を始めることが可能だと信じているが、この畑が人民の精神生活や習慣や慰めといった直接の地盤をなしていることには気づいていない。したがって「人民の保守主義と戦うことが、王座や説教の保守主義と戦うことよりもむずかしい」ということが、彼らにはわからないのだという。

以上のような「人民の保守主義」はまさに七年前にツルゲーネフがゲルツェンにあてた手紙の中で指摘したところであることをわれわれはすでに見てきた。人民の「理想がブルジョワ的満足」にあるということもツルゲーネフの意見であった。³²⁵⁾今ここにおいてゲルツェンの晩年の文章の中に、このような主張をみるとき、あらためて七年前の論争が、彼の思想の中にどれほど根強い影響力を持ち続けたかを、われわれは知るのである。

ついで国家については、それが「人類の……あらゆる種類の共同生活が通過する形式」であり、それ自身は「きまった内容を持たない」ものであるという。即ち国家は反動にも革命にも同じように利用されうるものであって、ラッサールのように、これをもって社会制度の導入のために利用しようとするか、あるいはバクーニンのように、「連合コミューンの生活に解体」させんとするかは、「通常の出産と早産の違いである。」しかし妊娠しているからといって明日出産しなければならないという結論がでてこないように、「国家

323) Там же, 588, 邦訳, 204頁参照。

324) Там же, 589, 邦訳, 206頁参照。

325) 拙稿『二つの論争 (I)』, 73-74頁。

二つの論争

が**過渡期的な形式**だからといって、この形式がすでに**過去**のものだということにはならない。」また「粉ひきの臼がわれわれの粉をひくことができるときに、なんのために粉ひき場をこわす必要があるか？」このような「**根拠に立って**」ゲルツェンは国家の「**否定が理性的な適応**」とは考えない旨を宣言するのである。彼によれば、国家を否定することよりも、大多数の人間が一人前の**成人**となって、国家から脱却することこそ、今後の重要な課題だからである。

〔第四書簡〕

この最後の書簡は、『革命問題の設定』等において主張された科学の否定と破壊への情熱の批判となっている。これら一連のパンフレットは、現代の科学がもっぱら権力と資本にのみ奉仕するが故に、すべからく若者はこれを捨てて、ただちに革命の隊列に参加することを呼びかけているが、『革命問題の設定』にも以下の如き主張が見られる。

「科学に専念することはない。諸君は科学の名において縛られ、無力にされようとしている。科学はこの世界の表現であり、この世界と共に滅びるべきである。人民が勝利をした後に、人民の生活が解放された中から必ずや、新しい、生きた科学が生まれるであろう。」³²⁶⁾

このような主張に対し、まずはじめにゲルツェンは、「科学のための科学」と「利益としてのみの科学」というような問題設定は、それ自体間違っており、「**科学的科学**なくしては**応用科学**も存在しないであろう。」と反論する。そして、「本を閉じ、科学を捨てて、破壊のために何か無意味な戦いに行くように荒々しく呼びかけることは、もっとも狂暴な、もっとも有毒なデマゴギーに属する」ときびしい言葉で批判する。

ついで偉大な変革が悪しき情熱の解放によってなすとげられることは決してなかったとして、「**発展や協定よりも、混乱や粗暴な力をよしとするような人びとの真剣さを私は信じない**」と断言する。³²⁷⁾ その上で彼は、このような「**頑迷さに発する粗暴な、拘束されない激情**」が、世代から世代へと受けつがれてきたすぐれた文化遺産を容赦なく破壊してきた例を悲しく思い起す。ゲルツェンに言わしめれば、このような文化遺産こそ、「**さまざまな時代の個性と創造性が堆積してきた資本**」であり、「**歴史が結晶した**」ものにほかならないからである。ヨーロッパ各地の博物館や記念物を訪れた多くの経験を持つゲルツェンは、宗教戦争や革命によって、それらの文化遺産がどれほど破壊されてきたかを、ここにおいて回想しつつ、最後につきのように述べている。

「人びとには伝道が必要である——根気強い、たえまない伝道、労働者へも主人にも、農民にも町人にもひとしく向けられた伝道が必要である。われわれには前衛の士官よりも、破壊の工兵よりも、味方だけでなく敵にも教えを説く便が必要なのである。」³²⁸⁾ と。

326) Герцен, XX, 861より引用。

327) Там же, 593, 邦訳, 210頁参照。

328) Там же, 593, 邦訳, 210頁参照。

外川 継 男

ゲルツェンがパリで死んだのは、この文章を書いたから、わずか半年たらず後の1870年1月のことであり、バクーニンはそれから6年後の1876年にベルンで、そしてツルゲーネフはさらにそれから7年たった1883年にパリ郊外で死んだ。

[完, 1972. 10. 20 札幌]

[附記] 本稿は昭和47年度科学研究費による研究成果の一部である。なお当初『エピローグ』において、ゲルツェン死後の「ネチャーエフ事件」を扱う予定であったが、あまりにも紙幅を取りすぎたため、これは別の機会にゆずることとした。

Herzen's Polemics with Turgenev and Bakunin

Tsuguo TOGAWA

This study is concerned with Alexander Herzen's political, social and historical thoughts in the light of his polemics with Ivan Turgenev and Michael Bakunin. In order to understand the background and the real meaning of the polemics, the author tries to follow their interrelations from the early 40's up to the late 60's of the 19th century. The whole study is divided into eight chapters:

- I. Prologue
- II. "One more variation on the old theme"
- III. *The Bell* of London
- IV. "The ends and the beginnings"
- V. *Land and Liberty*
- VI. Herzen, Bakunin and the Polish Uprising of 1863
- VII. Herzen, Bakunin and the First International
- VIII. "Letters to an old comrade"

The first half (Ch. I-IV) was published in the *Slavic Studies*, No. 15.